加古鷹おんらいん！

プレリュード

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ＶＲ艦これ。

フルダイブ型のゲームとして生まれた、艦娘になれるという提督垂涎な夢のゲーム。

艦娘になりきるもよし。プレイヤーとして攻略に勤しむもよし。

これはそんな数多のプレイヤーたちの中で、自分たちらしく楽しもうとする小さなクランのお話。

本作は帝都造営先生の翔鶴ねえ☆オンライン！（ｈｔｔｐｓ：／／ｓｙｏｓｅｔｕ．

ｏｒｇ／ｎｏｖｅｌ／１１２８９４／）の三次創作になります。ご本人から許可はいただいた上での投稿となります。

目次

クラン結成編
クラン結成編1 ―― 1
クラン結成編2 ―― 14
クラン結成編3 ―― 24
クラン結成編4 ―― 34
クラン結成編5 ―― 45
クラン結成編6 ―― 56
クラン結成編7 ―― 68
通常海域攻略編
通常海域攻略編1 ―― 79
通常海域攻略編2 ―― 88
通常海域攻略編3 ―― 98
二航戦称号戦編
二航戦称号戦編1 ―― 107
二航戦称号戦編2 ―― 118
二航戦称号戦編3 ―― 127
二航戦称号戦編4 ―― 136
二航戦称号戦編5 ―― 144
閑話休題編
閑話休題1 ―― 155
閑話休題2 ―― 165
コラボ企画：クラン対抗戦編
コラボ企画：クラン対抗戦編1 ―― 175
コラボ企画：クラン対抗戦編2

187
コラボ企画：クラン対抗演習編３
199
コラボ企画：クラン対抗戦編４
212
ラスト・スタンド ―――― 222
キャラクター紹介 ―――― 235

クラン結成編
クラン結成編１

「ねえ、加古。ねえ、加古ってば」
「んぁー……ぅぅん……」
「起きて。ねえ、加古って」
「うあー……」
　いくら揺すっても加古は起きてくれそうにありません。そろそろ動かなくちゃいけないんですけれど、毛布のミノムシになってしまったら加古はそうそう起きてくれないんです。
「古鷹ぁー……あと5分でいいから寝かせてぇ……」
「それさっきも言ってたでしょ！　ほら、早く起きて！」
　ちょっとキツめに言うとようやくミノムシさんはサナギを破って出てきてくれました。相変わらず眠たそうに目を擦っていますけど、しばらくするとしゃんとしてくれるはずです。
「で、なにするんだっけ？」

「もう！　艦隊（クラン）解放任務をやるって昨日、決めたでしょ！」

艦隊（クラン）、なんて言っても艦隊が組めないわけじゃありません。艦これ、つまり艦隊これくしょんのフルダイブＶＲゲームを銘打っているこのゲームで解放任務をしなくちゃ艦隊が組めない、なんてことがあったら苦情が殺到してしまいます。

ならどういう違いがあるのかというと、他のゲーム用語で説明する「チーム」と「ギルド」のような感覚です。

チームはあくまでもその場で組んで一緒に海域を攻略する、いわば即席艦隊です。ログイン中だけその関係は継続されて、ログアウトすると解消されます。対してギルドは加盟したら脱退するかギルドマスターからの除名処分を受けない限り、永続に名前はギルドの名簿に刻まれ続けます。もちろんこれらの例外として垢（アカウント凍結）ＢＡＮ処分を受けたプレイヤーは名前が消えちゃいますけれど。

あれ、説明が長くなっちゃいました。加古にもよく言われるんです。古鷹は説明が長いって。でもきちんと説明しようと思ったら長くなっちゃうのは仕方ないと思うんです。加古はもう少し、しっかりと……

いけない、いけない。また話がへんな方向に行ってしまいました。とにかく、私たちは今からギルド……つまり自分たちの艦隊（クラン）を作るために解放任務をやろうとしているんです。

野良の加古鷹ペアとして活動していくことも楽しいんですけれど、人手がたくさんいるイベントなどに参加しようとすると、野良ではイベントに参加する前に一緒に戦ってくれる艦娘（ひと）を探してから攻略、ということになってしまってどうしても余計な時間をかけてしまいます。だからいっそのこと自分たちでクランを作ってしまおう！　とふたりで話した結果、艦隊解放任務を受けることにしました。

「おおーい、古鷹ぁー。早くやろうぜー」

「あ、待ってよ加古。任務を受注しなきゃ」

いつものようにメニュー画面を開くと任務欄にある『沖ノ島戦闘哨戒！　艦隊を編成せよ！』という任務にチェックマークを入れます。

「終わった？」

「うん、受注完了したよ」

「じゃあ行こっか」

出撃です。とりあえず私のマイルームから一緒に出ると、舞鶴サーバーの出撃ドックに移動します。

「本当に２人だけで行くの？」

「んー……まあ、とりあえずやってみて難しそうなら協力を他の無所属艦娘とかあがってる知り合いに頼めばいいよ。威力偵察ってやつ。もしかしたら任務を受けることで

敵艦隊の編成が変わってるかもしれないし」

ぐいーっと伸びながら加古が艤装を展開させた。同じように私も古鷹の艤装を展開します。ちゃんと意識が覚醒していればこんなふうに冷静な判断が加古はできるんだから、いつもこうしていれないいのになって思います。しゃんとしていればかっこいいのに。

「よい、しょっと」

艤装をきちんと装着できているかざっと確認。もちろん、ゲームですから装着がうまくできていないということはありません。ただ服を着たときに衣擦れがないかどうかを確認するのと同じ感覚です。深い意味はありません。ちょっとした様式美です。

でもせっかくロールプレイを楽しむゲームなんです。これくらいの遊び心というゆとりがあってもいいと思うんです。

「んじゃあ、今回は偵察。あわよくば撃破して任務達成するって方向で」

「うん、わかった」

旗艦である加古がいつものようにゆるーく方針を発表します。私と加古はいつも一緒に出撃するんですけど、いつも旗艦は加古なんです。もちろん、野良で活動する過程で相手方が旗艦をする場合は譲りましたけど。

「加古、偵察機を飛ばそうか?」

「ん？　あー、いいんじゃない？　方向は古鷹に任せる。っていうかあたしも飛ばすか」
揃ってカタパルトに偵察機をセット。心の中でスリーカウントをした後に私は零式観測機を飛ばしました。ほぼ同じタイミングで加古からも観測機が飛び立ちます。
すると私の視界の右下に小さな丸が表示されました。丸のなかにはコミカルに描かれた観測機のマーク。
これをちょん、とタップするとウィンドウが開いて私の飛ばした観測機が見ている映像が流れます。せっかく飛ばしたのに見ないのではなんのためかわからなくなってしまうので、もちろんタップ。
「うーん、いないなぁ……」
「こっちもいないよー」
残念ながら観測機から送られてくる映像は蒼い海と白い波ばかり。深海棲艦の影も形も移しません。
「あー、あたしヒット……でもだめだ。これ本隊（ボス）じゃない。余計なのとやりあって変に弾も燃料も使ってらんないもんねえ。艦隊、取り舵いっぱーい」
道中に余分な戦闘をしないように加古が進路を変えたので、私も僚艦としてその指示に従います。少し速度はあげて急ぎ足。
それにしてもいいお天気です。波もそれほど高くないし、雲もそこまで多くありませ

ん。あんまり雲が出てると敵の艦載機を発見できなくなるのであんまり好きじゃないです。
「ふわぁぁぁ……」
「加古、だめだからね？」
「あ、あくびしただけじゃんか……」
　加古がちょっと傷ついた顔をします。でも日頃の行動が悪いんです。いつも何かにつけてごろごろとしてばっかりだから私もこういう風に言わなきゃいけないんですっ！
「古鷹が信用してくれないー」
「棒読みで言ってもだめだからねっ」
「だいじょうぶだって。ほら……さっ！」
　加古の主砲が火を吹いて奇襲をしかけようとしていた深海棲艦の艦隊に刺さります。
ああ、やっぱり気づいていたんだ。
「加古、偵察に出してた観測機、戻すね」
「りょーかい。周囲の哨戒させといて」
　加古がぐるぐると首を回しながら回避行動を取ります。これはあんまり時間はかからずに済みそう。どうやら見つかったのは本隊ではないみたいなので加古がほとんど

片付けてくれるはず。見たところによると戦艦などもいないようですし。
その間に私は観測機に帰還の指示を出します。そろそろ観測機の燃料について考え始めていた頃ですし、ちょうどいいです。
さて、あんまり加古を放置しておくのもよくないですし、ちょっとくらい援護をしましょう。
「それっ」
狙い澄ました砲弾が加古と交戦している深海棲艦に当たって弾けます。これ以上は手を出さなくてもいいでしょう。
あとは加古がやってくれるから。
「てやぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」
加古が重巡リ級の口に砲塔をねじ込んで吹き飛ばしました。やっぱり加古はとても攻撃的だなあ、といつも思います。私はあそこまで接近するのは苦手なのでとてもとても真似できません。
「古鷹！　さっさと本隊、落とすよ！」
「えっ？　あ、うん……」
偵察のはず、なんだけどなあ……

どうも、こんにちは。古鷹です。先ほどの出撃から無傷とはいえないまでも帰ってきた古鷹です。現在はサービスシーン、もとい入渠中です。もちろん加古と2人だけですよ？

ちなみに具体的な損傷具合は中破です。加古も中破です。でもそんなことは問題じゃないんです。いえ、別に大きな問題ではないんですけど、問題なんです。

「いやー、結構ギリギリだったけどいけるもんだねえ！」

加古が豪快に湯船に浸かりながら笑います。私も控えめにちょっと笑いながらお湯の中に顔を沈めてぶくぶくと泡を生産。

まさかたった2人で勝っちゃうなんて……

偵察して、もしもいけたら攻略。確かにそうしようと話し合った上で私たちは出撃しました。でも敵艦隊の数は6。しかも連戦になることが前提です。一方で私たちは2人から数が増えることはありません。正直に言って難しいだろうな、と私は思っていました。

ええ、加古が大暴れして旗艦を真っ先に沈めてしまうまでは。

えい、ままよ！　と私も加古の援護に入り、加古を狙った深海棲艦を攻撃してヘイト値を稼ぎ、私に目標（タゲ）を移した深海棲艦を加古が仕留める。

そのサイクルを繰り返した結果、２人で沖ノ島海域をクリアしてしまい、結果として任務（クエスト）欄にある『沖ノ島戦闘哨戒！　艦隊を編成せよ！』の任務は完了になっていました。

「これであたしらも艦隊（クラン）が持てるねぇ」

「いや、早いよ⁉　２人だけで勝っちゃうなんて前代未聞だよ⁉」

「でも古鷹だって後半はノリノリだったじゃん。観測機を敵の鼻先に急降下させて視界を奪う、なんてむちゃくちゃやったりしてさ」

……それを言われるとちょっぴり痛いところです。

認めましょう。私も「あっ、勝てそう」って思った時からはアグレッシブになっていました。

しかしあの時はテンションが上がっていたんです。テンションアゲアゲです。多少、ネジが飛んでしまったとしても仕方ないと思うんです。

冷静になってみると、「あれ、これってすごいことしちゃったんじゃ……」ってじわじわと気づいてきたんです。

確かに敵艦隊に空母はいません。だから制空権を気にしなくてもいいぶんだけ、重巡洋艦にとっては楽ではあるでしょう。

でも相手に戦艦はいるんですよ？　普通は偵察だけで終わると思うじゃないですか。

「うぅ……絶対、噂になるよ……」

「まー、いいんじゃない？　クランの加入希望が増えるかもしんないじゃん」
「それを処理するのって私なんだけど……」
そう。なぜか艦隊旗艦（クランマスター）は私なんです。
いえ、当然といえば当然です。だって任務を受注したのは私なんですから。
絶対に加古はわかっていて何も言わなかったような気がするんですけど、証拠はないので黙っておきます。
それに加古に任せたらとんでもないことになりそうなのはちょっと思っていたことでもあるので。
「記念すべき第一号は誰だろうねえ」
「もう！　加入するか判断するのは加古も手伝ってよ！」
「わかってるってば」
カラカラと加古が笑います。うん、そう悲観的になるのもよくないかな。少しは私も加古を見習ってケ・セラ・セラ的に考えてみることにしましょう。
さあっ！　加入希望者さん、いらっしゃーい！

……なんかやけっぱちっぽいですね、これ。

「ねー、ねー。このニュース、知ってる？」
　きゃいきゃいとはしゃぐ相棒が何かを見せてきた。いわゆるビラのようなもので、それ自体はいたって不思議のないもの。とりあえず私は気になってビラに目を通す。
「なにそれ？　新規クランの結成とメンバー募集？　何もニュースってほどじゃないじゃん」
「それがそれがなんと！　たった２人で攻略しちゃったんだって！」
「２人？　何かの冗談じゃなくって？」
「本当だって。ほら、ワタシウソツカナイ」
「うわー、うさんくさい……」
　相棒が急にロボ声を作り始めたものだから嘘くささがマシマシになった。けれど、ビラに書いてある艦隊旗艦（クランマスター）とメンバーの名前と艦娘ＩＤを見た瞬間に私の中ですとん、と腑に落ちた。
「ねえ、見てみなよ。この２人、『双撃の加古鷹』じゃない？」

「えっ？　ああ、確かに。そっかー、なるほどなるほど。あの野良組が……」
「いろんなクランからの引く手あまただろうに、まったくクランに所属する気配がないもんだから変だと思ってたらまさか作るとは」
　さっぱりと言っているけれど、私は結構な衝撃を受けていた。２人でクラン解放任務をクリアした、ということは沖ノ島を２人で突破したということだ。あの海域は空母がボスにいないため、空母なしの艦隊でクリアしたという話は日常的に聞く。でも２人だけでクリアした、なんて話はなかなか聞いたことがない。重巡洋艦だけ、というケースは初めてだ。
「ねぇ、ねぇ！　せっかくだし、ちょっと見に行ってみない？」
「煽りで行くのは失礼じゃない？」
「ちょっと見に行くだけ！　それだけだから！」
　お願い！　と相棒が手を合わせてきたらもう私は陥落。やれやれと呆れつつも、方針は決定している。
「明日ね。明日、行こっか」
「さっすが！」
　わかってるぅー、と相棒が私に飛びかかる。暑苦しいから離れて、と邪険に扱えば「ひどい！」と芝居がかった動きで泣き真似を。はたから見たらうざいことこの上ないんだ

ろうけど、こんなのは定型文みたいなもの。私も別に慣れたものだ。
「じゃっ、明日いつもの時間にね！」
「はいはい、遅れないでよね」
相棒の姿がヒュン、と消える。自室へ帰還（ログアウト）したのはわかっているから、私も適当に別れの挨拶だけはした。
相棒も帰ってしまったところで私も帰ろうと、メニュー画面を立ち上げてログアウトボタンをタップする。世界から私の体が消えていく中でぼんやり考えていたことがひとつ。
今のクランに馴染みきってるわけでもなし、新たな巣を探してみるのも悪くないかもしれない。

クラン結成編2

クランの設立を宣言して、加入希望の募集をかけたのがつい先日。最初はどんな人が来るのかな、とわくわくして待ち続けました。

「……来ないね、加古」

「来ないなぁ」

今のところ接触なしです……。私か加古に連絡できるように募集チラシに私と加古の艦娘ＩＤを記載しておいたんですけど、メッセージは来てません。もちろん、私たちに直の接触をしてきてくれた方も。

「なんで誰も来ないんだろうね……」

「さあ？　ま、いずれは来るんじゃない？」

「適当なことばっかり言って……」

でもあながち間違いじゃないのかもしれません。果報は寝て待て、という言葉があるくらいです。ちょっと物資保管庫（アイテムストレージ）という名の個室でゆっくりするくらいの余裕を見せた方がいいのかもしれません。

「加古、部屋に行く？」

「えっ？　まだお昼なのに今からやるの？」
「もう！　そういう意味じゃないって！」
　別に誘っているわけじゃありません！　私はそんなにふしだらじゃないです！　お昼からそんなことをしようなんて、とんでもないです！
「え、じゃあどういう意味だった？」
「普通に待つためだよ！　ずっとここで立ち続けていたら疲れちゃうから……」
「ああ、そういう。でも古鷹の部屋もあたしの部屋もそんなに家具の取り揃えよくないじゃん」
「そうなんだよね……」
　そう、実はこのゲーム、アイテムストレージがマイルームとして機能するんです。マイルームにある収納から取り出すという形でアイテムを取り出すことも可能です。
　そしてマイルームという名を冠するとおり、家具を配置して自分だけの部屋を作ることもできるんです。運営が提供する既存の家具をゲーム内通貨によって買うのもよし、ちょっとこなれた人になってくると、自分でＭｏｄ作成を利用して家具をデザインする人もいます。
　中にはＭｏｄ作成スキルを利用して、ちょっとしたゲーム内通貨の商売をする人もいます。現金（リアルマネー）が絡んだりするとさすがに運営も対応せざるを得なくなるみたいですけ

ど、ゲーム内通貨や装備とのトレードであるのなら介入しない方針みたいです。
　まあ、それはさておき。私も加古もあまりマイルームの編集に熱心だったわけではないので、初期の家具（ダンボール）と安めの家具しかないのであまりくつろげるとは言えません。
「そういえばクランルームも解放されるんだからクランルームも家具とか置かなきゃ」
「んー、でもそれはおいおいでいいでしょ。僚艦（メンバー）集めが先決じゃない？」
「そうだよね。うーん、早く誰か来ないかなあ」
　クランルームを整えたいのは山々だけれど、クランだけ整えてメンバーがいないのであればそれは中身のない宝箱。だから早く誰か来ないでしょうか。話をするだけでもいいんですけど……。
「というかあれじゃない？　クランネームがいろいろとあれだから来ないんじゃない？」
「ええっ!?　加古も賛成してくれたよね？」
「いや、別に好きにしたらって言っただけだけど」
　うっ、確かに。そこら辺は加古が適当に流す癖があることを、クラン結成に舞い上がって忘れていたことは否定できません。
「で、でも悪くはないよね？　普通だよね？」
「やー、でもねえ。『イーリス・アイリス』ってなかなかファンシーだと思うよ？」

「やっぱり変かなあ……」

単純にアイリスという花の花言葉が『信じる心』だったから気に入ってつけてみただけなんです。イーリスっていうのも語感がよくて『虹』って意味も悪くないと思ったからつけたんです。

そう、だからあれは普通です。普通なんですっ。いいじゃないですか、『イーリス・アイリス』。私は好きですよ。ええ、とっても。

変じゃ、ないですよね？　ね？

「ああ、もう。大丈夫だって。古鷹は不安になるとすぐ顔に出るんだから」

「そ、そうかな……」

「あたしはいいと思うよ。古鷹はクランマスターなんだからもっとドンと構えておけばいいんだって」

加古が励ましてくれるくらい私の顔には不安が漂っていたのでしょうか。恨むべきはこのゲームキャラクターの表情モデルが細かく作られていることと、感情エンジンが恐ろしく緻密に組まれていることでしょう。

ちょっとした感情の動きで簡単にキャラクターの表情は動いてしまうんです。慣れてくるとうまくコントロールできるようになって、ころころと表情が変わることはなくなるんですけどね。

実は簡単な指針として表情が不必要にコロコロ変わっているかどうかでＶＲゲーム慣れしているかどうかわかったりするんです。必要以上にコロコロと表情が変わっていたらまだ経験が浅い証拠で、逆にまったく動かない人やしたい表情を浮かべられる人はＶＲ慣れしている証拠です。

私もそれなりにはＶＲ慣れしているはずなんですけど、どうも咄嗟になると表情がころっと動いてしまうみたいです。

「あれ、メッセージが来た」

たぶんこういう時とか。きっとすごく私の顔は綻んでいるんだと思います。

だってクランについてお話がしたい、なんて待ちに待ったメッセージが来たんですから！

「え、まじ？　ちょっとあたしにも見せてくんない？」

興味津々の様子で加古がずずいっと私に近づいてきた。どんなメッセージが送られてきたのか気になっているのは明白なので、メニュー画面を共通可視モードにすると加古にも見られるようにしました。

「えっと……クランのご解放、おめでとうございます？　なんかやけに丁寧だな」

「きっと礼儀正しい人なんだよ。お話をとりあえず聞きたいっていうことだけど、どんな方なんだろう？」

「古鷹、２人で来るって書いてあるけど」
「えっ？　あっ、ほんとだ。２人かぁ。珍しく……もないね」
　現に私と加古みたいにペアで行動するプレイヤーもまま存在します。ブラウザゲーム時代に流行ったカップリングなどはやっぱり多いですね。加古と古鷹もよくカップリングでありましたし。
　まあ、私が古鷹を選んだのは別の理由もありますけど。
　いけません。また話が明後日の方向に。えっと、とにかく会いに来たいということでいいんでしょうか。
「とりあえず返信するね。場所は……食堂でいいよね？」
「いいんじゃない？　どうせ向こうさんはこっちのことわかってるんだし。その後でマイルームなりなんなりと静かに話せるところに移動ってことで」
「わかった。じゃあ、そう返信しとくね」
　メッセージ機能にある返信を選択して、送り主の艦娘ＩＤをメッセージの送信先に指定。きちんとした文章だったので、どう返そうかなと考えていた時、加古が急に私のメッセージ画面をのぞき込んで真剣に見つめ始めました。
「ど、どうしたの、加古？」
「古鷹、この艦娘ＩＤよく見た？」

「えっ？　ううん、あんまりしっかり見てないけど……」
「あたし、この送り主わかったわ。というか一緒に来るっていうもう1人もわかった」
わざとなんでしょう。メッセージには送り主の艦娘ＩＤのみで名前、つまり何の艦娘なのか書かれていませんでした。会った時のお楽しみ、ということなのかなと思って変にも思いませんでしたけれど。
「この人たちえらい大物だぞ」
「大物？」
「このメッセージを送ってきたのは『比翼の二航戦』だ」
「うそ……そ、そんな方たちがなんで……？」
二航戦は人気が高くて、結構なプレイヤー数がいます。でもその中で『比翼の二航戦』の二つ名を冠するペアはたったひとつ。
曰く、並み居る艦載機を尽く叩き落とす苛烈な航空戦。
曰く、ありえないとしか思えない軌道を描いて飛ぶ攻撃機。
そしてそれらが高度なレベルの連携により襲いかかる。
ひとよんで『比翼の二航戦』。
空母でない私ですら聞いたことのある名前です。確か空母オンリーのグランプリで上位層の常連だったはず。

「ど、どどどどうしよう!?　そんな人たちが来るなんて……え、ええっとお茶菓子はうちにあったっけ？　あんまりいいの置いてない気がするから私、今からちょっと行って買ってくるね。お湯を沸かしておいてくれる、れ……」
「古鷹、落ち着け」
「あうっ」
　加古に優しくデコピンをされて、ちょっと冷静になれました。深呼吸をしてさらに落ち着かせます。
「これはあくまでクランについて話が聞きたいってだけだから。話だけして加入するか決めるってやつ。そんな身構えなくても大丈夫だって」
「そうかな……」
「あたしもいるから大丈夫だって。入るなら歓迎すればいいし、そうじゃないならご縁がなかった。それくらいざっくりと古鷹も考えたら？」
　なんとなく、加古の言っていることにも一理ある気がします。気にしすぎても問題なのかもしれませんね。
「よし！　どうなるかわからないけど、どんと来いっ！」
「そーそー。その調子。んじゃ、行こっか。食堂だっけ？　目の前ってかそこじゃん」
「施設移動使う？　加古はあんまり歩きたがらないでしょ？」

「……たしかにあたしはものぐさだけどさぁ、そこまでじゃないからね？」

ちょっと傷ついた様子で加古がじっとりと私を見つめます。ごめんごめんとからかったことを謝れば、ふくれたままでも許してくれました。

この手のゲームでよくあるシステム、施設移動。わざわざ徒歩で移動すると、時間がかかるせいでめんどうがるプレイヤーが多いので、主要施設にはワープすることができるようになっています。私はあの有名な竜の物語シリーズが好きだったのでルーラ、と思わず言ってしまいます。クリスタルの戦士とかが出てくるシリーズが好きなプレイヤーは飛空艇とかそんな感じでしょうか。

「じゃあ、行こっか。もしかしたらもう待っているかもしれないし……」

「食堂に行っても誰も待ってませんよ？」

「そうだねー、飛龍。だって私たちダイレクトに来ちゃったし」

「ひゃうっ！」

いきなり横から話しかけられて私は飛び上がるかと思うくらい驚きました。いえ、事実としてちょっと浮いてたかもしれません。変な声も出てしまいました……

「いや、驚かしたのは悪かったけどさすがに隠れられると……」

私はとっさのことで加古の影に飛び込んで隠れてしまったので声をかけてきた方たちも気まずそうです。これは悪いことをしてしまいました。

「えっと、ごめんなさい」
「いやいや、変なことした私らが悪いから。こちらこそごめんなさい」
山吹色の和服姿の飛龍さんが腰を折って謝っていただいたので、いえいえと私も頭を下げます。
「改めましてっと。二航戦の飛龍です」
「そして二航戦のもう片割れ、蒼龍ですっ」
なんとも元気があって気持ちのいい挨拶です。『比翼の二航戦』なんて二つ名を持つ方だから厳しい方なのかな、と思っていましたがそんなことはないみたいですね。
「早速なんだけどお話を……」
「あ、私たちを『イーリス・アイリス』に入れてくださーいっ」
お話を、と切り出そうとした飛龍さんを遮って蒼龍さんが加入希望宣言。
「「えええええええええっ!?」」
私、加古、飛龍さん。３人ぶんの驚愕の声が重なって反響した結果、ものすごく注目されてしまいました……。
というか、どうして飛龍さんまで驚いてるんですか。

クラン結成編3

とりあえず場所を移しましょうか、という私の提案によって私と加古、飛龍さんと蒼龍さんは私のマイルームに来ています。
「で、加入の件なんだけれど……」
「ちょーっと待とっか、蒼龍。ウェイト。おすわり」
「え、なにか私やったっけ？」
「うん、やった。やらかした。それも盛大に」
飛龍さんが頭を抱えている一方で、蒼龍さんが「え、なに？」みたいな顔できょとんと首をかしげます。
どうやら飛龍さんと蒼龍さんの間で何かしら意見を統一させた上で来ていたと思っていましたが、そうではないようです。
「あのね、蒼龍。たしか私らは遠目から様子を見つつ、とりあえず話を聞いてみようっていうことにしていたはずなんだけど」
「え、でもよさげだしよくない？」
「いっつも蒼龍はそうやって突っ走るんだから……」

頭痛でもするのか、飛龍さんが頭を押さえています。

うーん、よくわかりませんけどクランへの加入は前向きに検討していただいていたんでしょうか。それにしても様子を見ていたという一言が気になります。加古と話している時にだんだんとボリュームが上がっていたんですけど、もしかしてそんなにうるさかったのでしょうか。

「すみません、様子を見ていたって私たちそんなに目立ちましたか……？」

「目立つかって……『双撃の加古鷹』を知らない方が無理だと思うけど」

「えっ、あれ？　か、加古？　あの名前ってそんなに広がっているの？」

飛龍さんが変なものを見るような眼で私と加古を見つめます。ええ、確かに巷でそんなふうに呼ばれたことがあるのは知っていますけれど、まさかそこまで広まっているとは思いませんでした。

なんだかちょっと気恥ずかしいです。仰々しいといいますか、なんと言いますか。悪ふざけでどこかの誰かが呼び始めたくらいにしか思っていなかったですし、人の噂も七十五日くらいにしか思っていませんでした。

「古鷹は噂に関して無頓着だからねえ。そこそこあたしと古鷹は知られてるよ？」

「そ、そんな……う、嘘だよね？」

「いんや。マジ」

「元からそこそこ広まってたけど、今回の件でさらに広まってるのよ」
「今回の件、ですか？」
飛龍さんが言っているところの「今回の件」というのは一体なんでしょうか。元から野良で活動していた私たちに大きなことなんて……。
ありましたね。そういえば。
「もしかして、クラン解放任務だったり……」
「ごめん、それ以外になにがあると思う？」
「ですよね……」
思い当たることといったらそれくらいだな、と思っていながら飛龍さんに訊ねたらやっぱりでした。でも私も2人で勝てるとは思っていなかったんですよ？
「さすがにクラン解放任務を重巡洋艦2隻だけで攻略した、なんて噂にならない方が無理あるってば。超至近距離から重い一撃で攻める加古に、遠距離から脅威の命中率で攻める古鷹。異なる方法でありながら両者共に攻め。ついた名前が『双撃の加古鷹』ってね」
た、たしかにそうですけども……。私は遠距離から。加古は至近距離から。加古の手が回らない敵は私が撃ち抜いて、加古が私に攻撃が向かないように引きつけて打ち倒してくれます。

　これが私たちの戦闘方法。確かに言われてみれば私たちは攻めに偏ってるかもしれません。
　でもそんな二つ名がつけられていることは聞いていても、それが広まっているなんて夢にも思いませんでした。
「ま、そういうわけでおふたりの名前はわりと知れ渡っているのよ。今回の件でそれが加速したってとこ」
「すっごいよねー。まさか私も重巡洋艦ふたりでクラン解放任務を片付けちゃうところが出てくるとは思わなかったもん」
「さっきから聞いてたけどさ、それ『比翼の二航戦』が言う？　そっちも相当、っていうか名前は『比翼の二航戦』の方が売れてるじゃん」
　ぼんやりと話の成り行きを私に任せて聞き流していた加古がふと口を挟みました。そうなの？　という意味を込めて私は加古の方を見ます。聞いたことはあってもどれくらいすごいのかはわからないんです。
「古鷹は本当に……えーっと、しっかりしてるくせにどっか抜けてる古鷹が知ってるくらい有名ってこと」
「ちょっと加古!?　それってどういう意味?!」
「ええ!?　事実じゃん！　自分のことすら知らなかったんだからさぁ！」

「確かに事実だけど！　でも人前で言わなくったっていいじゃない！」
　加古のさすがに聞き過ごせない一言に対して噛み付いた私に加古が返したのは否定できない事実。た、たしかにそうですよ？　私はたまに「抜けてるね」って言われることもありますけど！　それでも初対面の人がいる前で言うことじゃないと思うんですっ！
「ふふ、あははは っ」
「ほら！　加古のせいで蒼龍さんに笑われた！」
「ごめん、ごめん。別にバカにしてるわけじゃないの。ただふたりの息がぴったりっていうかさ。それになんていうの、雰囲気？　みたいなのがいいなって」
「そう、ですか？」
　蒼龍さんが手刀を切って謝ります。いえ、別に笑われたことは怒ってませんよ？　私たちをバカにした笑いじゃないのはわかりますし。
　それにしてもいい雰囲気ですか。ちょっと本人たちにはわからないものです。和気藹々、とでも言うんでしょうか。でもさっき加古に向かって噛み付いて見せたのも本気で怒っているわけではないから、仲が悪いというわけではありませんし、雰囲気がいいという表現も当たらずとも遠からずといったところでしょうか。
「そうだって。そうじゃなければ私たちも加入しようなんて言わないし」

「だからさ、蒼龍。勝手に話を進めるのやめて？　相手方と話して決めるって事前に打ち合わせしたよね？」
「え？　でもいいじゃん。私はこのクランなら入ってもいいかなって思ったよ？」
「そうじゃなくてね、蒼龍。なーんでいっつも私に相談せず突っ走っちゃうのかな？」
　飛龍さん、ちょっと怒り気味です。でも本気じゃないことはすぐわかります。だって飛龍さんは頭を抱えてはいますけれど、演技っぽさが混ざっています。あれは私が加古に対して諌めるくらいの時にするやり方とそっくりですから。
「そもそも私らだけで話は進められないのわかってる？」
「うん。だからお願いしたんだよ？　加入させてくださーいって」
「いや、そうなんだけどさ……。勝手に進められると私も困惑するじゃん」
　飛龍さんが蒼龍さんをたしなめます。これがこのおふたりの日常なんでしょうか。なんといいますか、とても穏やかです。
「とっても仲がいいんですね」
「ふふん、やっぱりそう見えちゃう？　見えちゃう？」
　蒼龍さんが得意げに背中を逸らせて誇ります。一方で飛龍さん、さっきまでの勢いはなくてちょっと照れくさそうです。
「ま、まあ蒼龍とは腐れ縁だしさ。こっちも慣れたもんっていうか」

「えー、飛龍ひどーい。腐れ縁なんてさぁ。ちゃんといつもみたいに『相棒』って言ってよぉ」
「あー、もう！　この話はやめ！　ええい、蒼龍はくっつくな！」
　ニマニマと悪戯っぽい笑みでくっつく蒼龍さんを飛龍さんが引き離そうと躍起になっています。どこか微笑ましい風景にクスッと私は笑ってしまいました。
「と、とにかく。まだ古鷹さんたちの事情もきいてないのに私たちだけで話を進めちゃいけないでしょう」
「ああ、それならいいですよ。私はおふたりが加入したいとおっしゃるなら歓迎しますよ」
「ほら、飛龍！」
「ぐっ……」
　勝ち誇った蒼龍さんに飛龍さんの言葉が詰まります。この2人はなんの勝負をしているんでしょうか。ちょっと疑問です。まあ、仲良きことはいいこと、です。
「古鷹さんがよくても加古さんがいいかはわからないし……」
「ああ、それなら……ほら」
　私が笑いをこらえながらマイルームの片隅に置かれている煎餅布団を指差します。飛龍さんと蒼龍さんが私の指の動きにあわせて視線を動かします。

「「ふふっ」」
そして２人の口から笑い声が漏れ出ました。
私の指差した先には煎餅布団の上でぐっすりと眠っている加古が。
「うぅん……」
「加古も『いいよ』って言ってますから」
本当に正しく言うなら『古鷹の好きにしていいよ』ですけれど。でもこういう時に加古がいびきをかいて寝ている場合は私に任せていい、と加古が判断した時なので私が判断しても大丈夫です。
「どうする、飛龍ぅ？」
蒼龍さん、完全に飛龍さんをからかってますね……。語尾は上がってますし、口元には隠しようもないくらい緩んでいます。
「……私の負けかぁ」
飛龍さんがおどけたように芝居がかった動きで両手を挙げます。それから佇まいを正して正座をすると私に向き直りました。すると蒼龍さんまで同じように正座。
「二航戦飛龍！」
「同じく二航戦蒼龍！」
「「私たちをあなたのクランに加入させてください」」

ぺこん、と揃った動きで2人が頭を下げます。なんとも綺麗なお辞儀。見ているこっちも気持ちがいいくらいです。

「こちらこそ、よろしくお願いします」

右手を2人の前に差し出します。実はその右手にはちょっとした仕掛けが。

二航戦の2人が視線をちょっとあげました。目が左から右へと動いているのはポップしたメッセージウィンドウを読んでいるからでしょう。

「よろしくっ」

「よろしくお願いしますねっ」

飛龍さんと蒼龍さんが私の手を握ります。同時に私の前にメッセージウィンドウがポップしました。

そこには飛龍さんと蒼龍さんの艦娘ＩＤとクランへの加入が完了しました、という事務的な文章。

私が右手に仕込んだのはクラン加入の招待。そして飛龍さんと蒼龍さんは私の握手に応じる、という形で承認してくれました。もちろん、不意打ちを防ぐため事前に飛龍さんと蒼龍さんの前にはその旨が記載されたメッセージウィンドウがポップするので握手も2人はわかった上で応じてくれたのでしょう。

ちょっぴり行く先が怪しくなり始めていた私たちのクラン、『イーリス・アイリス』に新しいクランメンバーが加わりました。

『比翼の二航戦』の二つ名を持つコンビ、飛龍さんと蒼龍さんです！　まだ艦隊編成をするための最低数である『６』には２人足りませんが、大きな一歩です。

次はどんな方が来てくれるんでしょうか。楽しみです。

クラン結成編４

「ありがとうございました」
「こちらこそ！　それに双撃や比翼と一緒に戦えて楽しかったっぽいっ！」
　夕立さんが愉快そうに笑うと犬歯がちらりと顔を出します。双撃というのが私、古鷹と加古のコンビを示しているのはわかっているんですけれど、まだ呼ばれなれなくてちょっぴり恥ずかしいです。
「えっと、報酬は……」
「それは時雨に渡してあげてほしいっぽい。夕立はそういうものを管理するの苦手なの」
「わかりました。えーっと、時雨さーん！」
　ちょっと周囲を見渡して探すと、時雨さんはなにやら二航戦のおふたりと談笑中。ああ、もう少しあとにすればよかったかなと思っても声を出してしまってはもう手遅れ。こちらに気づいた時雨さんは二航戦との会話を中断して、来てくれました。
「何か用事かな、古鷹さん」
「お手伝い、ありがとうございます。これ、報酬です」

視覚化させたゲーム内通貨を時雨さんに差し出します。受け取った時雨さんは素早く金額を確認。

もちろん、メニュー画面を開いてプレゼントタブを開いて対象指定すれば相手にお金を渡すことはできます。でもそれって味気がないじゃないですか。せっかくだからこうやって手渡しをした方がリアリティがあっていいですし、なんとなく気持ちも伝わるような気がします。

「うん、確認したよ。今後も港湾駆逐組合をよろしく」

「はい。また依頼させていただく時はよろしくお願いします！」

頭を下げると、時雨さんが微笑みます。直後に私のメッセージウィンドウがポップして、夕立さんと時雨さんがパーティーから外れました、という旨を伝えてきます。

飛龍さんと蒼龍さんがクランに加入してから１週間。残念ながら５人目の獲得に至ることができない私たちは未だに艦隊として必要な「６」という数字を満たせずにいます。

だからといって出撃しないのも寂しいので、今のところは他のクランから人手を借りたり、野良でプレイしている方のお手伝いをさせてもらったりしています。ちょっと人手が足りないから手伝って、みたいな依頼を受けてはその報酬を使って人手を借りる。そんな感じで細々と活動中なんです。

例えばさっきの時雨さんと夕立さんはクラン「港湾駆逐組合」からお借りした助っ人さんです。ここのクランは駆逐艦のみで構成されているという、非常に珍しいクランで、主に練度の高い駆逐艦を欲しているパーティーに貸し出すという実にギルド的な活動をしているところですね。

まあ、クランと一口にいっても、いろいろとあるわけです。ガンガン攻略していくところもあれば、私たちみたいにのんびりと気ままに攻略していきたちところもあったり、かと思えば人員の貸し出しをしている所があったり、装備品売買をしているところもあります。

「古鷹ぁー。今日はまだなんかあった？」

「えーっと、私たちのやりたかった海域攻略は終わっちゃったし、依頼もだいたい完了だよ」

胡座をかいていた加古が首だけ動かすと私に問いかけました。ちょっとした感嘆詞の間に記憶を攫ってから答えます。

６人が揃っていない私たちのクランでは先ほど言ったように２名を補充して出撃します。でもそれだけではありません。

いわゆる万事屋、とでも言うのでしょうか。端的に言えば、「この任務をクリアしたいから手伝って」というような依頼や「練度上げを手伝って」などの依頼も受け付けてい

ます。クランに人数が揃うまでの場繋ぎです、はい。それに報酬がもらえればクランルームの家具が充実させられますし。

「今日はこれくらいでおしまいにしようか。ちょうど依頼も終わっちゃったし。飛龍さん、蒼龍さん。お疲れ様でした」

「いいのよ、これくらい。２人が前衛を張ってくれるおかげで私らも自由にやれるからそんなに大変じゃないし」

　ひらひらと飛龍さんが軽い調子で手を振ります。前衛を張る、なんて言ってもらいましたが厳密なことを言うなら前衛を張っているのは加古です。どちらかといえば私は中衛くらいでしょうか。

「私たちもおふたりが制空を抑えてくれているので空を心配しなくていいから大助かりですよ」

「ふふん。飛龍と私がいるかぎり、深海棲艦ごときに空はあげないよ。思う存分、暴れてくれたまえ！」

「はい、調子に乗らないの」

「いたい?!　あー、飛龍ひっどーい」

　蒼龍さんの頭に飛龍さんのチョップが炸裂。頭を抑えながらぶーぶー、と蒼龍さんが文句をつけると飛龍さんはどうどうと諌めます。

「この後はどうするんだ、古鷹？」
「え？　あ、うん。損傷もあるはずだから入渠（おふろ）にして上がりにするつもりだけど」
「じゃあ、さくっと入ったらうだうだするとしますかねえ」
あ、加古はたぶん寝るつもりだ。
まあ、やるべきことはやっているのでよしとしましょう。やっていなかったらさっきの飛龍さんみたく私もげんこつを軽く落とさなくちゃいけませんけど。
もちろん本気じゃありませんよ？　本気で加古をパンチしたことはありません。
……ビンタはありますけど。はい……。
「まーたなんか落ち込んでる？」
「……加古のせいだからね」
「ええっ!?　あたし？　最近で何かやらかしたっけ……」
「ごめん、なんでもない。ちょっといじわるしちゃったの」
「心臓に悪いからやめてくれよ……」
ごめんごめんと加古に謝れば拗ねるように膨れた加古の頬風船も萎みます。
「で、古鷹。どうした？」
「なんでわかっちゃうの……？」
「古鷹だから。ほら、なんかあるんだろ？」

ええ、加古の言う通り。ちょっと今の私は悩んでいます。会話の流れが変わったことに気づいたのか飛龍さんと蒼龍さんも近くに寄ってきてくれました。
「飛龍さんと蒼龍さんがクランに入ってくれてもう1週間したのに新しい人が来てくれる様子がないからなんでだろうなって……」
二航戦のおふたりが正座でクランへの加入希望をしてくれてから早くも1週間。クランの加入希望はおろか説明が聞きたいという内容のメッセージすら来ません。
もしかしたら私の至らないところがあったのでしょうか。ずっと心配で胸にひっかかり続けます。
「新しい人ねぇ……」
「うん。ぜんぜん来なくって……」
「あー、ごめん。古鷹さん。たぶんそれ私らのせいだ」
申し訳なさそうに飛龍さんが言います。普段は楽しそうに笑っている蒼龍さんもバツが悪そうに視線を斜め下４５度に落とします。
「飛龍さんも蒼龍さんも悪いことなんてしてないですよ！」
「えーっとそうじゃなくてね？　私らが入ったことに問題があるっていうか……いやただのクランなら問題ないんだけど、古鷹さんと加古さん２人だけのクランに入ったから問題になったっていうか……」

「……ああ、そういうことか。なるほど」
「わかったの、加古？」
　合点がいった、という様子で加古がうなづきます。蒼龍さんもわかっているようですし、私1人だけ置いてきぼりにされてるみたいです。
「いやさね、古鷹。想像してみ？　クランメンバー募集中！　って言われてもさ、既にいるメンバー全員が二つ名持ちのコンビプレイヤー。気軽に入れる？」
「……あっ」
「ここで入りますって言うことはなかなか胆力がいるってわけ」
　そうでした。片や私たちは『双撃の加古鷹』なんて呼ばれ、片や飛龍さんと蒼龍さんは二航戦の中でも頭一つ抜きん出ている『比翼の二航戦』です。ここに名乗りを上げるのはちょっと大変かもしれません。
「で、でも！　飛龍さんも蒼龍さんも悪くなんてないです！」
「んー、まあそれに関しちゃあたしも同意。気に病むことはないって」
　それにきっと入りたいと言ってくれる方はいるはずです。試しにアプローチを変えてみましょうか。初心者歓迎！　1から古参が手取り足取り教えます！　みたいな感じで。
「重く受け止めずにのんびりと長い目で見ればいいって。来る時は来るし、来ない時は

来ないもんだからさ、こういうのって」
　のんびりと加古がいつものように言えばうんうんと私も首を縦に振って賛同の意を示します。
　こういう時は加古のまったりとした考え方を真似るに限ります。待てば海路の日和あり、なんて言葉もあるくらいですからきっといいお天気にいつかはなってくれるでしょう。
「ま、さくっと入渠してクランルームでうだうだするとしますか！」
「あ、加古さん昼寝する気でしょ！　私もするー」
「ほほう、蒼龍の君も昼寝か。近う寄れ、近う寄れ」
「ははぁー」
「加古はまったくもう……あれ？」
　飛龍さんと一緒にショートコントみたいな加古と蒼龍さんのやり取りを呆れながら見ていたら、ピコンと電子音が響きました。どうやら私宛にメッセージが届いたようですね。
「……えっと」
「どした、古鷹ー」
「ごめん、なんか呼び出し？　されたみたい。依頼っぽい？」

「古鷹、夕立の口癖が移った？」
「そうじゃなくて！」
本当に不思議な、としか言いようのないメッセージなんです。いえ、きちんと連絡先も書かれたメッセージなんですけど内容が、と言いますか。
「依頼があるから会いたい。クランメンバー以外に他言無用にしてほしいんだ。報酬は弾むから連絡を待ってる……だって」
「んだそりゃ？　古鷹、慎重になった方がいいかもな」
さっきまでのんびりとしていた加古の雰囲気が一変しました。加古の警戒モードですね。
そして悲しいことにこういう加古のカンは当たるんです。
ささっと入渠して損傷を修復すると言われた通りの場所に向かいました。加古も二航戦のおふたりも一緒です。二航戦のおふたりには帰っても大丈夫って伝えたんですけど、「何かあった時に空母がいた方がいいでしょ？」と言ってくれた飛龍さんの好意に甘えることにします。
で、伝えられた集合場所に来たんですけど。
「えっと……こんな騒がしい場所でいいのかな……」
呼び出された場所は食堂でした。このゲームにおいて酒場的な側面のある場所なん

ですが、他言無用なんて言っておきながらこんな騒がしい場所でいいんでしょうか。
「イーリス・アイリスの古鷹さんですね？　ああ、振り返らないで」
背後から話しかけられ、咄嗟に振り返りかけたところを制止されて留まります。
「急に話しかけてすみません。メッセージ、読んでいただけてますか？」
周囲に気づかれないくらい小さく首を縦に振ります。同時に加古と飛龍さん、蒼龍さんたちに目配せして何もしないようにお願いします。
「ありがとうございます。こんな無礼を働いたことをお許しくださいね。そしてまた移動をお願いするので謝らなくてはいけないんですけど、次はここに行ってください」
するりと私の手にメモらしきものが滑り込ませられました。今はまだ見ないで、と耳打ちされたのですぐには開きません。
「重ね重ねすみません。そこに依頼主がいます。どうかよろしくお願いします」
こつこつ、と喧騒の中に遠ざかっていく足音が混ざると消えました。ここまで来ておいて楽観視できるほど私もおっとりさんじゃありません。
「飛龍さん、蒼龍さん。ちょっとこれは面倒事みたいです。だから……」
「そうだねー。面倒事みたいだからちゃちゃっと片しちゃおうよ。早く私もお昼寝したいし。ね、飛龍？」
「同感かな。古鷹さん、どこに呼び出された？」

迷惑をかけないように、と思っていた私の考えはとっくに読まれていたようで先手を取った二航戦によって話を促されます。じんわりと胸に広がるものを感じながらとりあえずここを離れましょう、と提案。

そして賑やかな食堂から出てから握っていたメモを開きました。

「次はどこに行けって？」

加古が私に問いかけます。面倒、というより警戒の色が濃く出た様子で私の返答を待っています。これから行く先なので飛龍さんも蒼龍さんも耳をそばだてました。

「次の目的地はね……」

周りに誰もいないことを確認してから、声を潜めてそっとメモに書かれていた場所を囁きます。

その場所は。

アルフォンシーノ。

クラン結成編５

　その後、予定は大丈夫だからと言い切った飛龍さんと蒼龍さんも一緒に私たちは北方海域へ。指定されたアルフォンシーノへ出撃しました。
「しかしアルフォンシーノって言ってもなあ。広いのにどうするつもりだよ」
「海域の中にある小島に来てってことみたい」
　波をかき分けながら噂の小島がある座標を目指します。飛龍さんの提案で周囲に偵察機を飛ばしてもらっていますが、今のところは深海棲艦の影もないようで、順調そのものです。
「なあ、古鷹」
「なに、加古？」
「ＰＫだったらあたしが殿をするからな」
　有無を言わせぬ加古の口調に私は黙ってうなづきます。こういう時の加古はどれだけ言っても譲ることはしません。そういう性格です。
プレイヤーキル（ＰＫ）。それはこのＶＲ艦これにおいても存在します。プレイヤーがプレイヤーを狙うＰＫであったり、深海棲艦を利用したエネミーＰＫであったり。

このゲームにおいてＰＫに意味はありません。轟沈した艦娘の保持していたアイテムがドロップすることはありませんし、せいぜいが沈んだ艦娘が軽めのデスペナルティを受けるくらい。なので運営も特段、ＰＫに関する規制はかけていません。

だからほかのゲームと比べたらＰＫは少ないです。でもだからといってゼロになるというわけではありません。

加古が危惧しているのはこれが手の込んだＰＫである可能性でしょう。ええ、認めましょう。私たちのクランである『イーリス・アイリス』はかなり目立つ部類です。それを下したという手柄ほしさにそういった行為に至るプレイヤーがいないとは言いきれません。

「飛龍さん」

「例の小島ね。偵察機によると艦娘が１人だけいる。深海棲艦の影は……ないわけじゃないけどもう死んでる」

そういった飛龍さんの頬は引きつっています。偵察機越しに何を見たのか気になるところですが、報告しないということはする必要のないことなのでしょう。

「さって、どうする、旗艦さん？」

蒼龍さんがふざけた口調で、けれど臨戦態勢を思わせる語気で指示を私に仰ぎました。そう、このクランのクランマスターは私。だからメンバーの命を預かるのも私の役

目です。
「行きましょう。飛龍さん、偵察機による警戒を続けてください。蒼龍さんはいつでも発艦できるように準備を。加古、できる限りは撃たないで。でもどうしようもなかったら加古の判断で撃っていいから」
　各々が準備を完了したら、島へ。慎重に周囲警戒をしながら進むと島影にある岩礁地帯に小柄な少女が。
「やあ。無理を言ってすまない。イーリス・アイリスの古鷹さんだね？」
「……はい。あなたは？」
「私はＢｅｒｎｙｊ。わざわざここまで来てくれてありがとう」
　ぴょん、とＢｅｒｎｙｊさんが腰掛けていたものから立ち上がります。そう、虫の息で抵抗すらできない駆逐イ級から。

「よっと。もう邪魔だからいいや」
　ドオン！　とＢｅｒｎｙｊさんの主砲が火を噴くとさっきまで椅子にされていたイ級がトドメを刺されて沈みました。わざわざ椅子にするためだけに生かさず殺さずの境界線で武装をことごとく破壊するこの仕打ち。なかなかド畜生です。
「これでここらの深海棲艦はある程度、掃除しておいたよ。うん、とにかくここまで来て

くれたということは伝令役はうまくやってくれたみたいだね。あれがちゃんと働いたようならよかった」
「Ｂｅｒｎｙｙさん。依頼というお話でしたね。説明していただけますか？」
「そうだね。いろいろと経緯が長くなるけど理解してもらいたい。とりあえずもう１人を呼ぶよ」
「ここまで越させておいて待たせるって？」
　加古が剣呑な響きを込めてＢｅｒｎｙｙさんに言えば首を横に振りました。
「まさか。もういる」
　Ｂｅｒｎｙｙさんの真後ろの海面が盛り上がると新たな人影が現れました。紺色の髪の少女は海水を飛ばすと、私たちと同じように海面に立ちました。
「伊号潜水艦１３だ」
　そう名乗ってサングラスを外す彼女の風体は一般的な潜水艦のそれを逸脱しています。
　何故かスーツのようにデザインを改造されたスクール水着にスコープが取り付けられ、ロングバレルにされた魚雷発射管。どこからともなく取り出した葉巻を口に咥えるとオイルライターでそれに火をつけます。海水に浸かっていて使える者なんでしょうか。いや、ゲームでそれをつっこむのは無粋ですか。

「うわ、また……」

加古がこそっとつぶやきます。「また」に続けようとした言葉は私もわかるもの。

また大物が来やがった。その一言です。

「私は仲介役……というのも厳密には違うかな。でも依頼主はこのヒトミだ」

平然と言い放つＢｅｒｎｙйさんですが、さすがの私もちょっとすぐに口は開けませんでした。

スーツ型スクール水着に葉巻。スコープ付きロングバレル魚雷発射管なんて奇抜でイカれ……失礼、目立つ特徴を持った潜水艦１３はこのゲームにおいて１人だけ。

同じく彼女も二つ名持ちです。そのスコープに収めた敵は必ず沈む。そう名高い彼女の二つ名は。

「ヒトミサーティーン……ッ!?」

スパッと煙を吐き出すとサーティーンさん、いえヒトミさんがサングラスを外します。容姿はゲーム自体にプリセットされている伊号潜水艦１３のはずなのにこの眼光はなんなのでしょう。思わず怯んでしまうと言いますか。

というかよくよく考えると「ヒトミサーティーン」ってすごい通り名ですよね。１３に１３重ねてるわけですし。それにそもそもスーツ型のスクール水着ってなんでしょう。なんだかつっこみどころが多すぎますね。

「依頼を、したい」
「は、はいっ！」
声も私が知ってる伊号潜水艦１３と同じです。同じはずなんです。
なのに！　なんで！　こんなに渋いボイスをかませられるんですか！
飛龍さんも蒼龍さんもポカーンってしてるじゃないですか！　加古に至っては問題ないとでも判断したのかもうすでに興味なしですし！
「え、ええっとそれで依頼というのは……」
「ターゲットを絞り込む。その支援だ」
「た、ターゲット？　えっとそれは何の……」
「私が説明するよ。いいかい？」
割り込んだＢｅｒｎｙйさんが確認をとるとヒトミさんが無言で首肯するとサングラスをかけ直しました。
「古鷹さんたちはヒトミブランドを知っているかい？」
「ええ。もちろん」
ヒトミブランドといえばＭｏｄを使ったファニチャーデザインの中でも名だたるブランドです。他を寄せつけないクオリティの家具を提供することで有名なブランドですがあまり数が出回らないため、かなり高価な家具です。

最大の特徴は製作者が表に決して出てこないことです。このゲームのシステムで匿名交換というシステムがあるため、製作者が姿を見せることはないらしいです。わかっているのは伊号潜水艦１３であるということだけ。

あれ？　伊号潜水艦１３？　目の前のヒトミサーティーンも伊号潜水艦１３じゃ……

「もしかして……ヒトミブランドの正体って……」

「私だ。この服も葉巻もサングラスもロングバレル魚雷発射管もすべてＭＯＤで自作している」

……。

いえ、わかっていましたとも。その独創的な出で立ちはおそらくＭｏｄであろうことくらい。

ええ、まさか自作だとは思いませんでしたけど！

「すまないけど話を戻すよ。で、最近になってヒトミブランドのニセモノが出回り始めたことを知っているかい？」

「いえ、そこまでは……」

「ニセモノだけでもゲーム内通貨とはいえ被害総額はそれなりの額になるけど、問題はそれだけじゃない。ニセモノのヒトミブランドを買ったプレイヤーとそのチームがこ

とごとくＰＫにあってるんだ」
「ＰＫ、ですか？」
「ざっと調べただけで３０件は起こってるかな」
数件くらいなら単なる偶然。けれどＢｅｐｎｙｊさんから調べた範囲でわかっている人数は、偶然で片づけるには苦しい数字です。
「からくりは掴めた。要はニセモノの家具は発信機としての機能が隠されているみたいだ。私たちのアイテムストレージはマイルームとして機能する。だけどストレージだってことは逆に言えは常にアイテムを持ち歩いていることになる。当然、マイルームに設置している家具だってね。だから今どこにいるのか手に取るようにわかるはずだよ。で、場所さえわかるなら……」
「人数を引き連れてＰＫするだけ……あんまり気分はよくないね」
顔をしかめて飛龍さんが言います。ええ、実際タチが悪いですね。このゲームにおいてＰＫは意味がありません。それでもやる理由があるとすれば、ただ面白いからくらいだけ。
「というか発信機機能付き家具を売りつけてＰＫって……アウトですよね？」
「そう。だけどこうやって海域に出ている間はプレイヤーＩＤが表示されない仕様なのは知ってるよね？　だからＰＫされたプレイヤーもＩＤがわからないから通報できな

いんだ。タチが悪いことに売りつける際はヒトミブランドがやっているように匿名のトレード機能を使っているから、トレードの際にＩＤがわかったりもしない」

「それは……厄介ですね」

ＩＤがわかれば通報して垢ＢＡＮに持ち込むこともできます。でもわからないのではＢＡＮするアカウントを指定できません。

なによりこのゲーム、運営が基本的に不介入のスタンスを取っています。せいぜいがイベントを行ったりアプデをするくらいなものです。さすがにたくさんいるプレイヤーのすべてを見張ることが難しい、ということなのでしょうか。

ともかく、待ち続けて運営対応を待つのは難しそうです。

「だから協力してほしいんだ。作戦は私がニセモノ家具を購入する。その後に１―１に単艦出撃するんだ。そしたらきっとヤツらは私をキルしに来る。そこを叩いてほしい」

「それはあたしらにＰＫ集団をキルしろってこと？」

「キルは私とヒトミがやるよ。追い詰めてくれればいい。轟沈したらリスポーン地点に戻るだろう？　リスポーン地点は鎮守府の中だからＩＤが見える。そしたらリスポーン地点で待機している私の手の者がＩＤを控えて通報するよ」

ようは今回の依頼はゲーム荒らしを摘発するための手伝いをしてほしい、ということみたいです。

「……古鷹。あたしはどっちでもいい。古鷹がいいならやるし、嫌ってならやめる」
「私らも同じかな。クランマスターの好きにしていいよ。どっちの選択をしても責めない。どっちの選択をしても全力を尽くすよ」
飛龍さんが蒼龍さんと目を合わせて小さくうなづいてから私に囁きます。加古も同じスタンスなので判断は私に委ねられました。
「話を持ちかけておいてなんだけど、断ってくれてもいいよ。キルに手を貸すなんて好んでやりたいわけないだろうし、ね。他言無用だけはお願いしたいけれど」
Ｂｅｒｎｙｙさんも退路は用意してくれました。引き返しても誰かが責めることはなく、今まで通りにのんびりクランで遊ぶだけ。
「やるよ」
でも私は協力することにしました。もちろん、ＰＫなんてやりたいわけじゃありません。
でも私はこのゲームが好きなんです。のんびり加古と一緒にごろごろすることも好きです。二航戦のおふたりたちと海域攻略をすることも好きです。
だから荒らされたらやっぱりいい気分はしません。私、怒ってます。
ええ、そうですとも。私の楽しめる場所で詐欺を働き、発信機を売りつけた上にＰＫなんてことまでして荒らしたんです。

そのツケはきっちりと払ってもらいましょうか。そう、身をもってきっちりと。

「やべっ、焚き付けすぎたかも……」

加古の焦ったようなつぶやきはまったく古鷹の耳に届かなかった。

クラン結成編6

「どうですか、飛龍さん？」
「ヴェルちゃんの超上空に偵察機を張り付けてる。今のところは接触なし」
「わかりました。監視体制を継続してください」
「了解。あのさ、古鷹さん。あんまり気負いすぎないでよ。巻き込んだとか思わないでね。私らは私らの意志でここにいるんだから、さ」
　正直、腹が立ってるんだよねと飛龍さんが言います。確かに今回は身内に手を出されたわけじゃありません。だから私が動くのは見当違いなのかもしれません。でもルールを守って楽しくやっていた遊び場を乱されたら、誰だって頭にきます。
「古鷹、やるなら……」
「わかってる。加古、いつも通りにお願い。飛龍さんと蒼龍さんは空をお任せします」
「久々のガチ装備だからねー。大船に乗った気でいてくれちゃっていいのよん？」
　蒼龍さん曰く、相手によって装備は変えているそうです。基本的には相手と同じくらいの性能の艦載機を使うようにして、あとはイーブンの戦闘を楽しむのだとか。

その蒼龍さんが「ガチ」と表現する装備。相当に本気であることは言うまでもありません。

「古鷹さん、来たみたい。ヴェルちゃんの前方と後方に合計５」

「手筈通りにいきます。各自、警戒態勢」

まだ撃ちませんとも。どのみち射程範囲外です。それにもしかしたら、もしかしたらただの通りすがりさんかもしれませんから。

ただいつでも動ける体勢だけは維持しておきます。私は怒っていますけど、ＰＫに乗り気なわけではありませんから。

……やっぱり、そこまでしたくありません。もちろん荒らされたことはとても怒ってます。でもだからといってそこまでしてもいい気がしないんです。

「加古、あのね……」

「ん？　……え、まじ？」

「できる？」

「相手の力量次第としか……まあ無理とは言わないよ。古鷹は？」

「やれると思わなきゃこんな提案しないよ」

苦笑ぎみに返せば加古がそれもそうかと笑います。無理を言っている自覚はあります。でも加古にならお願いできます。

「古鷹さん、仲睦まじいのはいいけどヴェルちゃんとＰＫ艦隊の衝突が始まった！」
「両舷全速。目標とエンゲージ後、飛龍さんと蒼龍さんは制空権確保のみお願いします。加古、いつも通りにね」
「はいはいっと。じゃ、やってやりますかねえ！」
艤装の缶が私の意思に従って唸りをあげて回り始めました。
急いで。もっと速く。もっと！
鎮守府のリスポーン地点で待機しているＢｅｒｎｙｙさんの仲間に連絡できるのはＢｅｒｎｙｙさんだけ。当たり前のことではありますが、Ｂｅｒｎｙｙさんに沈まれるわけにはいきません。
大丈夫だよ、到着くらいまでは持つさと言っていたＢｅｒｎｙｙさんですけど、それでも厳しいことに変わりはないでしょう。
「へえ、あのちっこいのやるじゃん」
目視できる程度には近づくと、加古が賞賛の意をこめて言います。
Ｂｅｒｎｙｙさんは無事でした。というか無傷でした。襲撃してきた艦娘たちの中の１人を選んでその背中に張り付き続けることによって砲撃されない状況を作ったみたいです。
「ほら、撃てばいいじゃないか」

「卑怯だぞ、テメエ！」
「なにがだい？　私は遊んでるだけなんだけどね。それにしても張り付きにくいな。ぺったんこじゃないか」
「胸を取手扱いすんじゃねえ！　あんま変わんねえだろうが！」
遊んでますね、確かに。おちょくってるとも言いますけど。というか煽ってるの方が正しい気がしてきました。
いえ、でも時間の問題ですね。Ｂｅｒｎｙｙさんが身軽に動き回っているので今のところはなんとかなっているようですけど、拘束されたら打つ手はなくなります。それにＰＫ集団がフレンドリーファイア覚悟で撃ってこないとは限りません。
「加古！」
「任せろって！」
砲撃体勢を私が作って、加古が突撃。ようやくこちらの接近に気づいたようですがちょっと遅かったですね。Ｂｅｒｎｙｙさんが大きく飛び退ったと同時に私の主砲が火を噴きます。
そして砲弾は狙い通りに艤装の武装を吹き飛ばしました。
同時にどこからともなく現れた雷跡が１人に向かい、一撃で轟沈させます。
どこかにいると思ってはいましたが、ヒトミサーティーンの仕業でしょう。一発で仕

留める腕前はさすがです。

「そらよっ！」

ほぼゼロ距離にまで到達した加古が同じように艤装の武装や機関部を狙って破壊していきます。飛びかかってくる相手に対しては勢いを生かして海面に叩きつけると魚雷で対応。加古に砲撃しようとする相手は私の砲撃で先に砲塔を破壊して攻撃手段を封殺します。

私が事前に加古と相談して決めたのはＰＫではなくて武装破壊。攻撃手段を奪った上で無力化してしまうことです。

かなりダメージ判定による損害が細かく設定されているこのゲーム。どうしても敵の攻撃が避けられない場合に存在する常套手段が、装備を盾にして致命的なダメージを受けないようにすることです。

でも、これは裏を返せば主砲だけを破壊したりすることは十分に可能ということ。

「古鷹。４時、２体。時間対応頼む！」

「わかった！『高速弾種切替（クイックリロード）』！」

４時の方角に二体。一瞬でいいから時間を稼いでくれ。

加古の手短なオーダーに、私はすばやく対応します。

スキルを使って徹甲弾から三式弾に弾種を即時に変更。加古を狙っている２人に向

けて撃つことで一瞬の目くらましにします。
「一瞬ありゃあ、十二分！」
加古が今やりあっている相手に足払いをかけて倒れたところに副砲で追い打ちをかけると、私が目くらましを撃った２人に取りかかりました。すばやく懐に潜り込むと撃てば味方に当たる、と思わせるような位置に陣取ります。
あとは私と加古で１人ずつ引き受けて武装破壊を仕掛けました。これで攻撃能力のある武装は全滅です。機銃くらいは残っていますが、さすがにそのくらいの攻撃なら重巡洋艦の装甲は抜けません。
「なんでこのタイミング悪い時に……」
「ここまで鈍いといっそ同情するよ。うん、それにしてもやっぱり強いな。まさか武器破壊だけで制圧しきるなんて。さすが『双撃』の加古鷹だね」
「そ、そんなことないですよ……」
だってＢｅｒｎｙｙさんがぎりぎりまで引き付けておいてくれたおかげで不意を突くことができたんですから。あとは混乱している間に時間勝負で仕掛ければこっちのものです。ヒトミサーティーンも１人を速攻で落としてくれましたし。
それに加古が体を張って前に出てくれていなければできません。
私たちはスタイルの都合から、背中合わせで戦うことはありません。近接戦の加古

に、中距離砲撃の私。そもそも戦う射程がふたりともまったく違うんですから。
背中合わせでなくとも、常に一緒。その信頼があるから、私たちは『双撃』足りうるのかもしれません。
「飛龍ぅー。たぶんこうやって2―5も突破したんだよ」
「私もそう思う。というか出番なかったね……」
おっしゃる通りなので何も言い返せません……。
で、でも出番がないことはいいことじゃないですか！
「『双撃』……おい、冗談だろ！　なんでそんな大物がいるんだよ！　聞いてねえぞ！」
「ちなみに『比翼』の二航戦もそこにいるよ。嵌めたつもりが嵌められたんだよ。ねえ、今はどんな気持ちだい？　ねえってば」
話、進めてもいいんでしょうか。まったく表情を変えずに煽りまくってますけど。
「まあ、いいさ。で、あともう1人はいつになったら出てくるつもりだい？　爆雷がお好みなら好きなだけ奢ってあげるよ」
脅すようにＢｅｒｎｙｙさんが爆雷をひとつ、海に落とします。なんとなく潜水艦がいる気はしていたのでさほど驚きはしません。だって艦隊の定数が『6』なのに5人しかいないんですよ？　なのに飛龍さんの偵察機にも私の電探にも引っかかる様子はありませんでした。

なら海の下にいるしかないじゃないですか。私はソナーが積めないのでわかりませんけど、いるんだろうなと目星くらいはつけてました。

ざぶんと海面が割れて潜水艦が現れます。Ｂｅｐｎｙｙさん、かなり当たるか当たらないかの場所に爆雷を落として脅したんでしょう。一緒にヒトミサーティーンも浮上してきました。

というか、サーティーンがヘッドロックした状態であがってきました。海中でなにがあったんでしょう。

ともかく、浮上してきたところでサーティーンは解放しました。

「なるほど、伊号潜水艦１３か。ヒトミブランドを騙るなら形から、かい？」

「大胆なことをする」

憮然とした伊号潜水艦１３が浮上すると同時にＢｅｐｎｙｙさんの手によって魚雷発射管が破壊されます。ヒトミサーティーンと並べると普通の伊号潜水艦１３に安心感を覚えてしまいます。

「さて、吊るし上げようか。神様へのお祈りは済ませたかい？　命乞いという名の言い訳するなら今のうちだけど」

「はっ、ゲームなんかでマジになってダサいと思わないの？　二つ名とか貰っちゃって図に乗ってキモいよ」

……。

へえ、そういう言い方するんですか。へえ。ふーん。なるほど。そうですか、そうですか。

「やべっ」

「どうしたの、加古さん？」

「飛龍、あれやばい。古鷹がキレた」

ええ、そうですか。たかがゲームですか。ええ、ええ。あなたにとってはそうなんでしょうね。

「あなたにとってはただのゲームかもしれません。でもそれは荒らしていい道理になりませんよね？」

「悪いの？　騙される方も悪いって……」

「なりませんよねって聞いたんです。開き直れなんて言ってません」

再び徹甲弾に切り替えて砲撃。ふてぶてしい態度を貫く伊号潜水艦１３の耳を掠めて海面に着弾させます。

「なりませんよね？」

「……はい」

始めからそう言えばいいんです。聞いてないのに聞きたくもないことを聞かされる

身にもなってください。
「あなたのＩＤを出してください」
「えっ？」
「プレイヤーＩＤです。はい３、２、１……」
「こ、これです」
　まだ硝煙の立ち上る主砲を突きつけながらカウントダウンをすれば大人しくＩＤを教えてくれました。念には念をとプレイヤー検索機能を使ったところ、キャラクターネームが合致しましたし、表示の出撃中だったのでちゃんと正しいＩＤを教えてくれたのでしょう。
「はい、じゃあ次はこの件に関係している人たち全員のＩＤですね」
「え？」
「え、じゃないですよ？　フレンドになってメッセージを飛ばしているんでしょう？　そうじゃなきゃここまで密な連携は取れませんよね？　はい、出してください。全員分です」
「おい、お前は俺らを……」
「今ちょっと面白いところだから先に帰ってていいよ。＜ｒｂ
　Ｘｏｒｏｓｈｉｉｉ　ｂａｉｋ＜／ｒｂ＞＜ｒｐ＞（＜／ｒｐ＞＜ｒｔ＞さようなら＜／

ｒｔ＞＜ｒｐ＞）＜／ｒｐ＞＜／ｒｕｂｙ＞」

容赦なくＢｅｐｎｙｙさんが伊号潜水艦１３を除いたＰＫ集団を轟沈させました。武装も何もあったものじゃありませんでしたが、見事な手際です。

「さあ、あなたに口出しする人たちはいなくなりましたよ？　出しましょうか」

弱いものいじめのようで気は引けますけれど、仕方がありません。それにこれは立派な規約違反です。

このゲームの運営は基本的に不干渉のスタイルを貫いています。明確な規約違反に対しては厳格に対応しますけど、Ｍｏｄなどに関してはある程度を黙認する姿勢を見せています。

けれど発信機は明確な規約違反。しかも一発で垢ＢＡＮされるぐらいの。通報すれば運営も対応せざるを得ません。

「たかがゲームなんでしょう？　出せないんですか？」

「は、はい……」

間違いがないかどうかさっきと同じくようにきっちりと確認。共有モードにしたウィンドウをＢｅｐｎｙｙさんに見せてチェックしてもらいます。大丈夫、との一言をきちんと頂いてからそれらのＩＤを一括でコピーして運営へ通報。

「なんで……」

「じゃあ逆に聞きますけど、なんで発信機Ｍｏｄまで作ってＰＫなんてやったんですか？　ゲームはルールを守って、です。ただのＰＫだけなら私は黙認しましたけど、規約違反はアウトです」

もう会うことはないでしょう。それだけ言って背を向けました。

そしてなぜか私から一歩くらい引いた位置にいるみなさんが目に入ります。

「あ、あの……なんでみなさんちょっと遠いんですか？」

「いやだって、ねぇ……古鷹さん怖かったし？」

「うん。すごい剣幕だったねー。いや、真面目に」

飛龍さんがなぜか疑問形で発言し、蒼龍さんに至ってはいつもの間延びしたような言い方の後にひどく真面目くさった口調に変わっています。

もしかして。

「加古。も、もしかして私ってやりすぎ、た？」

「昔にあたしが寝坊して古鷹との約束を２時間以上すっぽかした時くらいには怒ってたね」

あ、あの時くらいですか……。思いっきりフルスイングで加古にビンタを張ってもみじを作ってしまった私の人生における過去最大の汚点くらい、ですか……。

やりすぎた、みたいです……。

クラン結成編7

「古鷹ー。古鷹ー」
「……」
「なあってば、古鷹ー」
「……なに、加古？」
　クランルームに配備された煎餅蒲団で枕に顔を押し付けて不貞寝を決め込んでいましたが、何度も呼ばれてようやく顔をあげます。
「気にしすぎだっての。別に古鷹が悪かったわけじゃないだろー？」
「ほんとに？」
「本当に」
「でも最後は不要だったし、あんなの恐喝だし……」
「なら最初っらやんなきゃいいじゃんか……」
「わかってる……」
　ぼふっと再び私の頭が枕に埋もれます。いつもは加古が使っている蒲団も今は私が占拠してしまっているので、加古も寝るに寝られず座布団に座っています。

「ごめん、無理っぽい」
「なんとかできない？　ほら、ずっとコンビでやってきたんだしさ」
「あーなったら古鷹はしばらくあのままだね」
そっかぁ、と飛龍さんの落胆するような声。申し訳なさの重りがさらに私の中でひとつ、増えました。
何をしているかって？　ええ、ただの自己嫌悪です。
さすがにやりすぎました。
常々わかっていたはずなんです。頭に血が上ると周りが見えなくなってしまうのは。今回はそれが最悪の方向で働いてしまいました。
「こうなるとめんどくさいんだよ、古鷹は」
「それにしてもびっくりしたよー。いっつもお淑やかな古鷹があんなふうに怒るなんて」
「古鷹は怒るよ、蒼龍。ぶっちゃけかなり怖い」
蒼龍さんに向かってかなり失礼なことを人がいない隙に加古が言っていますが、今回ばかりは言い訳のしようもないのでぼふぼふと枕に顔を叩きつけて自戒。深海棲艦と戦っていた方が自己嫌悪と戦うよりよっぽど楽な気がします。
「ただ古鷹はたいてい本気で怒った後にああなるんだよなあ。やりすぎたって言って自

己嫌悪マシマシで沈み込んじゃってね」
「それ経験談だったり？」
「ビンゴ。あーなると元に戻すのに苦労するのなんの。平謝りして甘い物で懐柔して……って何を話させるんだよ」
誘いに乗って迂闊に話しかけた加古をからからと蒼龍さんが笑って誤魔化します。
そろそろ切り替えないと。わかっていてもなかなかさっぱりと気分転換はできるものではないんです。
「まー、なんだ。古鷹、そろそろ気を取り直せって」
「そーそー。私も飛龍も気にしてないよ？　むしろスカッとしたし」
「また私の代弁を勝手に……いやまあ、私もそう思ったけど」
まだ割り切れたわけじゃありません。今回の件は向こうが悪かったけれど、感情に任せて暴走した私にも非はあります。けれどそこまで言われてずっとぐじぐじといじけているのも大人気ないかもしれません。
もそもそと蒲団から這い出すとセーラー服の皺をきちんと直してからすっくと立ち上がります。
「気にしないのは無理だけど、あんまりこんなことばっかりしてたら迷惑ですよね。ごめんなさい。古鷹、復活ですっ！」

　最後の一言に茶目っ気を込めて言うと少しは吹っ切れたような気がしました。もちろんまだわだかまるものは残っていますけど、それでも表面上は取り繕うことができるようになりました。
「ところであれからヴェルちゃんとヒトミサーティーンから接触は？」
「メッセージが来てますね。お礼に来たいとのことです」
　ところで飛龍さんはいつの間にＢｅｒｎｙйさんのことを「ヴェルちゃん」なんてかわいらしい呼び方をするようになったのでしょう。せっかくですし、私も真似させてもらいましょうか。ヴェルちゃん。うん、かわいいです。
「じゃあさ、みんなで行こうよ。今日の予定は特にないんでしょ？」
「いいんじゃないか？　古鷹、行こうぜ」
　結局、通報をしてからまた後日ということになって私たちとＢｅｒｎｙйさん、いえヴェルちゃんたちとは一旦、別れました。メッセージで明日にでも連絡するよ、という約束をヴェルちゃんは律儀にも守ってくれたみたいです。
「古鷹が復活したのそれにタイミング合わせただろ」
「さ、さあ？　き、気のせいだよ加古」
「思ってたけどさ、古鷹さんって面白いくらいに表情が顔に出るよね。目が泳ぐどころか目が水上スキーしてるし」

「あ、飛龍もそう思っちゃう？　なんかころころ表情が変わるから見ていて楽しいよね」
　これは喜んでいいんでしょうか。ＶＲ慣れしていないと言われてるようで、ちょっと複雑なところです。いえ、でもつまらない女だと言われるよりはいいのでしょうか。
「まー、いいや。集合場所はどこって？」
「食堂だって。今度は本人が来るからアルフォンシーノまで行かなくても大丈夫だよって書いてある」
　あの時、アルフォンシーノで会ったのは例のＰＫ集団からヒトミサーティーンもヴェルちゃんもマークされ始めていたらしく、警戒してのことらしいです。でも今はそのＰＫ集団の構成員はことごとく垢ＢＡＮの処置を受けたので人目にはばかることなく会えます。
「早めに出てても大丈夫だろ。ぼちぼち行こうぜ」
「ずっとクランルームでだらけているわけにもいかないもんねぇ。あ、私はいつでもオッケーだよー」
「私も大丈夫かな」
　蒼龍さんに続いて飛龍さんも準備万端とのことで、あとは私だけ。幸いにも、と言うべきなのかここはゲームの中なので化粧直しなどをする必要もありません。さっきまで蒲団に包まれていた私ですが、髪が乱れたりすることもないので、気軽に外出できま

す。

まあ、メタなことを言ってしまえば『古鷹』はあくまでもアバターなのでさほど気にする必要もないんですけど。

でもほら、女の子ですし。身だしなみはきちんとしておきたいじゃないですか。

クランルームから出て、鎮守府の食堂を行く先に選択。こういう時はゲームシステムで一気にワープできるのは時間短縮になってありがたいです。

「あいっかわらずやっかましいよな、ここ」

「しょうがないって。だってここチームメンバー探しにも使われる集会所なんだしさー」

蒼龍さんの言う通りです。このゲームをプレイしてそこそこは経っている私ですが未だに食堂が沈黙しているのは見ません。

あれですね。別ゲーでいうところの酒場的なもの、と言えばわかりがいいでしょうか。

「やあ。昨日ぶりだね」

とんとん、と肩が叩かれて振り返ると私の頬にむに、と人差し指が当たります。声の主は疑うまでもなくヴェルちゃんなんですけど、なんて古典的なイタズラをするのでしょう。

かわいらしいからいいですけど。
「報酬の件ともうひとつ、別の件で呼び立てた」
「別の件、ですか？」
なんだい柔らかいじゃないかと私の頬をつっつこうとするヴェルちゃんから逃げながらヒトミサーティーンに聞き返します。
「先に別件の方からでいいだろうか」
「まあ、そちらにとって都合のいい方からで私たちは大丈夫ですけど……」
「じゃあ単刀直入に行こうか。まず私をクランに入れてくれないか？」
「私もそれを所望する」
「へっ？」
素っ頓狂な声が思わずこぼれました。
いやいや、だってですよ？
Ｂｅｒｎｙｙさんにヒトミサーティーンですよ？　それが私たちのクランに入りたい、なんて言ってきたんですよ？
頭の理解が追いつかなくたっていいじゃないですか！
「あの、別に恩義とかでだったら無理しなくても……」
「恩義で群れようなどと思わん。純粋に加わりたいと思ったからだ」

「現在、クランは４人なんだよね？　これでヒトミと私が入ればちょうど６人になるじゃないか。悪くない話だと思うんだけど。数は増えて困るものじゃないだろう？　それにフリーな身の優秀な駆逐艦なんてそんなにいないよ。悪い話じゃないと思うけど」

優秀とか自分で言っちゃうんですか。いやまあ、腕はトッププレイヤーだと思いますけど。

えっと、どうしましょうか。

助けを求めるつもりで加古と飛龍さん、蒼龍さんの順番に振り返って目を合わせてみましたが、全員がうなづくだけ。それはまるで好きにしていいよ、と言っているようです。

「私はもうひとつ、別のクランにも所属しているため、兼任ということにはなってしまうがそれでもそちらがよければ加えてほしい」

ヒトミサーティーンにそこまで食い下がられては断るのも野暮というものかもしれません。

「あの、ヒトミさんって読んでもいいですか？　サーティーンまでつけるとちょっと長くて」

「構わん」

「ならこれからもよろしくお願いしますね、ヒトミさん」
　手を差し出すと、ヒトミさんが咥えていた葉巻とサングラスを仕舞うと私の手をぎゅっと握り返します。
「私はスルーかい？　寂しくて悲しくて泣いてしまいそうだよ」
「ケロッとした顔で言っても説得力がなあ」
　加古があくびを噛み殺しながら胡乱げな目つきでヴェルちゃんを見つめます。居心地悪くなりそうなものですけど、さすがにこの胆力ある駆逐艦はそれくらいでは動じません。
「まあ、いいじゃないか。で、私は入れてもらえるかな？　いい加減に野良で遊んでいても愉しい事が起こらなくなってきてつまらなくなってたんだ」
　気のせい、でしょうか。「たのしい」の漢字がおかしいような……。いえ、口頭ですから漢字なんて見えるはずがないんですけど。
「それにニセモノを追い詰めていた時の古鷹さんが最高に私の中のリビドー的な何かとアレなやつにピーンと来たんだよ。この人たちと一緒にいたら愉しいことがあるに違いないってね」
「ふぇぇ……」
「「ふ、古鷹さんが倒れたー！」」

な、なんで気を取り直したばかりのことを蒸し返すんですか……。あとやっぱり二航戦のおふたりは息ぴったりなんですね。

「いっそ二つ名とか名乗ればいいんじゃないかな？　『愉悦』とかどうだい？　『愉悦』の古鷹。悪くないと思うけど」

「絶対いやですっ！」

がばっと起き上がって講義するとヴェルちゃんが愉快そうにけらけらと笑います。

これ、苦労しそうだなぁ……。

「まあ、そんなわけでよろしくお願いするよ。もうクラン加入申請は送っておいたから」

ええ、知ってます。だってウィンドウが開きましたからね。Ｂｅｒｎｙｙを加入させますか、というウィンドウにイエスと私が答えて加入手続きは完了です。

「うん、これから愉しくなりそうだ」

鉄面皮のままでその場をこれでもかと引っ掻き回したヴェルちゃんが満足げに首を縦に振ります。これからちょっと大変になりそうです。このハチャメチャ暴走駆逐艦を見ているとそんな予感が拭えません。

「加古ぉ……。米焼酎、ストレート……一升瓶でお願い……」

「待て待て待て！　お前酒は弱かったじゃん!?　度数がそこそこある焼酎をストレートで一升瓶もいったらぶっ倒れるって！　グラス１杯で顔真っ赤でヘロヘロにな

るのにさ！」

喚いて止めようとする加古を隣に憂鬱モードです。今日くらいは飲んだっていいじゃないですか……。クランメンバーが６人、きちんと揃っておめでたい日なんですから。

決して自棄酒じゃありませんよ。ええ。

……愉しんでたわけじゃないもん。

通常海域攻略編
通常海域攻略編１

ぐるっと見渡してクランルームに全員が集合していることを確かめます。よし、ちゃんといますね。

「えーっと、じゃあブリーフィングを始めます」

「いえーいっ！」

私がそう宣言すれば、蒼龍さんの合いの手と拍手に迎え入れられます。

「本日の攻略対象は５―４海域です。さほど難しい海域ではありませんが、油断は大敵です。気を引き締めていきましょう」

私の言葉に各々がそれぞれお気に入りの場所で別々の反応を返します。

加古は煎餅布団から腕を出してひらひらと振って。

壁によりかかっている飛龍さんは首を縦に。

足を投げ出している蒼龍さんはテンションも高めにいえーい！　と拳を突き上げて。

蒼龍さんに肩車をされている、というよりさせているヴェルちゃんは「ｙｐａ（ウラー）」と蒼龍さんを真似て拳を突き上げて。

壁際でスコープ付き魚雷発射管の手入れをしているヒトミさんは一瞬だけ目線をあげることで。

なんだかすっごく先行きが不安になりますが、それでもここにいるのは誰も彼もが、いえ誰も『彼女』もというべきでしょうか。とにかく全員の実力は折り紙つきです。きっとうまくいくと私は信じてます。

双撃の加古鷹。比翼の二航戦。Ｂｅｒｎｙｙ。ヒトミサーティーン。これだけのメンツがいれば油断とイレギュラーがなければ勝てるはずです。

「基本的にはいつも通りいきましょう。加古とヴェルちゃんが切り込み役の前衛、飛龍さんと蒼龍さんが後衛で制空と攻撃隊を。私がその中間で二航戦の護衛と前衛組の援護。ヒトミさんは初動で敵艦を1隻、仕留めてもらって敵艦隊の撹乱をお願いします。状況によって別の指示をだすこともあるかもしれませんが、その時は臨機応変にいきましょう」

「りょーかいっ！　久しぶりの出撃だし腕が鳴るね、飛龍っ」

「情けないとこは見せられないから私らも気張らないといけないって意見には賛成するけどさ、肩にヴェルちゃん乗っけながら言っても説得力が薄いからね？」

飛龍さんがツッコミを入れてくれたおかげで私がしなくてもよくなりました。ええ、どこで言おうかと。まずなんで肩車なのか、とかいろいろ聞こうと思ってました。

「まあまあ。飛龍、５２の熟練でいくね。あとは一二型甲あたりかなー」
「わかった。じゃあそれにあわせて艦載機はこっちも組んでおく」
　私は空母のプレイヤーではないのでいまいちよくわかりませんが、あれだけでちゃんと伝わるのでしょうか。なんとなく情報量が少ない気がしますが、それで通じてしまえるものなのでしょうか。
「そういえば飛龍さんと蒼龍さんは他にも所属クランがありましたよね？　いつもうちに来てくれるのはとっても嬉しいんですけど、そっちは大丈夫なんですか？」
「ん？　あー、大丈夫大丈夫。もう辞めたから」
「ええっ!?」
　ヴェルちゃんをうりうりとつついて遊びながらさらっと蒼龍さんが衝撃発言を投下します。
　っていうか辞めちゃったんですか！　私の記憶が正しければかなり名前が通ったクランに所属してましたよね!?
　そもそも『比翼の二航戦』なんて引く手数多の大物コンビ。大手クランに所属しているのは当然です。なのにわざわざ辞めてうちに来るほどじゃないと思うんです。
「あの、別に兼クランはしてもらっていいんですよ？」
「そうじゃないのよ。蒼龍はいっつも足りてないからわかりずらいと思うけど、前のク

ランの方針が私らと合わなかったの」
「そーそー。いやあ、なんかガッツリ攻略！　とにかく攻略ＧＯＧＯＧＯ！　みたいなのって疲れるじゃない。こーいうのーんびりとしたのが性に合ってるのよねー」
　そういうものなんでしょうか。けれど確かに方針が合わないところにいるのは大変なことです。実際に私と加古がクランに入ろうとしなかった理由の一端でもありますし。
「そんなわけだから気にすることないよ。私らが所属してるクランはここしかないから」
「わかりました。ならこれからもよろしくお願いしますね」
　わざわざ辞めなくても、とは思いました。でもおふたりがそっちの方がいいと思って選択したのなら私がとやかく言うことではありません。
　兎にも角にも二航戦は準備万端みたいです。蒼龍さんの肩を頑なに占拠し続けているヴェルちゃんも問題なさそうですし。
　そもそも駆逐艦は準備といっても装備の決定くらいなもので、そして駆逐艦は装備がほとんどテンプレート化しているのでタップ１回で終わる人は終わるくらいなんですから。
　どちらかと言えば空母であったり巡洋艦だったりの方が装備編成は難しかったりし

ます。空母であるなら艦戦を多めに積んでいくのか、はたまた攻撃機を多めにするのか。巡洋艦なら砲撃特化にするもよし、雷撃重視もあり。さりとて索敵もおざなりにできません。

あとはなにかするべきことってありましたっけ？　ああ、他の僚艦（メンバー）の様子も見ておきましょうか。

でもヒトミさんはなんだか瞑想でもしてるんでしょうかって思うくらいに目を閉じて微動だにしないので話しかけるに話せない雰囲気ですし、ヴェルちゃんは相変わらず蒼龍さんの肩を占領し続けています。

加古に至ってはまだ煎餅布団に……

あれ？　いない？

ああ、いました。ただ横に少し移動していわゆる「人をダメにするクッション」に寝床を変えただけみたいです。

一時期はクランルームに家具を充実させるために依頼を受けてお金を稼ぐ、というスタイルがこのイーリス・アイリスの主な活動でした。しかし家具の問題は思いの外にあっさりと解決したのです。

具体的にはヒトミさんの加入によって。

ヒトミさんが加入してから主にどんな活動をしているのか聞かれたので正直に資金

集めのことを言ったところ、「金で買わなくとも作ればいい」とどうやって発声しているのかわからない渋いボイスでヒトミさんが告げると、Ｍｏｄで家具をポンポンと作ってくれました。

よって現在、イーリス・アイリスのクランルームには流通数も少なく、トレード市場に出せば結構な額がつくであろうヒトミブランドの家具で溢れています。ヒトミさんは戦いもしますけど、こういった制作もわりと手がけられてます。

最初は悪いので断ろうと思ったんです。無償で作ってもらえるのはとても嬉しいことです。けれど、それではヒトミさんはタダ働きじゃないですか。そういうのってよくないと思うんです。

だから私はそう主張したんですけど、またもやヒトミさんの「なら今回の件の報酬はこれで手を打たないか」という提案に折れるしかありませんでした。

明らかに家具ひとつだけで報酬としては十分どころか過剰なんですけど、気づけばクランルームに増えていく家具を止める術はありませんでした。

何が問題ってセンスが抜群なんですよね。これじゃあストップなんてかけられないじゃないですか。

結果的にイーリス・アイリスのクランルーム編集権は全員に解放されているとはいえ、実質的にヒトミさんがほとんど行使することになっています。

そのため今日はごくありゆれた一般家庭風なクランルームですが、ふと気づけば畳に襖の純和風だったり、石造りにフローリングな洋風テイストだったり。かと思えばエスニックな佇まいになっていたりとクランルームがころころと表情を変えるようになりました。

もちろん今日はどんなクランルームかな、とわくわくできるので楽しいんですけどヒトミさんの負担になっていないか心配だったのでちゃんと私は言ったんですよ？

まあ、断られましたけど。趣味と実益を兼ねているそうです。よくわかりませんが、家具の出来栄えはとってもすごいのでお礼を言ってありがたく気持ちを受け取ることにしました。

どうやらヒトミブランドが外に出回らないのは、ヒトミさんが仲間内に渡す方を優先にして、外注は余裕がある時のおこづかい稼ぎくらいの位置づけにしているからみたいです。

おっと、忘れてました。加古を起こさないとですね。

「加古ー。加古ー。そろそろ出撃だから起きてー」

「んぁ……もう？」

「うん。装備合わせくらいしなくちゃ」

「あー、そうだっけ。うー、どうするかなぁ」

加古、考えようとしてるのはわかるんだけど「人をダメにするクッション」で大の字になって転がっていたら考えているふうには見えないからね？

「うーん。古鷹、やっぱりいつも通りでいくわ」

「わかった。じゃあ私もそれに合わせるね」

今のところ指示がいつも通りに、なので普段と同じ装備を選択することにあまり違和感はありません。

さて、それなら私も装備を今のうちにちゃちゃっと整えてしまいましょうか。私は基本的に前衛の援護と後衛の護衛です。私がポイントを振っているステータスの都合上、重きを置くべきは主砲の攻撃力ではなくて命中なので、電探などもしっかりと準備しておきましょう。

このゲーム、ただ戦闘をするのではなく、海域を回ってボス艦隊を探さなくてはいけないんです。見つからなければ延々と探し続けるハメになることを考えると、索敵って大事ですよね。

「加古、そろそろ行くよ？」

「んぅぁー」

「いや、そんな変な声を出しても……」

まだぼんやりとしているんでしょうか。そろそろシャキッとしてほしいものです。

なにせ出撃するんですよ？　寝ぼけた頭で戦闘なんてまともにできるわけありませんから。

「かーこー！　ほら起きてって。かーこー……ひゃっ！」

ぐりぐりと加古の頬を抓っていると、急に加古の抱き枕にされて「人をダメにするクッション」へ拘束されました。

あ、これダメなやつです。

クッションのせいで全身から力がものすごい勢いで抜けていきますし、加古はあったかいですし、瞼が重くなってきちゃいます。

「か、加古。放してってば。ねえ、加……こ……」

人をダメにするクッションには勝てませんでした……。

通常海域攻略編２

これがゲームでなければ、えっちらおっちらと移動して出撃したい海域まで航海させられるのでしょう。ですが幸いなことにこれはゲーム。出撃の手続きで海域を指定さえしてしまえば、あっという間にテレポートです。

ああ、でもその前にいくつかやるべき事はありますけどね。例えば私を旗艦にして艦隊（パーティー）を結成しておくことなどです。

パーティーで登録しておかないと、同じ艦隊で出撃できなくなっちゃいます。パーティーってインスタンスなものなのでログアウトしたら解散扱いになってしまいますから、いちいち組み直さないといけないんですよね。

だからクランがあるんでしょう。兼任ＯＫなのもそこのシステムを考えると納得のいくものです。

それにしてもサーバーが５―４海域の天気をいい条件にしてくれて助かりました。柔らかく降り注ぐ陽光にそよそよと吹く風。加古じゃないですけど、お昼寝したくなっちゃいます。

たかが天気、と思うかもしれませんけれどこれって大事なことなんですよ。雨だと

やっぱり視界が悪くなりますし、風が強いと波が高くなってバランスを崩しやすくなります。だからサーバーがランダムに振り分けている天気という要素も出撃する時には気をつけなければいけません。小雨くらいなら気にせずに出撃してもいいんですけど、これが嵐で海が時化っていたりしようものなら大変。踏ん張っていてもひっくり返ってしまうので砲撃どころじゃありません。魚雷も波で信管が誤作動を起こして勝手に暴発しますし、踏んだり蹴ったりです。

ちなみに過去には何をどう間違えたのか雹が降ったり、大吹雪になって海上が凍るという事態も起きたそうですが、その現象が起きて以降に発生していないということはたぶんバグが運営のミスだったのでしょう。ちなみに伝聞ですが、大吹雪で海上が凍った時はプレイヤーも深海棲艦も凍り付いたせいで動けなくなってしまって地獄絵図だったそうです。

今でも大嵐などの気候は残っていますが、さすがにそういった異常気象は運営が対応してなくしたそうです。

まあ、そういった理由で天気は大事なんです。もし大荒れだったら出撃先を変更しようかとも思っていましたが、晴朗で波も高くないこの天気は絶好の出撃日和です。

「古鷹型重巡洋艦、古鷹。出撃します！」

えいやっと飛び出せば加古が続いてさらに二航戦が、そしてヴェルちゃんが駆け出し

ます。すでにヒトミさんはいなくなっているところをみると、もう潜行しているのでしょう。
「飛龍さん、偵察機をお願いします。方角は一時、三時、五時で」
「ん。航続距離のある爆撃機を出すよ。もし敵艦隊を発見したら？」
「お任せします。一撃でも加えるべきだと思ったらやっちゃってください」
「りょーかい」
「ねー古鷹さん、私は？」
　飛龍さんが矢を番えていると蒼龍さんがひょっこりとその影から顔を出します。ちょうどいいタイミングです。蒼龍さんにもやって欲しいお仕事がありましたから。
「蒼龍さんも偵察をお願いします。方角は七時と九時と十一時で」
「はいはーいっと。正面には偵察しなくていいの？」
「正面だけなら私と加古の観測機ローテで十分に見れますから」
　加古とふたりだけで活動していた頃は正面の索敵だけではなくて、全方位の索敵をやらなくてはいけませんでした。このせいで何度か泣きを見るハメになったこともあったりしたんですけど、二航戦のおふたりと出撃するようになってからは索敵がすごく安定するようになりました。砲撃戦や雷撃戦はいいものですけれど、やっぱり空の重要性は無視できません。空母の爆撃を受けながら砲撃戦をするしかない状況に追い込まれ

たこともありましたが、あれは大変なものです。尻尾を巻いて逃げましたから。
ああ、空母がいることのなんとありがたいことでしょう！　全方位の索敵を少ない観測機で必死に回さなくてもいいなんて！
どうやら私と加古のことを怒涛の攻撃を織り成す『双撃の加古鷹』なんて呼んでいる人もいるそうですが、それはそもそも戦闘に持ち込むことができればの話。アウトレンジから空母に艦載機で攻められたり、先に位置バレして対策を打たれた状態からの戦闘は厳しいものがありますから。
兎にも角にも、アウトレンジを相手にすると、加古と私は途端に弱くなってしまうんです。攻撃の機会も与えられなくなってしまうのはやっぱり苦しいです。
でも二航戦のおふたりがいるのなら話は別です。
「古鷹さん、飛龍隊三番機から報告。一時の方角から敵艦隊が接近中。空母ヲ級のフラグシップ！」
「戦闘の回避は可能ですか？」
「ごめん、古鷹さん。無理だと思う。十一時に飛ばしてた蒼龍隊六番機が装甲空母姫を見つけた。まだあちらさんは気づいてないみたいだけどねえ……」
ええ、つまり進行方向の両側を挟むように敵艦隊がいる、ということですね。
さて。これは参りました。このまま進めばどちらかとぶつかることになるでしょう。

しかし、どちらかで済まないのが問題です。
このゲーム、妙に作りこまれているので戦闘音を聞きつけた敵艦隊がやってくるという展開はザラにあることなんです。距離がさほど離れていないのであれば、ほとんど確実といっても間違いないでしょう。
できるものならば先頭は回避しておきたいところです。でも飛龍さんの報告からするにヲ級の艦隊との接触を避けることは難しそうです。
さて、参りました。挟撃されるような事態はなんとしても避けたいところですが、ヲ級の機動艦隊と戦うハメにはなりそうです。そして戦闘が始まってしまえば、ほとんど確実に装甲空母姫を引き寄せる結果を招いてしまいます。
「ヒトミさん、聞こえますか?」
『問題ない』
「装甲空母姫の艦隊にちょっと仕掛けてきてもらえますか?」
『構わない。だが装甲空母姫を落とすことは難しいぞ。僚艦も多い』
「わかっています。だから適当な僚艦でいいので、1隻だけ沈めてきてくれませんか?」
『心得た』
水面下のことなのでわかりませんが、ヒトミさんは転舵して装甲空母姫の艦隊へと向かっていったのでしょう。

「大丈夫か、古鷹？」
「潜水艦が狙っていると知ったなら、きっと警戒する。装甲空母姫には潜水艦への攻撃手段がないから僚艦で対潜攻撃をできる艦に周囲を警戒させながら撤退する、と思う」
少なくとも私ならそうする、とは付け加えないでおきます。あくまで推測にすぎませんから。けれどさっき言ったとおり、このゲームの作りこみはかなり細かいんです。深海棲艦それぞれに知能レベルが設定されているんじゃないか、と思うくらいに。
賭けです。賭けですとも。でもそんな根拠のない賭けに乗ってもいいと思えるくらいに私はこのゲームを信じているし、このゲームに心酔しているんです。
「飛龍さん、蒼龍さん。ヲ級の機動艦隊を叩きます！　加古！　ヴェルちゃん！　仕掛けるから速攻でお願いします！」
「「了解」」
「Дａ（ダー）」
目標が定まってしまえば後は簡単です。ヒトミさんがうまくやってくれることを信じて、ただ目の前の障害（てき）を打ち砕くのみ！
「「二航戦！　攻撃隊発艦始め！」」
「加古！　ヴェルちゃん！」
「あたしらはいつでもいけるよー」

私もいけるので準備は万端です。時間はかけられないので、とにかく素早く倒してすぐにその場から離脱をするしかないでしょう。一応ヒトミさんに装甲空母姫の艦隊を遠ざけるようにお願いしてはありますが、うまくいかなかったという最悪の事態も想定しておくべきでしょう。

「古鷹さん、やっちゃっていいよね？　っていうかやるよ！」

「ごー、です！」

攻撃許可のサインを出せば、蒼龍さんがにっと笑ってガッツポーズ。

「よっしゃあ！　江草隊いけええっ！」

「いや、蒼龍！　今日は江草積んでないでしょうが！」

「気分よ、気分！」

そういえば蒼龍さん、最初に一二型でいくって言ってましたね。江草隊はこの出撃で積んできていないんでしたっけ。

いえ、でも比翼の二航戦は伊達じゃありません。

直後に響いた爆音と屹立した火柱がその実力を如実に示しています。

「いえいっ！　ヲ級フラグシップ撃破っ」

「いっつもいっつもムチャクチャに付き合わされるこっちの身にもなってほしいけどね！」

「えー、『合わせ』までは使わなかったじゃん」
「そういうこっちゃないの。それに使わないのは蒼龍が楽するためのもんでしょうが」
「でも助かりました！これで空の不安がなくなります！」
さすが、としか言いようがありません。これで艦載機も本気編成でないというのだから頼もしい限りです。
さあ、ここから先は私たちの領分です！
「古鷹、暴れるぞ」
「うん！」
通りがけに加古が告げていった言葉にうなづき返すと、砲門を敵艦隊がいる方向に向けます。まだ見えません。そう、まだ。けれど確かにヲ級が撃破された火柱は上がったのです。
まだそこに敵はいます。そしてその情報は空を抑えてくれた今、私の飛ばしている観測機が事細かに送ってくれています。
「撃てぇーっ！」
順調に加古とヴェルちゃんは間を詰めていますが、妨害は避けられないでしょう。そのために私がいます。
近接に傾倒しているふたりが近づくまでの時間を作る。それが私の役目。

その役目を果たすため。私のステータスは命中精度を司るＤＥＸと攻撃力に直結するＳＴＲに振っています。確実に当てて、確実に傷跡を残す。当たってくれなきゃ、困ります。

敵重巡洋艦の砲塔が爆ぜました。電探で捉えて、狙い撃った私の砲撃は加古とヴェルちゃんをターゲットにした深海棲艦の気を逸らします。

私に一瞬でもタゲを向けることができれば、あとは加古の仕事です。

「せい、やあああっ！」

加古が手ごろな場所にいたり級に取り付いて、砲撃後の再装填という隙を生かして叩きのめします。ヴェルちゃんは軽巡に雷撃をあてつつ、同時に襲い掛かる駆逐艦へ向けて爆雷を蹴り飛ばして牽制。

そういう使い方するものでしたっけ、爆雷って……？

とにかく。ふたりが取り付けた今、手が回らないところを援護するのが私の役割です。

「古鷹！　ちょっとまずい！」

「ど、どうして!?」

敵機動艦隊がもう崩れかかっていることはわかっています。まだ大物がちょっと残っているので厄介ではありますが、どうにか片をつけられるでしょう。ちゃんと観測

機でちゃんと見てますから戦況把握に余念はありません！
だからまずいことなんて起きていないはずなんですけど、加古が嘘を言うとも思えません。
「ヒトミさんが装甲空母姫を引かせることに失敗した……？」
「違う！　敵本隊（ボス）が接近してる。あたしの観測機が落とされた！」
……余念、ありましたね。

通常海域攻略編３

　これはまずいです。ええ、ちょっとまずい状況です。まだ戦闘している最中なのに本隊（ボス）との遭遇だなんて。
　いえ、しかしいつまでも狼狽えてはいられません。そう、こういう時こそ切り替えです。それによく考えればラッキーじゃないですか。この広い海で索敵機を飛ばしてボスを探し回らなくてもよくなったんです。
　つまり海域攻略が早く終わります。デブリーフィングにもしっかり時間が取れますし、いいことづくめです。
　死に戻り（デスルーラ）しなければ、ですけど。
「加古！　そっちはどれくらいかかりそう？」
「もうちょい！　地味にこのフラ戦が粘りやがる……っ」
「ボスの方角と距離を教えて！」
「最後に確認したのはＮＷの距離ヒトゴーマルマル！　たぶんこっちの位置はバレてる！」
　加古が上半身を反らして砲撃を躱しながら叫びます。あまり余裕はなさそうなので

こちらの援護をしてもらうのは厳しいでしょう。
　しかしボス艦隊はすでにこちらを補足しています。艦載機も上げられた後でしょう。
「蒼龍さん、飛龍さん。直掩隊を。同時に先の艦載機の整備を進めてください」
「了解。ただ空母同士だけの殴り合いじゃない以上、私ら近づかれたらちょっときつよ？」
　飛龍さんの言うことも最もです。相手が空母だけならば接近してくることなどありえません。しかしこの海域のボス艦隊には戦艦などの水上戦力も含まれていたはず。水上戦力による接近戦を仕掛けてくる可能性は高い、というよりほぼ確実に空母に護衛だけ残してやってくるでしょう。
「私が、近づけさせません」
「大丈夫？」
「……たぶん」
　接近戦、苦手なんですよね。私って基本的に運動音痴なので。いやいやフルダイブのＶＲゲームなんだから運痴とか関係ないって思うでしょう？　ええ、確かに一般的にはそう言われてます。運動神経が微妙でも、ＶＲワールドなら現実（リアル）の筋力とか柔軟性とはあんまり関係ありませんし。
　でも私に限っては関係あるんですよね、それが。

「ちょこまか動き回らないで……っ」

遠くの敵なら、落ち着いて動きの先読みをしてからの砲撃で当てられます。でも近づかれてしまうと、もう私の眼は敵の姿を追い続けられません。

簡単に言うと私は反射神経が絶望的にないんです。悪くいえばドジです。とっても鈍いんです。目の前で速さにものを言わせるような戦闘をされると、追い切れません。いつもは加古が近接を一手に引き受けてくれているので、私が立ち回れていますが、今はその頼れる加古がいません。

「あうっ……」

飛龍さんと蒼龍さんに近寄らせるわけにはいきません。なので私が引き受けるしかないのですが、攻撃されたことはわかっても反応ができないため少しずつ削られていきます。躱そう、という意思はあるのでなんとか身体に回避行動を取らせようとはしています。でも、間に合わないんです。ごそっと根元から私の主砲が一門、吹き飛びました。

ラッキー、なんて空元気で言いましたけど、本当についてません。こんなに連続で遭遇するなんて、普段はないんですけど。今日は運営が荒ぶっている日なんでしょうか。ちょっと恨みがましく思いつつ爆煙に噎せながら飛び出すと、目前に軽巡ツ級。やばっ、と思った時にはもう遅いです。

「ｙｐａ（えいやー）」

真横から気の抜けた声。思わず振り向いて、そして駆逐ハ級が飛んでくる姿が目に入って、慌てて後ろへ飛び退ります。目の前の軽巡にそれはゴッ！　と鈍い音を発して衝突しました。

「知っているかい？　恒星と呼ばれる星は自分で輝くんだけど、その最後は自身の質量の大部分を爆発して、輝きながら宇宙にまき散らすそうだよ」

ヴェルちゃんが無表情のままに狙いを定めて、投げ飛ばしたハ級へ砲撃。燃料か弾薬かに引火したのか、ツ級を巻き込んで見事なまでに爆発四散しました。

「うん、立派な３ｂｅｚｄａ（おほしさま）じゃないか。綺麗な最後だよ」

満足げにヴェルちゃんが頷きます。助かったはずなのに、なんだかしこりが残っているのは何ででしょうか。とりあえずハ級さんには心の中で合掌しておきます。

「っていうか加古！　ヴェルちゃん、加古の方は！」

「その加古さんがこっちに行けって私を寄越したのさ。ここはあたしが食い止めるからお前は先に古鷹たちのアシストへ行け、って」

「死亡フラグしか立ってない!?」

「だいじょーぶ、だいじょーぶ。飛龍が加古さんの方に一部の艦載機飛ばしたから。こっちは私と残ってる飛龍だけで十分に制圧できるし。あんちきしょうでクソッタレなツカスをぶち殺……落としてくれたからね」

……なんだか蒼龍さんの言葉の後半にとてつもない怨恨が込められているんですけれども。そこだけ明らかに「蒼龍」のロールプレイから思いっきり外れていたんですけど。なんか「ぶち殺す」的なワードが飛び出してたのは私の気のせいじゃないですよね？

いえ、別に私はロールプレイを強要する派閥の人間ではないからいいんですけどね。空母艦娘がツ級を憎むという話は幾度となく小耳に挟んでいますし。空母艦娘の集会ではツ級を模した人形を磔にするとかいう嘘か本当かわからない、というより嘘であってほしい噂がまことしやかに語られたこともありましたから。どこの危ない宗教団体ですか、まったく。

「ヴェルちゃん、飛龍さんと蒼龍さんの護衛を任せてもいい？　加古の様子を見てきたくて……」

「いいよ。好きにするといいさ。どのみちもうボス艦隊は終わりそうだし、愉しそうなこともあんまりなさそうだからね」

「そんなに遠くにはいかないから、何かあったらすぐに呼んでね」

それに、そこまで遠くに行く必要もありませんし。加古が戦っている姿さえ望遠や観測機で捉えられてしまえばいいんです。

なにせ私のステータスは長距離攻撃向きに振ってありますから。確かに近接戦闘は

まったく、本当にまっっっったく私は向いてません。
だからＦＰＳゲーとかする時って、私はスナイパーなんですよね。それも芋スナ。
「よーく狙って……撃てぇ！」
さあ、そろそろ勝鬨をあげましょう。

「それではデブリーフィングを始めたいと思うんですけど……」
「今回の反省ってさ、『運が悪かった』じゃね？」
クランルームに戻って、デブリーフィンクをするのはいつもの流れです。反省会というのはなんにせよ必要ですから。
しかし、加古の言った通りです。連続で体勢を立て直す前に戦闘させられ続けた最大の理由は、運がなかったからです。いえ、索敵しとけと言われればそれまでなんですけども、戦闘中にそこまで周囲へ気を配るって大変なんですよ？
「まあ、勝てたんだし結果オーライってことでいいじゃん」

「いつも気楽そうでうらやましいよ、蒼龍は……」
飛龍さんの言葉に棘がすごいあるのは気のせいじゃないですよね？　いえ、確かにいつも振り回されているのは飛龍さんなんですけども。
今回の成績！　と発表に洒落こんだところでもうおわかりの通り、誰ひとりとして欠けることのない勝利です。1人で敵艦隊を引きつけていた加古も相当なダメージを負っていましたけど無事でしたし、敵艦隊を誘引してくれたヒトミさんも何でもなかったように帰ってきました。
結果オーライ、という蒼龍さんの言も正しいような気はします。ただ一つだけ。私に反省が。
「今回、私がもっとうまく二航戦のお二人に指示が出せていれば、よかった場面があったと思うんです」
「そう？　ボス艦隊の時は出せてたと思うけどなぁ」
「ありがとうございます、蒼龍さん。でも問題はその前なんです。制空権だけ取ってもらってそれでおしまいにしないで、爆撃で接近してくる頭数を減らしたり、しないにしても索敵をするなりでもうちょっと何かあったと思うんです」
「それは仕方ないんじゃない？　古鷹さんは空母艦娘をプレイしたことないんでしょ？　どう回すか知らないのは仕方ないって。むしろ知らないで私らをあそこまでちゃん

と動かせたんだからいいと思うよ」
　飛龍さんがフォローを入れてくれるのでちょっと救われた気がしました。でも、まだ未熟であることは否定できません。今までが水上打撃にばかり寄っていて、なおかつ旗艦なんて大役を担ったことがあまりないので指揮とか言われてもあまりわからないんですよね。でもクランを背負うマスターとしていつまでもできないまま、というわけにもいきません。
「もう少し航空戦力の上手な扱い方を勉強します。飛龍さん、蒼龍さん。間違った指示を私が出していたら遠慮なくガツンと言っちゃってください」
「あいさー……あれ、この場合だとアイマーム、になるのかな？　」
「蒼龍、そこは気にしなくていいんじゃないかな。うん、でも了解。何かあったら言うようにするよ……っとと」
「どうかしましたか？」
　突然、飛龍さんが空中を見つめて止まってしまいました。ラグかな、と疑ってみますがそんなことはないようで、飛龍さんは実に滑らかに動きます。とりあえず黙って様子を見ていると、次第に飛龍さんの表情が曇っていきます。
「あの、大丈夫ですか？」
　なんと声をかけたものかとヘルプを求めるつもりで加古を見やるけれど、加古は夢の

中にランデブー中です。しょっちゅう寝てるのはこういう時にアテにならないから困ります。かといってヴェルちゃんはことをややこしくするので、頼ると余計に面倒ごとになるのでいけません。ヒトミさんはそもそも傍観してます。

「あー、えっとね。や、古鷹さんたちにはあまり関係ないっていうと冷たい言い方になるけど、どうしようもないっていうかね？」

「はあ……あ、話したくない内容ならいいですよ？」

「そこまでじゃないのよ、そこまでじゃ。まあ、あの時期が来ちゃったらこうなることくらいわかってたんだけどね」

「あの時期、ですか？」

最近だと何かありましたっけ？　でもイベントはまだ先ですし、エクストラオペレーションもまだ心配するほど進行していないわけでもありません。月末も3週間ほど先の話です。

「なにかありましたっけ？」

「今週末に二航戦称号戦（タイトルマッチ）がね、あるのよ」

……二航戦称号戦？

二航戦称号戦編
二航戦称号戦編１

「二航戦称号戦（タイトルマッチ）、ですか？　ええっと、それは何なんでしょう？」
古鷹さんがきょとんと首を傾げながらオウム返し。うーん、この人のこういう仕草って本当に自然に出てくるなといつも思わされる。たまにロールプレイがわざとらしくて見ていられないプレイヤーもいるんだけど、そういう意味ではこの『古鷹』は本当に完成している。
おっとと、話が逸れた。そうそう、二航戦称号戦（タイトルマッチ）の話だ。
「えっとね、古鷹さん。そもそも私らの二つ名を覚えてる？」
「比翼の二航戦、ですよね？」
「そうそう。でも正しくは『比翼』だけで『二航戦』は使っちゃいけないのよ。いや、使ってもいいんだけど暗黙のルールで使わないっていうか、真なる『二航戦』ではないというか。まあ、端的に言えば二航戦称号戦ってのは私らみたいな飛龍と蒼龍のコンビが集まって、トーナメント形式で『二航戦』の称号を争う非公式な大会のこと」
「非公式なんですか？」

「まあねー。イベントがない間はヒマだからって有志が立ち上げたのがそもそもの始まりらしいよー」

蒼龍が古鷹さんのもっともな疑問に補足をするっと入れた。ちなみにこんな感じで他にも一航戦や五航戦、その他諸々いろんな称号戦は開かれている。

「あれ、じゃあ比翼の二航戦の『二航戦』は……」

「勝手に名乗ってるだけだよ？　ちょっと前に勝ち取ったのをいいことに名乗り続けてるだけ。正式には使えないから口頭で使ってるんだけどね」

「え、でもそれって優勝したってことじゃないですか！」

「正確には4回前の大会ね。それ以降は出場してないから『二航戦』の名前は放り出してるの」

蒼龍が余計に盛り上げるから純粋に「すごい」一色で見つめてくる古鷹さんに対して、先にちょこっと制止をかけておく。私はやめようって言ったんだけど蒼龍は1回は勝ち取ったんだし、勝手にやるくらいいいじゃんという謎の理屈で以後はそのままになってしまっている。

「もう出場してないんですか？　あ、予定が被ってしまった、とか……」

「ちょっといろいろあって……」

「違うよ？　めんどくさいだけ」

思わず蒼龍の頭を８割の力でスパーン！　とはたいた。こっちが濁そうと思ったことを臆面もなく言わないでほしい。まったく私の相棒はどうしてこう、口が軽いのだろう。

「わー、ひりゅー暴力はんたーい」

「うるさい。いっつも勝手に話すんだから」

「あ、あの……もしかして私って聞いちゃいけないところまで聞いてしまいましたか……？」

ほら見たことかと蒼龍に対して心の中だけで恨み言。古鷹さんが気にしやすい性格だから考えて話を進めたかったのに、蒼龍のせいでめちゃめちゃだ。

「話せないことじゃないから全然大丈夫。もうちょっと順序よくやろうとしてたのを蒼龍が端折りすぎただけどから。まあ、ぶっちゃけちゃうと蒼龍が乗り気じゃなかったから出てないってだけなんだよね」

「そうなんですか。なんだか飛龍さんがとっても憂鬱そうだったので心配しちゃいましたよ」

やっぱりちゃんと見てるなあ、この人。確かに憂鬱なんだよ。なんたって私は板挟みなんだから。

「憂鬱ってのいうは正解。とりあえず、まずはこれを見てみて」

可視化したウィンドウでメッセージを開くと古鷹さんに見せる。古鷹さんは身を乗り出して覗き込んだ。

「えっと……『今回こそ出なさい』ですか。え、これだけなんですか。運営からのメッセージだとしたらいくらなんでも雑すぎますよ」

「違うよ、もちろん。運営からのメッセージはもっときちんとした体裁で送られてくる。このメッセージの送り主は『灰燼の二航戦』ってコンビ。私らが4回前の大会で二航戦の名前を奪うまで、ずっと二航戦を守り続けたトッププレイヤー。ついでに私らが出場した1回以降、ずっと首位を守ってる」

「リベンジがしたいってこと、でしょうか……？」

「正解。『灰燼』は自分たちに黒星をつけた私ら『比翼』とまた大会で戦いたいって思ってる。でもね、蒼龍が乗り気じゃないのよ」

「や、めんどうだし、1度は取れたんだからもういいかなって」

ほら、これだ。私は別に出ることはやぶさかじゃない。ただ蒼龍は基本的にやる気を出さなければ、まったく結果が伴わないタイプだ。雑な戦闘をする蒼龍に勝ったところで向こうは手を抜かれたと思って怒るに決まってる。もちろん、連続で大会をすっぽかしてる今でも十分に怒ってるのは知ってるんだけど。

『灰燼』の気持ちはわかる。自分たちと対等以上にやり合えるプレイヤーが見つから

なかった中、いきなり現れて自分たちから二航戦の名をかっさらっていった私ら『比翼』とは是非とも再戦したいのだろう。しかし蒼龍にその気がないのもわかっている。出たところで『灰燼』が満足いくような試合をできる自信が私にはない。全力の戦闘を望んでいる向こうからすると、手抜きされたように感じるはず。そしてそれは相手に対する侮辱だ。

だから私はお茶を濁すことで逃げてきた。それも連続で４回。ただやる気のない蒼龍と『灰燼』が当たることのないように。

そんなわけで私は板挟み。そりゃ、憂鬱にもなるってものだ。確かに毎回参加するのは私だって面倒だ。でもたまに参加するのはいいんじゃないかと思う。切磋琢磨という言葉もあるくらいだし。

「じゃあ蒼龍さんは今回も出ないんですか？」

「んー、たぶん出ないよ。ね、飛龍？」

「……だろうね」

蒼龍ならそういうと思ったよ。そうわかっていたから、短くしか返さない。やる気のない蒼龍をやる気にする方針は初っ端から諦めている。

「そうですか……お二人が活躍するところを見られないのは残念ですけど、無理に出ても楽しめないですよね」

そう言ってさっと古鷹さんは引き下がった。こっそりと内心で私はほっとしていた。出るように言われなくてよかった、と。

「古鷹ぁー。そろそろいい時間だしあたしは落ちるねー」

「加古が落ちるなら私もそうしようかな。すみません、じゃあお先です」

ひゅん、と古鷹さんと加古さんの体が電子コードに分解された。気づけばイムヤちゃんもヴェルちゃんも落ちていたようでクランルームには私と蒼龍しか残っていない。当然そうなると流れは決まるわけで。

「んじゃ、私も落ちるね。また明日ね、飛龍」

「はいはい。また明日ね」

蒼龍もいなくなったクランルームでひとり、私は佇む。思い返すは2人で優勝したあの時。あの感慨深さはひとしおだった。

「今回も辞退かな……」

それだけ呟いて、私はメニューを開くとログアウトした。

どうもこんにちは。古鷹です。特に何か目的があるわけでもなく、ぶらっと歩いていた古鷹です。いえ、他の艦娘（プレイヤー）が集まるところを見るのって楽しいんですよ。なんだかこう、個性のごった煮闇鍋みたいな感じで。ああ、褒め言葉ですからね？

私のような『古鷹』のプレイヤーもそこそこに見ますけれど、いろんな古鷹がいるものです。あの眼帯をつけてる古鷹とかすごいですね。古鷹のインナーみたいなぴっちりとした服で全身が覆われてます。あれは大丈夫なんでしょうか。具体的にはレギュレーション的に。なにをどうこじらせてそこに辿り着いたのかは謎ですが、垢ＢＡＮされていないということは運営は見逃しているのでしょう。まあ、このゲームの運営は緩いですし。

こんなふうに面白い発見もできるのでわりと私はこうしてふらつくのが好きだったりします。今日は加古が遅く上がるらしいので、それまでのちょっとした退屈しのぎですね。

ところで犬も歩けば棒にあたる、という言葉をご存知ですか。本来はでしゃばると痛い目に遭うという意味らしいのですが、最近では別の意味で使われたりもします。

何かをしていると思いがけないことに遭遇する、とか。

「ごめんなさい。クラン『イーリス・アイリス』のクランマスターの古鷹さんだとお見受

けします」
「はい、どうかされ、ました、……か？」
　いやいやいや。なんで。なんでこのタイミングで『灰燼の二航戦』ですか。おかしいでしょう。さしもの私ですら知っている一流プレイヤーが、どうして私なんかに声をかけるんですか。私、重巡洋艦なんです。空母じゃありませんよ？
「えっと、なんでしょうか」
「急に声をかけてごめんなさい。通りがいいので通称を使わせてもらうけれど、私は『灰燼の二航戦』の蒼龍です」
「同じく『灰燼の二航戦』の飛龍です」
「ど、どうも丁寧に……古鷹です」
　灰燼、なんて厳つい二つ名を持っているのでどんな苛烈な方々なんだろうと思っていましたが、想像していたよりもずっと礼儀正しい人たちでした。こういう場合って私も『双撃』の古鷹って名乗るべきなんでしょうか。だいぶ恥ずかしいので、ご勘弁いただきたいんですけど……。そもそも自分から名乗ったわけじゃないですし。
「どうかされましたか？」
「そちらのクランに『比翼』がいると思うんですけれど、今回はタイトルマッチに出てきてくれそうかな、ということをお聞きしたくて」

『灰燼』の蒼龍さんが尋ねてきたことは腑に落ちるものでした。わざわざメッセージまで送って催促しているんです。クランマスターに接触して聞いてきても不思議はありませんでした。

となると、答えにくいものです。嘘を言うわけにもいかないので、正直に答えますけれど、その返答は否定なんですから。

「えっと、ですね……あまり、芳しくなさそうです」

「そう、ですか……」

「今回も諦めようか、蒼龍。次回に出てくれることに期待しよ？」

「うん、そうだね……古鷹さん、お手間を取らせてどうもすみません」

「あ、あの！」

肩を落として立ち去ろうとしている『灰燼の二航戦』を思わず私は呼び止めました。不審に思ったのか、はたまた単に呼び止められたせいか。とにもかくにも『灰燼』は立ち止まってくれました。

「どうして『比翼』にこだわるんですか？」

「どうして、ですか。決まってますよ」

蒼龍さんが笑って言いました。でも、まったく目は笑っていません。ただそこには闘志が燃えています。

「『比翼』は私たちを破った唯一の二航戦なんです。あれがまぐれだったのか、それとも私たちの実力不足による必然だったのか。それを私たちは知りたい。もし、実力で競り負けていたとしたら……」

「したら、どうなんですか？」

思わず唾を飲み込みました。先が気になっただけじゃありません。確固たるものをそこに感じて、気圧されたんです。

「越えるまで、でしょう。今まで私たちと対等以上に張り合えた二航戦はいなかったんです。でも『比翼』は私たちに勝った。だから私たちは『比翼』に挑みたいんです。限界まで出し切っても、なお及ばない相手に勝利するってわくわくするじゃないですか。負けたからこそ、勝ちたいんです。最強ってそういうものじゃないですか」

となりで無論と言わんばかりに頷く飛龍さん。この二人が『灰燼』と呼ばれる理由がわかった気がします。きっとプレイスタイルから名付けられたものなのでしょう。でも、それだけじゃないんです。純然たる闘志と勝利への渇望、そして攻めの気性がこの人たちを『灰燼』たらしめているように私は感じました。

「『比翼』に伝えてください。『灰燼』はずっと待っている、と」

「そして次こそ勝つ、とも」

立ち去る『灰燼の二航戦』を前にただ私は硬直することしかできませんでした。まる

で『灰燼』の持つ熱にあてられてしまったように。

二航戦称号戦編2

「ってことらしいんですけど……」
　とても言いにくそうに古鷹さんが切り出して、話をそう締めた。気持ちはわかる。確かにこれは話しにくかったと思う。よく私ら二航戦に話してくれたなと感謝すると同時に、きっと『灰燼』の伝言して欲しいという頼みを断れなかったのだろうなぁ。なんだかそのお人好しさは古鷹さんっぽい。
「待ってる、かぁ……」
「はい、そう仰ってました……ごめんなさい、余計なお世話を焼いてしまって」
「古鷹さんは悪くないって。ううん、誰も悪くないんだよ」
　申し訳なさそうに俯く古鷹さん。でも本当に古鷹さんは悪くない。むしろ私と蒼龍の勝手な都合で巻き込んでしまっているのだから、謝るのはこっちの方だ。
　だからそろそろ黙りこくってないで蒼龍も何か言って。私だけで場を繋いでいると、古鷹さんがますます気にしちゃうでしょうが。
「それにしても『灰燼』が、かぁ。わざわざクランマスターの古鷹さんに接触までするとは思わなかった。ごめんなさい、巻き込んじゃって」

「いえ、飛龍さんが悪いわけじゃないですし、もちろん蒼龍さんのせいでもないです」
　それでも巻き込んでしまったことは否定できない。『比翼』の事情をこのクランに持ち込んでしまった。私と蒼龍で解決しなくちゃいけないことだったのに。
「ごめんなさい、切り出しにくかったんです。逃げるようになってしまってすみません」
「本当に気にしないで。古鷹さんは私らに伝言しただけなんだから」
　最後まで申し訳なさそうな顔をして、古鷹さんはログアウト。あんな顔をさせてしまっているのは私と蒼龍なのだ。こっちにもこっちなりの理屈がある、と言いたいところだけれども、それが単なるわがままということは重々承知だ。
「あのさ、蒼龍。言われるのが嫌っていうのはわかってはいるけど、黙ったままはやめてよね。私だけでのフォローは無理」
「やー、別に嫌ってわけじゃないよ。参加を強制させるような言い方じゃなかったし。板挟みにされちゃった古鷹さんの気持ちは理解してるから、またクランを辞めようとかは言い出さないって」
「それ言ってたら私はちょっと怒ってたかもね。あの時は先に『イーリス・アイリス』っていう移籍先を見つけられていたからスムーズだったけど、そう何度もクランの移籍を繰り返すわけにもいかないでしょ」
　蒼龍は基本的に誰かに強制されることが嫌いだ。それは私も同じだけれど、蒼龍はそ

の傾向がさらに強い。古鷹さんたちには伏せているけれど、前のクランを辞めた理由もタイトルマッチに参加するよう強く何度も言われて嫌気がさしたから。

もちろんクランに縛られない野良で活動をしていくという方法もある。でも、野良ではイベントの時に大変だ。なにせ出撃したいと思っても、人を集めるところから始めなくてはいけない。そのためにクランへは参加していたい。でもあまり強制されるのは嫌なのだ。特に自分たちにその気がないものをやれと言われるのは。

「あのさ、飛龍。さすがにちょっとこっちの事情に巻き込んだのは悪かったなって私も思うんだよ　」

「うん」

「だからさ、諦めることにした。出るよ、タイトルマッチ。でさ、1回リセットしよう。『比翼』の膨れ上がった過大評価を」

蒼龍の瞳を私は覗き込んだ。そこには諦観がある。そしてそれだけだ。

ああ、唆らない。本当につまらないことになりそうだ。私が待っていたものは、そこになかったのだから。

二航戦称号戦というものに参加できるのは二航戦、つまり蒼龍と飛龍のペアだけです。古鷹である私やその他のクランメンバーはもちろん戦いに参加できません。しかし戦わなくとも別の形で参加する方法はあります。

というわけで、加古と私は観客席にいます。応援ですね、はい。

「こんなに賑わってたんだね、二航戦称号戦って……」

「それは当然でしょう。四大会ぶりにあの『比翼』が参加するんですから。空母艦娘は『灰燼』と『比翼』の戦いに注目していますよ。ああ、隣を失礼しますね」

滑らかな動きで艶やかな銀髪を揺らめかせながら一人の艦娘が腰を下ろしました。隣に座ることくらいなんにも問題ないので、私も笑って席を詰めました。

ええ、笑顔でしたよ。声をかけてきた人が誰か気づくまで。わかった瞬間に凍りつきましたけどね。

「『純白』の翔鶴さん……」

「ええ、お初です。『双撃』の古鷹さん？」

最近、名前付きのプレイヤーと会うことが多すぎませんか。なんだか事ある毎に遭遇している気がするんですけど。これも『双撃』の名前が広まったがゆえでしょうか。し

かし『比翼』やら『灰燼』やら『純白』やらとただ二つ名を名乗っているわけではない、本当に通称として名前が知られているプレイヤーからの接触が多いような気がします。

「加古、『純白』って……」

「五航戦の翔鶴型姉妹ペアだな。改二や改二甲が実装している中で、未だに未改装を貫いているヤバいペアだ」

さすがこういう時には頼れる加古です。かなり細かく加古はこのゲームについて情報収集しているようで、私が知らないプレイヤーからスキルやクランまで幅広い範囲を網羅しています。ゲームで困った時の加古ペディアさんです。しかし今回ばかりは私も加古ペディアに頼らなくても知っていますけど。

「今日はもう片割れの瑞鶴がいないみたいだけどな」

「瑞鶴は今日は予定があるそうです。そうでなかったら瑞鶴とルームでゆっくりと姉妹水入らずにしています」

未改装っていうのがすごいですよね。改二甲にすれば、噴進機とかいうすごい艦載機が翔鶴型は使えるようになるのに、その環境下で敢えての未改装。環境に逆らうってかなり、いえおっそろしく大変だと思うのに、それでも貫くのはなぜなんでしょうか。それを言うと、重巡洋艦の中でも決して高性能というわけではない『古鷹』にこだわっている私も同じ穴の狢なのかもしれませんけれど。でも未改装は無理です。改二実装で

大喜びして、速攻で改装しましたし。

まあ、それはそれとして。隣に誰が座っていても試合が変わるわけでもありません。大会運営さんが配っていたプログラムによれば次が『比翼』、つまり飛龍さんと蒼龍さんの試合です。

空母同士の演習という都合上、かなり演習場は広く取らなくてはいけません。そのため、観客席といっても複数の大型モニターによって戦況を見る、という形式になっているようです。私も含めた観衆が、じっとモニターに視線を注いでいると、そのうち一つのモニターに『比翼』が姿を見せました。一斉に湧き上がるこちらの声は届くはずがないのですけれど、蒼龍さんはモニター越しに手を振っています。対する相手の二航戦も別のモニターに現れました。これだとどっちがどっちかわからなくなりそうですけど、『比翼』のお二人は改二になっているにも関わらず、鉢巻をつけないのですぐにわかります。

どっちにしろ、大会運営が欅の色でわかるようにしてあるんですけどね。

「加古、始まったよ。応援！　応援しなきゃ！」

「んあ？　ああ、いらないよ。あれくらい余裕だろうし」

「初めからお得意の『合わせ』まで使うあたり、『比翼』も容赦する気はなさそうですし、ね」

「合わせ、ですか？」

「……本当にあなたは『比翼』を擁するクランのマスターなんですよね？」

そんなことも知らないのか、みたいな目で見られてしまいました……。だ、だって仕方ないじゃないですか！　私は空母じゃないんですもん！　だいたい二航戦のお二人に艦載機の動かし方は一任してますし、お願いしたことはきっちりこなしてくれるので知らなくってもなんとかなってるんです。それに私、水上戦闘機は積めませんし。

「はあ……いいですか。空母艦娘は艦載機をあげます。その際に艦隊に2名以上の空母がいた場合、それぞれで陣形を組んで交戦させるのが普通です。私たちならば翔鶴航空隊、瑞鶴航空隊といように2つの航空隊が空に上がることになります。ここまでは大丈夫ですよね？」

「さ、さすがに大丈夫です、はい……」

「個々に航空隊を持つ最大の理由は、一つの航空隊に集約してしまうと、互いの艦載機が衝突しやすくなるからです。お互いに動きの邪魔をしあってしまうかもしれません。少数の機体数ならば可能ですが、機体数が増えれば増えるほど衝突などのリスクは高くなります。それだけ空母艦娘は一度に多くの艦載機へ緻密なコントロールを求められることになるのですから」

「じゃあ『合わせ』っていうのは何なんですか？」

「『合わせ』というのは文字通り個々の航空隊を合わせて一つの航空隊として陣形を取らせることです」

ふむふむ、と翔鶴さんのお話を聞いていたのですがふと違和感。

「あれ、それだとぶつかっちゃいやすくなるんですよね？」

「それをぶつけずに操るのが『比翼』です。現状で『比翼』以上の機体数で『合わせ』ができる空母艦娘はいません。次点のペアが操れる数とも大きく差をつけているため、この優位性が崩れることはほぼないでしょうね」

その強みがどれほどかはモニターを見ればわかりますよ、と翔鶴さんが一つのモニターを指さしました。そこには相手の航空隊をバタバタと墜していく大きな一つの群れ。一つを墜し尽くしてしまうと、素早くもう一つへと向かっていきます。蒼龍さんと飛龍さんが上げた混成の航空隊。その数はいつも見る飛龍さんと蒼龍さんの航空隊の合計です。相手からすれば単純に対する数は2倍でしょう。

「すごい……」

「航空戦を決めるのは数と機体の性能と練度です。ここにおいて『比翼』の相手側の二航戦が使っている機体は決して性能が低いものではありません。しかし、航空隊の数とそれを操る技量が違う。迂闊に飛び込んで相方の航空隊の行動を阻害したら、という心理が働いて動けていない間に、もう片方の航空隊を『比翼』の航空隊は喰い荒らし終わっ

ているでしょう」

翔鶴がそう説明してくださっている間にも『比翼』の航空隊は相手の二航戦の元へと到着して、攻撃を加えていきます。直掩機を上げさせる余裕すら与えず、爆撃と雷撃の連続により両名が共に轟沈判定。あっという間に軍配が上がってしまいました。

「今のところ『比翼』を除いて『合わせ』を奇襲などではない、常用可能な実戦レベルにまで持ち上げられたペアはいません。ゆえに『合わせ』は『比翼』の代名詞なのです」

なんで『比翼』と呼ばれているのかわかった気がします。二人で一つという比翼の連理を体現しているからなのでしょう。

大会運営の腕章をつけた艦娘が、トーナメント表にある『比翼』のお二人を示すキャラクターＩＤを上へと押し進めました。

二航戦称号戦編３

《決勝、『比翼』の勝利です》

運営の放送と同時にトーナメント表でアイコンが上へと進んだ。それを見届けると、よくやく集中を解いて、詰めていた呼吸を私は吐き出す。うん、まあまずまず。今のところは蒼龍の舐めプ（あぶなげな場面）もあったとはいえ、なんだかんだと安定して駒を進めてこられた。久しぶりにこういう大会に参加したけれど、まだ私の腕も通用するみたいだ。

「決勝はやっぱり『比翼』が取ってきたかあ」

「ということはファイナルは『比翼』と『灰燼』でしょう？　見応えあるんじゃない？」

「前回は『灰燼』が圧倒されてたし、今回も『比翼』がさくっと勝っておしまいじゃない？」

「でも『比翼』はあれ以来、出場なしだしなあ。『灰燼』も勝ちに来るでしょ」

ちょっと耳をそばだてるだけでこんな噂話がひょいひょいと飛び込んでくる。私が観客側だとしても、きっと似たような反応をしたのだろう。傍から見れば、四大会ぶりに雌雄を決する場なのだ。しかもそこがファイナルとなれば盛り上がりには事欠かない。

まあ、タイトルマッチの仕様上はこうなるのだけれど。トーナメントを勝ち抜くと、前大会で二航戦の名前を獲得したペアに挑めるという形式だから、これでトーナメントで優勝した私たちが『灰燼』に挑む権利を入手したことになる。

権利、というのだからもちろん放棄することもできる。だけど、それをやったら顰蹙ものだろう。流石に出ないという選択肢はない。それなりに『比翼』の名前が売れてしまっている現状で、決勝ぶっちなんて悪名を流すのは避けたい。

まあ、そんなわけで結局は参加するのだけれど。

隣でお気楽そうにしている蒼龍は何を考えているのだろう。ここまで『合わせ』を使ってまでトーナメントを勝ち進んで、ファイナルでいい戦いを演じて負ける心づもりを腹に抱え込んでいるようにはまったく見えない。

「あ、いました。飛龍さん、蒼龍さん！」

聞き覚えのある声。とてて、と古鷹さんが手を振りながら近づいてきていた。そういえば私たちが今いる場所は関係者と出場者以外は立ち入り禁止の場所ではなかったっけ、と思い当たる。

「古鷹さん、見に来てたんだ」

「加古と一緒に応援に来ちゃいました。ひとまず優勝、おめでとうございます！」

どうしよう、古鷹さんが眩しすぎる。まさかファイナルで適当なところで蒼龍は負け

るつもりだなんてまったく考えたりしていないのだろう。この人、いつか騙されたりしないだろうか。

「ういーっす。ま、おめでとさんっと」

　ああ、でも古鷹さんには加古さんがいた。加古さんがついているならたぶん大丈夫だ。基本的に進んで何かをするタイプじゃないけど、古鷹さんの周りには常に気を配っているから。

「ありがとうね。ヒヤッとさせられたところもあったけど、なんとかここまで来れたよ」

「おふたりともすごかったです！　なんとか、なんて言いますけど、ほとんど無傷でしたし」

「あはは。まあラッキーかなあ」

　そうね、蒼龍。ここまで蒼龍の気持ちが続いてくれたことがラッキーだったよ。やる気のないことは始めっから見ててわかってた。合わせが完成するまでにいつもより時間がかかっていたし、動きも精細を欠いてたものね。

「ま、やるなら気張らずがんはりなよー。あたしらは適当に応援しとくから」

　やっぱりこれ加古さんにはバレてない？　私らが適当に負けるつもりだって。いやいや、ただの深読みだ。そう信じたい。

「ほら、古鷹。急がないと間に合わなくなる」

「あっ、そうだね。えっとおふたりにお願いがあるんですけど、演習場に入ったらすぐ右を見てほしいんです」
「右？」
「はい！　忘れないでくださいね。右です、右！」
とててててー、と走り去っていく古鷹さんの後ろ姿を見送りながら私は首を傾げていた。いったいぜんたい右とはなんのこっちゃだ。蒼龍に心当たりがないかと見やってみても、首を横に振るだけ。
まあ、たまに古鷹さんがちょっと意味のわからない行動をするのはあることだ。しっかりしているところはしっかりしているのに、時たま抜けているところが散見されているし。右を見て、ということは入場口からすぐ右のところで古鷹さんたちが応援している、といった以上の意味はないんだろう。
「すみません。大会運営ですが、そろそろ時間ですので準備の方をお願いします」
「あ、わかりました。行くよ、蒼龍」
「はいはーい」
ここは堂々と演習場へ、と言いたいところだけれど、砲雷撃戦どころか航空戦まで想定している演習場はおそろしく広大に設定されている。そのため、徒歩で行けなくはないけれど、行く人はよほどの物好きだけだ。私もそんな手間をかけるつもりは毛頭ない

ので、さっさと転移してもらうことにする。
　ちょっとした浮遊感と共に周囲が光に包まれて、そしてその光が晴れるとあっという間に演習場だ。ロールプレイに徹する人ならここもちゃんと歩いて移動するんだろうけど、生憎と私らはそこまではやらない。それに大会運営を困らせることが今大会の目的じゃない。
「そういえばさ、飛龍。あの右を見てってなんたったんだろうね」
「見ればいいじゃん。右なんて首を捻るだけだし」
「それもそっか」
　私も気になっていたところだ。演習場の海へと滑るように踏み出して、すぐに右を向く。
「やば……」
「すっご……」
　口にしてしまってから「これは飛龍っぽくないな」と思ってしまった。一瞬、ロールプレイを忘れてしまうくらいだったのだ。
　すぐ右にあった《翔けろ比翼！》と大きく流麗な行書体で書かれた応援旗は、それくらいに圧巻だった。ただ文字があるだけではない。飾り紐から金の箔押しまで装飾が施され、旗の左側には連れ立って飛翔する２羽の片翼の鳥が、描き抜かれていた。

たぶん、作ったのはヒトミちゃんだ。あそこまで立派なものはＭＯＤ作成でしか作れない。そしてＭＯＤ技術を持っていて、古鷹さんがすぐにお願いできる人となれば彼女以外はありえない。

元々はタイトルマッチに参加しないと伝えていた。参加すると告げたのは開催される数日前。つまりこの旗はたった2、3日ていどの時間で作り上げられたことになる。

古鷹さんはかなり無茶を言ってヒトミちゃんにお願いしたのだろう。そして絶対に私たちがファイナルまで進むと信じて、ずっと旗を出さなかった。そして最後の最後になってついにお披露目と激励のために掲げたのだろう。

「飛龍。私さ、ここで『灰燼』に負けるつもりなんだ。それなりに善戦したけど、やっぱり最強は『灰燼』だったんだって思わせるために。『比翼』はそこまでのものじゃないって思わせたかったんだ」

「うん、知ってる。蒼龍がいろいろ煩わしく感じてたのは気づいてたよ」

「煩わしいってのもあったけどね、クランに迷惑かけるのも嫌だったんだ。ほら、このクランって居心地いいじゃん。だから変に名前を売りすぎて、迷惑かけたくなかったんだ」

それも知ってた。蒼龍は確かに一見すると能天気で、何も考えていないように見える。いや、その通りで何も考えてないし、タイトルマッチに対してめんどくさいから嫌

がっている側面が大きいこともわかってた。
　そこにクランの迷惑になりたくないという感情が紛れ込んでいることもなんとなくだけど、私は察してた。
　演習の申し込みが増えるだけならいい。でも、変な嫌がらせがあったら。そういう懸念を抱いてしまう気持ちは理解できた。
「ごめん、飛龍。私、ちょっとらしくなかったね。飛龍は勝ちたかったでしょ」
「うん。でも、私も蒼龍に何も言わなかったから。意思表示のひとつもせずに、ただ黙ってたんじゃ伝わらないよ。だから私もごめん」
　旗をじって見つめている蒼龍の表情は伺えない。でも私はどんな顔をしているのかわかるような気がした。
「うっかりしてたよ。私たちは『比翼』だ。私が飛龍を引っ張りあげて、飛龍が私を蹴り上げて。そんなことを繰り返してここまで来たんだよね。なのにすっかりその前提を、『比翼』だってことを忘れてた」
「そうだね。蒼龍がらしくなかったらその尻を引っぱたいても動かすのが私だった」
「飛龍が及び腰になったところへ喝を入れるのが私だった」
　蒼龍がメニュー画面を呼び出して何かを操作し始める。何をするのかわかっている私はその動作をただ見守るのみ。きっとあのアイテムをストレージから取り出そうと

しているのだろう。
「それにさ、ここまでしてもらっておいて全力を尽くさずにおめおめと帰ってくるってカッコ悪くない？」
「はは、それは同感かなぁ」
「それはまずいよね。カッコ悪いのはめんどくさいことよりよくない。だからさ、飛龍。勝とうか」
蒼龍は振り返ると、私に向かってストレージから取り出した鉢巻を放ってよこした。端が燃えているような意匠のそれは飛龍と蒼龍の改二衣装でしている鉢巻だ。
蒼龍は手元に残っているもう1本を額から後頭部に回してきつく締めた。前髪が上げられて、蒼龍の瞳がよりはっきりと見えるようになる。
この間まではそこに諦観があった。怠惰があった。蒼龍にやる気と言えるものは微塵の欠片も存在していなかった。
ああ、ずっとその瞳を待ってたんだ、私は。
同じように鉢巻を締めながら内心で呟く。きっと私の口角は上がって、笑っているのだろう。
もうその瞳には迷いはなかった。つまらないなんてとんでもない。意気消沈なんて言葉は鼻で笑うだろう。そう、あれは。

「行こっか、飛龍！」
「そうだね。やろう！」
あれは焔の点いた眼だ。

二航戦称号戦編４

《それではファイナルマッチ開始！》

放送により開始が告げられるやいなや、私と蒼龍はすぐに矢筒から矢を取り出して弓に番えた。淀みのない動作でひゅっとそれを射る。まずは索敵。いち早く『灰燼』の居場所を割り出して先制攻撃を仕掛ける。

「いた！　蒼龍、ＳＳＥの２５００！」

「りょーかいっ！　第一次攻撃隊、発艦始め！」

艦載機を上げると蒼龍の艦載機へと合流させる。蒼龍も心得たもので、私の艦載機たちと速度を合わせて並走。『灰燼』も艦載機を上げて、こちらを迎撃する体勢を整えて待ち構えていた。

「飛龍、合わせはＦＢの３番でいくよ」

「了解。合わせはＦＢの３番ね」

蒼龍チョイスは艦上戦闘機（ファイター）と艦上爆撃機（ボマー）編成。基本的に爆撃機を多用する蒼龍らしいな、と思いつつも私は陣形を完成させるために艦載機を蒼龍の航空隊へと近づけていく。

《させないよ！》

わざわざオープン回線に乗せてまで叫ぶことか！　と咄嗟に言い返しかけたけれど、私にそんな余裕はもらえなかった。

なにせ合わせの陣形を作ろうとしたところへ吶喊され、妨害されたのだ。急いで艦載機たちに回避行動を取らせなくてはならない。そっちの操作にかかりきりにさせられてしまった。

「飛龍、もう１回いくよ！」

「わかってる！」

でも２回目もダメだった。狙い済ましたように『灰燼』は陣形を組むために艦載機を運ぶ場所へ的確に攻撃を加えて妨害してくる。手法はさまざまだ。戦闘機が機銃をばらまきながら突っ込んでくる場合もあれば、爆撃機の爆弾を空中で投擲し、それを爆破させた範囲攻撃による妨害であったり。

艦載機の数を少し減らされてからようやく気づいた。『灰燼』はこちらに合わせを使わせないつもりなのだ。

《確かに合わせは強力よ。でも使わせなければ意味はない。こっちがどれだけ『比翼』の戦闘シーンの映像を方々からかき集めて研究したと思ってるの！》

げえ、と思わず私の口から嫌な予感が音を伴って溢れた。そこまでご執心だったとは

知らなかった。この分だと今回の大会で使った合わせのパターン以外まで網羅されていると考えていいかもしれない。

最悪だ。私たち『比翼』が合わせを多用する理由はひとつ。実はランキング上位の空母艦娘たちと比べてしまうと個人の艦載機の運用がうまくないのだ。

もちろん、通常海域の攻略などには事欠かない程度は持ち合わせている。しかし、タイマンを張るプレイヤー同士の演習においてとなると、とことん不得手になる。

例えば蒼龍はドッグファイトで殴り合うことが得意だけど、一度でも崩されると立て直せない。一方で私は細かな小手先技は得意でも、正面からの殴り合いが苦手。でも合わせによって陣形を組んでおけばお互いにフォローができる。蒼龍が崩されかけても、私が小手先技で立て直せる。逆に正面からドッグファイトを仕掛けてくる相手に対しては蒼龍が対処し、私がそのフォローに回る形を取れる。

世間様は合わせを『比翼』の代名詞というが事実は違う。合わせなくして『比翼』は戦えないのだ。それを誤魔化すための手段として合わせを使用しているだけ。私らに『比翼』という二つ名を世間が付けたと聞いた時にはなんて正確な皮肉だろうと思ったものだ。なにせ、片翼の鳥は1羽だけで翔ぶことはできないのだから。

必死になって艦載機を操り、『灰燼』の航空隊を迎撃しようと試みるが、私も蒼龍も思いっきり押されていた。すでに崩されかけている段階では、蒼龍はこの後も押され続け

るだけだろう。援護に行きたいところだけれど、私も苦手な正面きってのドッグファイトを仕掛けられて必死にやり過ごしているところなのだ。

『灰燼』め、最初っからこうするつもりで手を打ってやがったな、と恨んでも遅い。こちらの戦闘シーンの映像をありとあらゆる場所から集めたのなら、すでに合わせが使えなければまともに戦えないことも露見しているだろう。

そろそろ艦載機の燃料も危ない頃合いだ。一旦は引いてくれるだろうが、次も凌ぎ切れる自信は私になかった。なによりそれなりの数の艦載機を削ったチャンスを『灰燼』がみすみす見逃すとは思えない。

「蒼龍、第二次攻撃隊も上げないと……」

「うん、わかってる。わかってるんだけどさ……」

その続きは決して口にされなかった。でもなんとなくわかってしまう。このまま第二次攻撃隊を上げたところで同じことの繰り返しだ。ただ負けるとわかって艦載機を送り出す。そんな不毛なことはない。

「飛龍、第一次攻撃隊を全部帰投させよう。それから第二次攻撃隊を上げる」

「それじゃ遅すぎる。第一次攻撃隊は先頭だけ操作して残りを追従モードに切り替えたらすぐに第二次攻撃隊を上げないと」

「わかってるでしょ、飛龍。それじゃ、負ける」

う、と言葉に詰まった。同じことをしたって同じように『灰燼』に迎撃される。今まで通りのセオリーは『灰燼』の弛まぬ努力によって打ち破られたのだから。
「飛龍、アレやろう」
「……正気？　未だにプレイヤーとの演習では1回も使ったことないけど」
「まあねー。でもさ、考えてみてよ。観衆は山ほどで、相手は最強の二航戦『灰燼』で。そんでもって、私たちには全力で応援してくれてる古鷹さんたちがいて。これ以上にお披露目にぴったりなシチュエーションってなくない？」
にやっと蒼龍は笑って私を見つめる。眼の焔は試合前よりもさらに激しく燃え上がっていた。うん、これなら面白いことになりそうだ。これでかの『灰燼』を下したら、きっとさぞ痛快だろう。それはなかなかに悪くない展開だ。
それにずっと押されっぱなしも癪だし、ね。
「よし、乗った」
急いで第一次攻撃隊を収容。今頃『灰燼』は第二次攻撃隊を発艦させてこちらへ向かっているのだろうけれど、完全に収容するまで艦載機は上げない。
「「第二次攻撃隊、発艦始め！」」
そして収容が完了すると同時に艦載機を一斉に上げる。時間はあまりない。『灰燼』に先手を取られる前にこちらも準備を完了させなくてはいけないのだ。

「飛龍、Ｙｏｕ　ｈａｖｅ　ｃｏｎｔｒｏｌ．」
「おっけ、Ｉ　ｈａｖｅ　ｃｏｎｔｒｏｌ．蒼龍、Ｙｏｕ　ｈａｖｅ　ｃｏｎｔｒｏｌ．」
「ん。Ｉ　ｈａｖｅ　ｃｏｎｔｒｏｌ．いくよ、飛龍」
寸分の狂いもなく、全く同じタイミングで口を開く。
「「Ｗｅ　ｈａｖｅ　ｃｏｎｔｒｏｌ　!!」」
今までは比翼の鳥だった。鳥の面しか見せなかった。
さあさあ、皆さまお立会い。ここから先は、未だに誰も見ぬものをご覧にいれましょう。遠からん者は音に聞け、近くば寄って目にも見よ。
一丁、ここで初披露と参りましょう。世にも珍しき、比翼の龍を。

見ているだけ、というのはもどかしいものです。今すぐ飛んでいって援護に行きたいくらいです。
「だめだ、厳しいな。完全に合わせを潰しに来てる。『灰燼』は本気で『比翼』の対策を

練ってきたな」
「なんとかできないかな……？」
「あたしに言われても困るよ。飛龍と蒼龍がどうにかするしかない。できるのは祈ることくらいだ」
　加古の言うことはもっともです。私たちにできることは、飛龍さんと蒼龍さんが勝てるように祈りつつ応援することくらい。
「ここからの巻き返しはかなり難しいですよ。『比翼』は第一次攻撃で少なからず艦載機を削られました。全艦載機を上げているわけでないとはいえ、ここで減った数が後々になって響いてくるはずです」
「そんな……」
「なにより、合わせを封じられた結果が散々でしたね。おそらく合わせを抜きにした実力は『灰燼』の圧勝でしょう。艦載機の数の差は開いていくばかり。活路を見出すのならば肉弾戦でしょうけど、『比翼』が肉弾戦をできると聞いたことはありません。できたとしても、『灰燼』が接近を許してくれるとは思いませんが」
　同じ空母である翔鶴さんが言っていると、言葉の重みが違います。でもわかっていました。かなり厳しい状況なんだってことくらい。だってトーナメントの時と比べて、飛龍さんと蒼龍さんの艦載機が自由に動けていないんです。

「これは勝負ありましたかね。ここからの巻き返しはもう無理でしょうし」
翔鶴さんの言葉は会場全体を代表しているようでした。これは『灰燼』が取ったな、という雰囲気に満ち始めています。
「加古……」
「あたしたちには何もできない。ただあのふたりが勝つことを信じて応援するだけさ」
そうです。加古の言う通りでした。『比翼』はまだ終わってません。まだ飛龍さんも蒼龍さんも、諦めていないんです。なら私が応援を放棄するわけにはいきません。
《Ｗｅ　ｈａｖｅ　ｃｏｎｔｒｏｌ　!!》
ぎゅっと手を握りしめていた私の耳に突如、叫び声が飛び込んできました。誰のか、なんて考えるまでもありません。それは間違いなく、私たちのクランで空を支えてくれている『比翼』の二航戦です。
「まさか……そんな馬鹿な！」
翔鶴さんが隣で呻き声を発しましたが、そんなこと私にはどうだっていいことでした。
「やっちゃってください！　飛龍さん！　蒼龍さん！」

二航戦称号戦編5

陣形を組む必要なんてなかった。ただあるがままに突撃させるだけでよかった。

「交戦開始」

いつもはおしゃべりな蒼龍が、本当にたったそれだけ口にする。私も黙って首肯するのみで、わざわざ何か口を開いて返さない。

『灰燼』の艦載機が迫ってくる。向こうは通常の航空隊編成だ。こちらが合わせを使っていないように見られるからだろう。

残念、合わせはすでに完成している。

私と蒼龍の艦載機のごちゃまぜ編成がそれなのだから。

切った張ったが得意の蒼龍が先行。そう、ざっと私と蒼龍の艦載機のすべてを操って。

崩れかけた瞬間に蒼龍から私に一部の艦載機の操作権を交代し、私が今度は得意の小手先技で撹乱する。乱したところで私の艦載機を蒼龍が操って再び突撃させる。

言葉は交わさない。交わす必要なんてない。ただ戦況を把握して、相棒と艦載機の操作権をバトンタッチし続けるだけ。

『灰燼』はさぞ困惑しただろう。なんていったって、私にできない動きを私の艦載機がして、蒼龍にできない動きを蒼龍の艦載機がするのだから。

艦載機の操作権完全共有。私と蒼龍がやったことはそれだけ。

艦載機の操作権をほかの艦娘に委譲するシステムは、２人以上で出撃している際に片方の飛行甲板がやられてしまい、発着艦不能になってしまった時、もう片方の艦娘に着艦させて艦載機に補給を受けさせるためにまま用いられる。一時的に操作権を譲渡し、着艦させてもらい、再び発艦する時に操作権を返してもらう、という図式だ。

私と蒼龍はそれを補給でなく戦闘でやっているというだけ。

わざわざ合わせという形で陣形を組まなければならない理由は、私の艦載機を蒼龍が崩された時、即座にフォローできる場所へ組み込んでおくため。しかし、操作権を共有しているのなら仮に私の艦載機が近くになくとも、蒼龍の艦載機を私が操って切り返しができる。

蒼龍の３番機を私が使って、私の８番機を蒼龍が使って。かと思ったらすでにその操作権は私に戻っていて。

ある意味でこれは合わせを突き詰め続けた最終の形かもしれない。合わせの真骨頂は互いのフォロー。その目的を合理的な形で昇華させたのがこれなのだから。

次の一手なぞ打たせない。打たせる余裕なんて与えない。

「悉く先手を打つ！」

叫んだ蒼龍が『灰燼』の艦載機を正面から迎撃する。急いで崩しにかかっても、その時はすでに私が操っているため、小手先技でひらりと避けられる。ならばと再び正面戦闘に切り替えようとしたところで、蒼龍が別の角度から捩じ込んだ艦載機で撃墜。空いた穴を突こうとしても、私が塞いでさっと撃墜してしまう。

形勢は傾いた。一度は『灰燼』に傾いた天秤を力づくでこちらに傾けさせた。

「崩れた。飛龍、たたみかけるよ！」

「了解！　一気に片をつける！」

先に攻撃隊で私が雷撃を格子状に放つ。当たらなくていい。あくまで目的は足止め。

本命は蒼龍操る爆撃機の集中爆撃だ。

「友永隊！」

「江草隊、やっちゃって！」

爆炎が立ち上がって『灰燼』を包む。まだ警戒は解かない。確実に仕留めるまでは、気を緩めることなんて出来ない。

「まだまだ！」

「ううん、これで終わり。私が爆撃機を使えない、なんて言った覚えはないよ」

『灰燼』が反攻の兆しを見せようとする。けれどそんなことさせやしない。蒼龍の爆

撃機が終わったら、次は私だ。確かに腕は蒼龍に劣るけれど、反跳爆撃くらいはこなせる。蒼龍から残していた江草隊を借りて水切りのように爆撃を水面に跳ねさせる。上に目を取られていただろうから、中段攻めに対して咄嗟に適応するのは難しいだろう。

「そんでもって、私が攻撃機を使えないって言った記憶もないんだよねー、これが」

今度は蒼龍が私の友永隊で雷撃。今度は足止めなんかじゃない、当てるための雷撃だ。ダメ押しにダメ押しの連続。反撃の余裕など与えない。事前に収容しておいた第一次攻撃隊を再び発艦させて猛攻を続ける。

「どうよ！」

見たか。これが私たち『比翼』だ。そんな宣言を試合終了を報せるブザーと共に勝ち誇って私は言った。

私が、私たちが『二航戦』だ。

「飛龍。ほら」

「ん」

ぱぁん、と手を掲げて蒼龍とハイタッチ。心地よいじんじんとした痛みが手のひらに残った。

「負けたよ。あなたたちが二航戦だね」

萌葱色の着物を燻らせた『灰燼』の蒼龍がいつの間にか近くに来ていた。その隣には

同じように至るところに焦げ目がある赤橙の着物を纏った飛龍が。
「前に負けた時はね、偶然だと思いたかったんだ。合わせのインパクトに押されただけで、ちゃんとやり合えば勝てるって思いたかった。あの時は私たちが最強だって慢心してたから負けたんだって。だから今回は勝つつもりだった。でも、負けた。私たち、油断はしてなかったんだよ。むしろ最大限の警戒すらしてた。その上で負けたんだ。おめでとう。あなたたちが『二航戦』だ。『比翼の二航戦』だ」
「そうだねー。私たちが勝った。だから二航戦の称号は私たちのものだ」
蒼龍が、ああ『比翼』の方、つまり私のペアの蒼龍が『灰燼』の蒼龍に向かって歩み寄る。
「だからまた奪いに来ればいいよ。次からは私たちもちゃんと出場するから」
『灰燼』の蒼龍が驚いたように目を剥いて、そしてすぐに嬉しそうに破顔する。
「そうだね。また奪いに来るよ。なんたって……」
「「「それが最強ってものだ」」」
『比翼』も『灰燼』も声を揃えておなじこと。でしょ、と私たち『比翼』が付け加えると『灰燼』がからからと笑う。
「次は勝つ」
「まさか。次も黒星をつけてやる」

差し出された『灰燼』の飛龍の拳を私も強く握り返す。隣では同じように蒼龍も固く握手をしていた。

こうして二航戦称号戦は幕を下ろした。私たちにとってこれは始まりだけど。

わああああっと試合終了のブザーと共に、水を打ったように静かだった会場が沸き上がります。

「加古！　勝った！　勝ったよ！」

「だな。やー、あそこからよくやったもんだよ、本当に。うん、とりあえず古鷹、離して。首、絞まってるから」

「あ、ごめん……」

テンションに任せて思いっきり加古に抱きついてしまっていました。首を絞めてしまっていたので、きっと苦しかったでしょう。

「勝った？　あれは勝ったなんて生易しいものではありませんよ。あれは『比翼』が圧倒

したと言うんです」

客観的に見て浮かれているであろう、私の隣では翔鶴さんがひどく真剣な面持ちで呟いています。確かに後半から『灰燼』は一切手出しをできなくなってしまっていましたから、圧倒という表現は妥当な気がします。

「わかってませんね。いえ、空母でないあなたにわからないのは仕方ないことです。でもおそらくこの試合を見ていた空母艦娘はほとんど全員が気づきましたよ」

「何に、ですか?」

「『比翼』がやったのは艦載機操作権の完全共有です。あの機体数でそれをやり、なおかつ完璧に機能させることの難しさは艦載機を駆るものなら理解できないはずがありません。ただの譲渡とは話が違いますからね」

いまいちピンときません。私も観測機の操作権を加古に渡したり、逆に加古から操作権をもらったりします。機体数が増えたら大変でしょうけど、そこまでのことなんでしょうか。

「あまりわかっていなさそうなので補足しますけど、例えば蒼龍さんと飛龍さんが同じ艦載機に別の指示を出してしまうと、指示同士がコンフリクトして動かなくなってしまうんです。逆もまた然りで、どちらも指示を出さなければただ飛ぶだけの的です。しかし艦載機の一機それぞれに個別の指示を出さなければあんな芸当は無理です。つまり

『比翼』はお互いにコンフリクトも空白も作ることなく、全艦載機に指示を出し続けたんですよ。完璧な意思疎通ができても、難しいでしょうね」

「な、なるほど……？」

はい、あんまりわかってません。なんだかすごいんだなあ、くらいしか。たぶん空母艦娘の方々は実感としてわかりやすいんでしょうね。私は重巡洋艦なのでわかりにくいですけど。

「そうですね、これくらいなら彼女も許してくれるでしょう。古鷹さん」

「は、はい！」

「私の所属するクラン、『秘密の花園』は後日、あなたたち『イーリス・アイリス』に演習を申し込ませていただきます。どうかその時はよろしくお願いしますね」

ぽかーん、としている間に悠々と翔鶴さんは立ち去ってしまいました。なんだかえらいことになってしまった気がします。でもそういうことはあとから考えましょう。

今は一刻も早く飛龍さんと蒼龍さんの元に行きたいですからね。

「加古、行こう！」

「あいさー」

加古と一緒に大急ぎで結果発表の場に赴きます。人混みの中を必死にかき分けて進むと、人で埋もれそうになっている飛龍さんと蒼龍さんがいました。

「あー、まあ優勝だもんなぁ。そりゃああなるか」
「えっと、本当はお祝いを言うつもりだったんだけど、後日にした方がいいかな……？」
「んー、かもしれないな。ひとまず出直すか」
「そんなこと言ってないで助けてってば！」
悲鳴にも似た蒼龍さんのヘルプコール。しかし助けてって言われましても何をすればいいのでしょうか。
「と、とりあえず私らの手を引いてクランルームまで連れてってくれない……？」
息も切れ切れな飛龍さんが懇願してくるのでは仕方ありません。加古に蒼龍さんをお願いすると、クランルームを解放しておふたりを連れていきます。なんだかいろいろと後ろから聞こえてきますけど、いいんでしょうか。聖徳太子ではないので、何を言っているか判別はできませんけど。
というかそもそも私はクランメンバーに対しては常にルームを解放状態にしているので、飛龍さんも蒼龍さんも入れるはずなんですけど、なんでお願いまでしたんでしょうか。
そんな疑問はクランルームに入って大衆の視界から遮られた瞬間に解決しました。
いきなりおふたりがばったりと倒れ込むという形で。
「だ、大丈夫ですか!?」

「あー、だいじょーぶだいじょーぶ。ただちょっと疲れた……」
　いえ、絶対にちょっとじゃないですよね？　いきなり糸が切れたようにばったりいきましたけど。
「無茶やったな、２人とも」
「あー、加古さんにゃバレてる？　そうなんだよね。『Ｗｅ　ｈａｖｅ　ｃｏｎｔｒｏｌ』はやるとめちゃくちゃ疲れるんだ」
　床に突っ伏したままの蒼龍さんがモゴモゴと言います。たぶんそのうぃーはぶなんたらというのが翔鶴さんの言っていた艦載機の操作権完全共有というやつなのでしょう。とりあえずずっと床に転がったままはかわいそうなので、ヒトミさん謹製のクッションを引っ張ってきてそれぞれに渡します。
「古鷹さんありがと。実はあれって脳をめちゃくちゃに酷使するからきっついんだよね」
「なんたってＶＲヘッドセットが異常検知で私らを強制ログアウトさせる限界ギリギリの手前までやるんだからね。あー、疲れた……」
　普段からしゃんとしている飛龍さんですらこの有様ですから本当に無茶をしたのでしょう。
「でもさ、飛龍。勝ったよ。私たちが勝ったよ」

「そうだね。私らの勝ちだ」

満足げに寝返りを打って仰向けになりながら飛龍さんと蒼龍さんが顔を見合わせて笑います。ああ、そうでした。言わなければならないことが私にもありました。

「おふたりとも、おめでとうございます！」

「おめっとさん」

私と加古がそう言うと、『比翼の二航戦』はぐっと拳を天に突き上げて応じました。同じクランメンバーだからでしょう。この勝利は私にとってもすごく誇らしいものでした。

ここまでは平和、だったんですけどね。後日『比翼の二航戦』とやらせろと猛り猛った空母艦娘たちから大量の演習申し込みが『イーリス・アイリス』に送り付けられて私は悲鳴をあげることになり、ファイナルで見せたあの完全共有をやれとせがまれる『比翼の二航戦』もその度に悲鳴をあげることになりました。

閑話休題編

閑話休題１

ＶＲ艦これ、というゲームがある。フルダイブ型のＶＲゲームで、プレイヤーは艦娘になって海を駆ける海戦ゲームだ。

もちろん、ただ戦うだけじゃない。艦娘になりきってみるもよし、個性的な面を伸ばして演じるもよし。楽しみ方はいろいろあるけれど、ひとつだけ共通していることがある。

それは艦娘を演じているプレイヤーそれぞれの現実がある、ということ。

勇猛果敢に戦う駆逐艦の子にも、正確無比に遠方の深海棲艦を狙い撃つ戦艦にも、百戦錬磨の艦載機たちで空を支配する空母も。それぞれにそれぞれの現実（リアル）が存在している。

それは他ならぬ古鷹（わたし）も同じこと。

起きたら朝食を作って、お洗濯やお掃除。手早くお昼ご飯を済ませたらお買い物に行ってきて、お洗濯ものを取り込んだら畳む。夕ご飯を食べ終わったらお風呂にお湯を

張る準備をして、それから洗い物。お風呂に入ったら、やっと手に入った自由時間を楽しんで、時間になったら就寝する。

そんなどこにでもある、ありふれた平日を私は過ごしている。土日や祝日みたいな休日になると、たまにだけれど仲のいい友達と一緒にランチやディナーに行ったりしてみたりもする、どこにでもいるただの一般人だ。

でもそんな私も、ベッドに転がり、フルダイブ型ＶＲヘッドセットを装着してひとたびＶＲ艦これにログインすれば、あっという間に『双撃』の加古鷹と呼ばれるペアの片割れ、古鷹に変貌する。

みんながそれぞれ付けたいように自分の仮面を付けて、自分のやりたいようにキャラクターを演じる。そんな中にいつもとは違う自分が混ざっていく感覚。

ログインしてしまえば、そこはもう秩序のないマスカレードパーティー。非日常をもっと彩ってくれるスパイスはそこらじゅうで弾け飛んでいる。みんなが主役で、みんなが名脇役。あまりの混沌にくらくらしてしまいそう。けれどそんな混沌に身を浸していることが堪らなく私は楽しいのだ。

だから私はお風呂を上がったらドライヤーで髪を乾かして、あったかいけれどラフな格好に着替えて、ＶＲヘッドセットを装着したらこう叫ぶ。

「リンクスタートっ！」

さあ、今日はどんなパーティーだろう？

嫌な予感がする。

漠然とした、というわけじゃない。ほぼ確実にめんどくさい事態になっていると思う。そんな予感があった。

あー、やれやれ。でも放置しておくわけにもいかないんだよなぁ。

ベッドに体を横たえて、ヘッドセットを装着したら起動の言葉を。

「リンクスタートーっと」

途端に意識は切り替わっていく。現実世界からＶＲ艦これの世界へと。『加古』のアバターを選択すると、俺の体は加古に変化する。閉じていた目を開けると、そこら中に艦娘が歩き回る世界が飛び込んできた。

フルダイブ型のＶＲすべてに言える話だが、脳からの神経信号をヘッドセットが読み取って、アバターを動かしたり映像や音声などの外部から受ける刺激を伝達している。

つまりＶＲワールドでアバターが感じたことを伝達するのは神経細胞であり、そしてそれを刺激として脳が受け取るのだ。

まあ、早い話だ。すべては脳に依存しているのであって、なら仮に脳に異常を来していたらそれはＶＲのアバターにも影響が出てくるのである。

そして今回、嫌な予感をあたしが感じた理由は今までうだうだと説明してきたことと決して無関係ではない。

そう、人は生活している際に脳に異常を来すことがある。こんな風に言うとひどく大袈裟な言い方に聞こえるかもしれないが、そんなに難しい話じゃない。誰だって簡単に脳に異常を来すことができる。

具体的には酒で。

アルコールを摂取すると、脳が麻痺して大脳の動きが抑制される。それが所謂「酔った」という状態であり、開放的になったり、陽気になったりする。

ここまで説明すれば察しのいい人は気づいたのではないだろうか。

ずばり、古鷹が酔ったままログインしていったのだ。

ログインする前に話したところ、明らかに古鷹が酔っ払っていた。本人は、「私は酔ってなんかないよぉ？」と言っていたが、語尾が怪しくなっているあたり、完全に酩酊状態だった。そんな状態でログインしていったから不安になってあたしも後を追いかけ

るようにしてログインした、というわけだ。
「古鷹は……クランルームか」
　フレンドリストから古鷹の現在位置を確認。どうやら他のクランメンバーもクランルームに集結しているようだ。ひとまずはクランルームへと移動した方がよさそうだ。さくっと移動先にクランルームを選択して、さっさとワープした。
　そこは、カオスだった。
「やーん、ヒトミちゃんかわいいー！」
「や、やめ……やめるんだ……」
　古鷹に抱き着かれて撫でまわされているヒトミ（スーツスタイルスク水）と、その様子を激写しまくる愉悦部（Ｂｅｒｎｙｊ）。止める気は一切ないらしく、完全に悪ふざけでキャーキャー黄色い悲鳴を上げている二航戦ズ。キマシタワー、じゃねえよ。止めろよ。ヒトミもがいてるだろうが。ハードボイルドで通ってるヒトミサーティーンが虫の息なんだぞ。もはやハードボイルドの「ハ」の文字もねえぞ、あれ。
「おい、そこのダブルドラゴンズ。古鷹を引っぺがせ。あたしはヒトミを救出するから」
「えー、面白いじゃん。それに実害はないし、もうちょっと見てても……」
「そうか、そうか。蒼龍、酔ってない時の古鷹に蒼龍がクラン演習増やしてほしいって言ってたって伝えとくわ。『Ｗｅ　ｈａｖｅ　ｃｏｎｔｒｏｌ』の調整がしたいから名

前の通ってる空母とやり合いたいって。それとも潜水艦だけの編成との演習を組んでもらおうか？」

　それを言って顔を青くしたのは飛龍だった。飛龍としてはとんだとばっちりだろう。ただでさえ疲れるものを連続でやらされるなんてたまったものではないにちがいない。

「さあ、蒼龍働こう！　すぐにヒトミちゃんを救出するんだ！」

「アイマム！」

　追い立てたダブルドラゴンズが古鷹を抑え込めば、その隙にヒトミを救出。荒い息を吐きながら呼吸を整えているヒトミをひとまずあたしの後ろに庇うような形で匿う。

「大丈夫か？」

「……助かった」

「悪いな。あれ酔ってるんだ。後はあたしに任せてくれ」

「任せた……」

　あー、うん。ヒトミすげえお疲れっぽい。いや古鷹の相方として本当に悪かったと思う。どうも古鷹が迷惑かけましてすみませんでした。

「あー、加古さーん。そろそろヘルプ。私は大丈夫だけど今度は蒼龍がやばい」

　一難去ってまた一難。酔っ払った古鷹は留まるところを知らない。まあ、それを知ってるからあたしはログインしたんだけれども。

ああ、回想は入らないよ。入ると古鷹もあたしもいろいろと顔を覆いたくなる事実が白日の下に晒されるからね。ちょっとごめん被りたい。

とかなんとかいろいろふざけてみたところで、さすがにそろそろ蒼龍を助けてやろう。引っぺがしてからどんな行程を辿ったのかは知らないが、押し倒された蒼龍のお腹を枕にして古鷹が顔を埋めてぐりぐりしている。うーん。それあたし以外にもするのかー。いや、気を許してるって証拠なんだけどね？　クランメンバーにさえ気を許せないってのはクランとして居心地悪いことこの上ないからいいことなんだろうけども。

「古鷹さんってこんなキャラだっけ？」

「飛龍、これが酒の力だ」

「……私、一生飲まないでおこう」

飛龍が慄きながらぼそりと呟く。程度と量さえ弁えてりゃ、別に悪いもんじゃないんだがなあ。

「個人差があるし、酔い方も人それぞれだから、そこまで気にするこっちゃねえけどな。ちなみに見てわかる話だろうが、古鷹は抱き付き魔だ」

「うん。それはわかる」

「ちなみにあたしは酔うとすぐに寝るタイプ」

「うん、見たことないけどそれもなんとなくわかる……でもその情報、今いる？」

「いんや、いらないね」
「おふたりさーん。そろそろ見てないで助けてくれなーい？　いや、まじでお願いします」
おっとと、悠長に話しすぎたか。古鷹がすることなんてせいぜいが抱き付くところまでで、それ以上は絶対にしないから大丈夫だとほっといたが、そろそろ蒼龍を助けてやろう。蒼龍がどうすればいいのかわからずに、おろおろしてるし。
だがその前に。
「おい、ヴェル公。そのスクリーンショット、どうするつもりだ？」
無言でひょいひょいとそこらを駆け回っては無表情でメニュータブを眺めてどこか満足げに頷いているヴェルを捕まえる。写真を撮りまくっていたのはわかっている。そしてその写真の利用方法もおそらくは。
「クランの運営の一助とするつもりだよ」
「売り捌くって言え。ちゃんと消しとけよ。変な噂を立てられてヘコむ古鷹を持ち上げるのは大変なんだよ」
「妻の面倒は旦那が見るものじゃないのかい？」
「人をおちょくる暇あるなら消しとけよー」
ヴェルを帽子の上からぐしゃっと撫でてやると、あたしは戦場へ。酔いどれお姫様を

そろそろ鎮めなければ。いつまで蒼龍に抱きついているつもりなのか。
「古鷹ぁー。そろそろ離れてやれ。蒼龍が困ってるだろ」
「うん、わかったー」
　とててー、っとやって来た古鷹は案の定、抱きついてきた。まあいつものことだし、そのままにしておく。どうせあと３０分もすれば酔いも醒めるだろうし、しばらく静かなところに運ぼう。
「あー、とりあえず今日はあたしが古鷹を引き取っとくわ。迷惑かけたし、すまんかった」
「いや、私らは別に大丈夫だからいいけど……古鷹さん、大丈夫なの？」
「後から恥ずかしさのあまりにしばらく引きこもって、何度も壁に頭をぶつけることを除けば大丈夫だ」
　それ本当に大丈夫なの？　と聞いてくる飛龍に対して適当にひらひらと手を振り返す。ここまで古鷹が酔っ払うのはなかなかにレアケースだが、見たことがないわけじゃない。面倒を見たことはあるから、さほど心配はしていなかった。
「ほら、古鷹。あたしのマイルームに行くぞ？　ほらメニュー開けー」
「ふえ？　うん、わかった！」
　よーし、いい子だ。こういう時は静かなところへ連れていくに限る。本当は酔ってる

古鷹を出撃させると面白いんだけど、今日はやめておこう。今日は甘えたがりモードみたいだし。

念のため言っとくが、連れ込んだわけじゃないからな？

閑話休題２

「あー、びっくりしたー……古鷹さんって酔うとああなるんだ」
　まさかヒトミちゃんから引き離した瞬間に、私の拘束から蛇みたいにするりと抜け出して逆に押し倒されるとは。私も私で空母だってことにかまけて、基本的な回避運動とか以外は体術関連の練習なんてやらないから鈍いっちゃ鈍い。でもそれにしたって多少の抵抗くらいはできるものだけれど、よもやあんな早業だとは思わなかった。
「どう、蒼龍？」
「え？　ああ、柔らかかったよ」
「……大丈夫かって聞いたつもりだったんだけど、その様子なら大丈夫そうだね」
　これはあれだ。ギャルゲーで言うところの選択肢ミスってやつだ。飛龍が呆れ返っちゃったよ。でもよくよく考えればいつも呆れられてばかりのような気もするし、問題ないか。
「そうだ。ヒトミちゃんの方が激しかったけど、大丈夫？」
「問題ない。……まさかあそこまでされるとは思わなかったが」
　いつものハードボイルドワンダーランドに戻った、というか戻れたヒトミちゃん。け

ど若干頬の筋肉が引き攣っているのは気の所為じゃないと思う。まあ、抱きつかれた上であれだけ撫で回されたらこんな表情になるのも頷ける。酔いどれ古鷹さん、恐るべし。いつもと違った面が見られて面白かったけど。

「しっかしコンビ組んでるだけあって、加古さんの対応は手慣れてたねー。私なんかどうしたもんかと手をこまねいていたよ」

「最終的に私らがいいように使われただけのような気もするけどね……」

「飛龍、それは言わないお約束よ」

使われたことくらいはわかってるけど、それくらいはまあ、ね？　労力をとんでもなく要求されることでもないし。

それより、古鷹さんと加古さんが抜けてしまった今、別の問題が持ち上がってくる。今日は出撃するつもりで私はログインしたのだけれど、深海棲艦を一体も倒していない。なんだか全体的に不完全燃焼な感じがつきまとっていた。

「ねえ、みんな。この後はヒマ？　よければどっかテキトーな海域に殴り込みかけない？」

「そ、蒼龍がやる気、だとッ……！　明日は何が降るんだ」

「いくらなんでも失礼すぎない？　ちなみになにか降るのなら、個人的にはぼた餅が降ってほしい」

「食べたいの？」
「うん」
　わー、なんて身のない会話。でも暇を持て余しすぎると反射で会話しちゃうよね。しない？　私はする。たぶん飛龍も。
「ま、いいや。どする？」
「構わん」
「私も参加するよ。でも欠員はどうするつもりだい？　あと２人足りてないけれど」
　ヒトミちゃんとヴェル確保っと。当然っちゃ当然の疑問をヴェルが提示してくるけれど、それくらいは予想してるし、解決法もちゃんとある。
「んー、まあ適当に海域攻略したがってるコンビを見つけて、そこに便乗すればいいんじゃない？　私と飛龍がクラン以外で出撃する時はたいていそうしてるよ。欠員の補充を募集してるとこに乗り込めーって」
「このメンツで乗り込んだら募集してた相手はさぞ驚くだろうね」
「え、なんで？」
「蒼龍、いい？　私ら、『比翼の二航戦』。ヒトミちゃん、『ヒトミサーティーン』。アンダスタン？」
「あー、はいはい。そーゆーことね。ならどんなリアクションを見せてくれるか楽しみ

でいいじゃない」

ほいさ乗り込めー、と声をかければめいめいが腰を上げる。参加するのなら、水雷屋さんか戦艦ペアか。航空戦力はよほどの海域にいかないかぎり、私と飛龍で充分だからそこらへんが狙い目のはず。

「そういや、加古さんは古鷹さんとふたりっきりだけど、大丈夫なのかねえ？　あの酔った古鷹さん抑えられそうなのは加古さんくらいしかいないけどさ」

「なんだ、蒼龍は気づいていないのかい？」

「気づいていないって何が？」

「あんなに密接なコンビの２人が、究極のプライベートスペースであるマイルームに引っ込んだんだよ。やる事なんてひとつじゃないか。というかヤることしかないじゃないか」

そう言ってヴェルが片手の親指と人差し指の指先をくっつけて輪を作ると、もう片手の人差し指を中に入れて往復運動をさせる。その意味がわからないほど私はピュアっ子じゃない。

え、まじで？　あの２人ってそういうアレなの？　仲がいいのは傍目から見ててもわかってたけど、そういうとこまでいっちゃうアレ的なアレなの？　おしべとめしべならぬ、めしべとめしべをアレしてアレする的な？　リリィがゆらゆらして大事件的な？

「ああ、間違えたね。輪っかと棒じゃなかった。女性アバター同士だからそこは○○○○（ピー）だった」
「ヴェル、ストップストップ。放送禁止用語入ってるから。ピー音入ってるから。あとクランメンバーでそういう淫らな妄想したくない」
「でも二航戦の２人もそういうことしているんじゃないのかい？　コンビの息は合ってるし」
「マジでそういうのないんでやめてもらっていいですか？」
「……口調、ブレてるぞ」
　ヒトミちゃん、ツッコミ遠いよ。もうちょい強めで。演じている「蒼龍」じゃなくてリアルの私が出てきたのは事実だけども。
　念のため、ほんっとうに念のため言っておくけれど私と飛龍の間には何も無い。頼れる相棒ではあるけれど、そういうことに及んだことは断じてない。
　確かにカップリングでコンビを組んでいるところはいわゆる「そういう関係」のコンビもある。けれど、すべてがそうであると思われるのは心外だ。少なくとも私たちは違う。
「ヴェル公よ、今日ばかりは背中に気をつけたまえ。私の江草が火を吹くぜ」
「その江草、絶賛火だるま墜落中じゃないか」

そういう意味じゃない、とゆるくツッコミを入れる。そんな他愛のない話をしながら私たちは酒場へと向かう。

……まさか、ね。まさか加古さんと古鷹さんが、ね？

いや、でもあの2人って仲いいし、スキンシップとか多めだし。なんだかただのコンビっぽい関係じゃなさそうなんだよなぁ。

ま、いいや。忘れよ。知らぬが花ってね。

そいやっと古鷹を布団に転がらせる。あたしのマイルームは殺風景だから急遽、任務で貰える煎餅布団を取り出して展開させなきゃならなかった。幸いにも酔っている古鷹はさして抵抗することはなかった。ころんと呆気なく布団に転がる。

「本当ならリアルで水分取れって言いたいとこだけど……。ん、古鷹。これでも飲んどけ」

「わー、加古ありがとー」

まだふわふわしている古鷹に不思議な香りのするお茶を渡す。いちおう食品系も個人でｍｏｄ作成できなくもない。けれど、現状の技術で再現できる味覚エンジンが完全ではないことと、味覚エンジンへと働きかけるように作成する過程の細さから、個人で作る人は少ない。だからあたしが古鷹に渡したのも企業が作成したものだ。それでもやっぱり現実のお茶と比べると違和感があるけれど、慣れるとこれも味がある。

布団の上で酔った人間に飲み物なんて渡そうものならこぼされそうだが、どうせＶＲ。こぼされたところで布団を干す手間はかからない。

「古鷹、ちょっとあたしはクラン見てくるからここで大人しくしててくれ。いいか？」

「うん、わかったー。いってらっしゃい」

このままにしておくことに若干の不安がないわけじゃない。でも古鷹が酔って暴れることはないから、まあ大丈夫だろう。それにさっきから大人しいし、だいぶ覚めてきてるのかもしれない。

移動先をクランルームに指定すれば、さくっとワープ。あたしの体はついさっきまでいたクランルームへととんぼ返りする。

「ありゃ？　誰もいないな。みんな落ちたか？」

それにしては随分と早い。不思議に思ってフレンドリストを開けば、メンバーは全員がオンライン。どうやらどっかに行ったようだ。出撃してるのか、はたまた他の知り合

いと会っているのか。そこのところはよくわからないけれど、別にうちのクランは普段の活動がかなりゆるゆるだ。ノルマ規定とかも特に設けていないから、そこら辺は自由にしてもらっていい。

「ちょっとフォロー入れとこうかと思ったんだが……ま、いいや。いないならしかたない」

我らがクラン『イーリス・アイリス』はクランメンバーが6人しかいない小規模クランだ。よってクランルームもほとんど拡張していないため、見渡せば誰もいないことはすぐにわかった。

誰もいないとわかったのなら、もう用事はない。さっさと古鷹の元へ帰るに限る。再び移動先をマイルームに設定して、ワープした。

ちなみにあたしのマイルームも広くない。基本的には古鷹のマイルームに移動することが多かったし、そもそもマイルームに拡張機能はない。

「古鷹ぁー。戻ったぞー」

「おかえりー」

古鷹はあたしの言う通りに大人しくしてたらしい。相変わらずほわんほわんしたままだけれど、ベッドの上にちょこんと座って待っていた。別に大人しくって付け加えとく必要はなかったんだけれどね。暴れられたところでＶＲだから片付けとかないし。

「ただいまーっと。古鷹、気持ち悪いとかはないな？」
「ないよ？」
「ま、そんならいいや」
　気持ち悪さを古鷹が訴えるようならすぐにログアウトさせなきゃいけない。でもこの様子ならフルダイブ中に吐いてしまって窒息、なんてことはなさそうだ。
「ねえ、加古も一緒に寝よ？　お布団に転がるの気持ちいいよ？」
「いっつも寝てるから知ってるよ」
「一緒に寝ない……？」
「あー……わかったわかった」
　こういう時の上目遣いは卑怯じゃないか？　これをやられて断ることができる鋼の意思はあたしにない。
　つーか、古鷹さんや。布団で転がってるせいで制服が乱れてまくってますけど、それはあれですかい？　イエスってことでいいのか？
「今日はやけに甘えるなぁ」
「だって加古と２人きりになったの久しぶりだったし……」
　そう言われりゃそうだった。クランを作って以来というものの、いろんな出来事の目白押し。こっちで最後に２人になったのはいつだったか。

「いいんだな？」
「うん。いいよ」
ぽんぽん、と古鷹が叩いている布団の場所へ体を滑り込ませる。なんとなく、古鷹の酔いはもう覚めてるような気がした。でもそれを言うのは無粋だとも思った。
ま、たまにはこういうのも悪くない。

コラボ企画：クラン対抗戦編
コラボ企画：クラン対抗戦編１

「大変申し訳ありませんでした……っ！」

こんにちは、古鷹です。いえ、正しくは土下座古鷹、略して土下鷹です。ゴロは最悪ですね。でもそんなことはどうでもいいんです。

簡潔に言わせていただくと、私は酔いが覚めた後にも記憶が残るタイプなんですよ。

つまり先日に私がやらかした所業はすべて綺麗に記憶しているわけで、それはもう顔から火が出るどころかバルカン半島に火が回ったレベルなんですけれど。恥じているより先に迷惑をかけてしまった謝罪はしなくてはなりません。

加古曰く「フォローはしといた」とのことですが、だからといって流していいことではありません。

「特にヒトミさん。ほんっっっっとうにご迷惑を……」

まともに顔を見れません。もう床に額を押し付けるどころか、そのまま床下まで埋まっていく勢いです。穴掘って埋まっていたい気分って、まさしくこういう状況なんだと思います。

今後金輪際、お酒を飲んでからＶＲに潜るのはやめましょう。そう強く誓いました。周囲に迷惑をかけるだけじゃなくて、『イーリス・アイリス』の名前まで落とすことになりそうです。そしたら、落ちる名前は私だけじゃなくてクランメンバーたち全体です。クランマスターがお酒に酔って大暴走、なんて。そんな悪評は広まってほしくありません。

「すみません、すみません、すみません……」

「わ、私は気にしていま……いない。だからそこまで気に病まないでいい」

今、ヒトミさんの素が出たような。いや、気にしないでおきましょう。ロールプレイ中の人にリアルを持ち出すのは無粋というものです。

それに今は私の全力謝罪タイムです。変な茶々を入れるなんてもっての外です。

「加古じいさんや、どうにかできないのかいあれは？」

「どうにもできないよ、蒼龍ばあさん。落ち込み古鷹のクセってやつじゃ。というかだな。聞きたいんだけどこれ、なに？」

蒼龍さんの不思議老夫婦ムーブにはきっちりと付き合ってから、加古はクランルームの壁の一角を指さしました。私も気になっていたところなんですよね、あれ。

「私らに聞いてもわかんないからね。蒼龍とクランルームに来た時にはもうあったんだから」

二航戦のおふたりと加古が言ってる「これ」というのの正体はわかっています。

正直ちょっと、いいえだいぶ目を逸らしたいんですが。クランルームの壁にでかでかと私の画像が貼ってありました。私が先日、酔っぱらった挙句にヒトミさんに抱き着いてる写真が。

私が酔って痴態を晒している画像、いつスクリーンショットを取ったのでしょうか。わざわざ引き延ばし拡大してクランルームに盛大に貼り付けてあるんですが。

っていうか、これやった犯人ひとりしかいないですよね。

「ヴェルちゃん？」

さっきからずっと写真の前でケラケラ笑ってる真っ白な駆逐艦。その人しか。

「いやはや、本当におもしろかったからね。こんなおもしろいこと、クランの歴史に刻まないでなにをするって感じじゃないか。クランマスター、潜水艦娘に抱きつく。スク水趣味露呈する、とか。そんな見出しはどうだい？」

「刻まないでください！　負の遺産ですからぁ！」

あと勝手に私の性癖を歪めないでください。別にそっちの趣味はありません。スク水なんて最後に着たのはいったいいつだったことでしょう。あまりに昔のことで、忘却の彼方です。そして、おそらく二度と着るような機会はないでしょう。

まあ、いいです。消す方法はあるので。

メニュー画面を開いて、クランルームの編集へ。設置されている家具一覧から、私の引き延ばされた画像を削除します。なるほど、壁紙の上からポスターとして設置していたんですね。おそらく、というか確実にお手製でしょう。

クランルームの編集権限を私はクランメンバー全員に解放しています。つまり、いちクランメンバーのヴェルちゃんにも好きにクランルームを編集できるということ。

ただ、逆に言えば私もクランメンバーです。クランルームの編集をすることはできます。

とりあえず、私怨でヴェルちゃんのクランルーム編集権を一日だけ凍結しておきましょう。

笑っていたヴェルちゃんの顔が一瞬だけ、おどろいたように目が見開かれました。気づきましたね。すぐに新しいのを張ろうとしてひそかにメニューを操作していたのにできなければ、気づくでしょうけど。

クランマスターをいじるからです。私的な制裁ですが、まあこれくらいなら許されるラインでしょう。

っとと、話がものすごく逸れました。そろそろ元に戻しましょう。

「今回集まってもらったのは、他クランとの演習があるため、事前のブリーフィングを開くためです」

「謝罪のためじゃなくて？」
「それも、ですっ！」
　ヴェルちゃんのいじりがノンストップです。もちろん、ついでなんかじゃないですよ？　迷惑かけたのは本当ですし、ヒトミさんや蒼龍さんたちには申し訳ない気持ちでいっぱいです。
「して、お相手はどこだい？」
「『秘密の花園』というクランなんですが、みなさんご存知ですか？」
　ヴェルちゃんの疑問に答えます。聞いた瞬間、うへえと言わんばかりのリアクションをしたのは蒼龍さんです。
「『秘密の花園』っていうと、『純白』のいるとこかぁ……」
　蒼龍さんの言う通りです。『秘密の花園』には『純白』と呼ばれる五航戦姉妹がいます。
　先日、二航戦称号戦の会場で姉の翔鶴さんには会いました。その時、演習の申し込みをする、とは告げられていましたが、ずっと話が来なかったので忘れちゃったのかな、と思っていました。
　そうしたら先日、ようやく演習のお話が来たのです。きちんとクランマスターから送られてきた正式なものです。
　当然の話ではありますが、そもそも翔鶴さんは『秘密の花園』クランマスターではあ

りません。そのため、クランマスターの説得が必要だったのかもしれません。あくまで私の勝手な想像ですけど。

「さて、と。そんなわけで演習に向けてブリーフィングといきましょう！」

「とはいえねえ。どうせあたしらは6人しかいないし、選出は固定じゃん」

「うん。だから相手の選出予想と、基本戦術の組み立てをしとこうと思って」

加古の指摘通り、私たち『イーリス・アイリス』はクランメンバーが6人の小規模クランです。演習の形式は12人編成の連合艦隊式ではなくて、通常艦隊式の6人編成しかできません。そして通常艦隊式の演習だったとしても、6人しかいないのでメンバーは固定です。

「どなたか『秘密の花園』のメンバーについての情報や選出してきそうな人の情報はあったりしませんか？」

「うーん……」

みなさんが持っている情報をいただいて。私は演習に向けて作戦を練ります。

クランマスターですから、旗艦を任されるのは私です。ある程度はブリーフィングで共有したとはいえ、その場の即興で対処をする必要にも迫られるでしょう。そうなった

ときに慌ててなんの指示も出せないようでは負けてしまいます。
「考えてるな、古鷹」
「あ、加古」
「演習の戦略でも練ってるんだろ。付き合うよ」
「うん、ありがとう」
　ふたりっきりになったクランルーム。ヒトミさん謹製のテーブルを加古とふたりで囲みます。
　このテーブル、便利なことに艦種ごとにコマが備え付けられているんです。海域図を貼り付ければ、あっという間に作戦会議室のテーブルに様変わりします。
「こっちの選出は決まってるんだし、問題は相手の選出だよな」
「そうだね。構成メンバーが割れてないから、憶測しかできないけど……」
　そう言いつつ、私は相手側に戦艦のコマをひとつと空母のコマをふたつ置きます。
「クランマスターの榛名さん、あと『純白』の五航戦は確実に出てくると思う」
「だな。『秘密の花園』の主力だ。出てこないわけがない」
「となると、あとの３人なんだけど……」
「良くも悪くもあそこは榛名と『純白』の３人が目立ちすぎるからな。他はどうとも言えないな」

「だよねぇ……」

クランマスターの榛名さん、そして『純白』の五航戦。ここのウワサはいろんなものを聞きます。少なくとも実力のない人たちではありません。

そんな人たちがいるクランです。残りのメンバーも素人じゃないでしょう。

「ま、構成的には空母の護衛艦がいるのを想定すべきだろうな。おそらく駆逐艦はいるはずだ」

「問題は防空駆逐艦の時だよね。こっちの航空戦力が戦いにくくなるから」

「そうだよなぁ。生憎と砲撃戦では射程でも火力でもうちのメンツで戦艦には敵わない。そうなると頼みの綱は空なんだが……」

「仮にただの駆逐艦でも防空に振られると厳しいよね。ただでさえ、『純白』と戦えば削られるのに」

いくら『比翼』の名を持つおふたりとて、『純白』と航空戦をしながら防空駆逐艦にまで気を割くのは難しいでしょう。

かといって、射程で負ける重巡洋艦では戦艦と撃ち合えば不利です。加古が近接戦に持ち込むのも難しいでしょう。

さてさて。どうしたものでしょうか。判明している相手のメンバーだけでもすでにこちらが不利です。どうやってこれを覆しましょう。

私と加古の作戦会議はまだまだ続きます。

「さあ、やってまいりました。『イーリス・アイリス』対策会議！」

我らがクランマスターこと榛名さんがそう高らかに宣言すると、まばらながらに「おー」という声があがります。

「メンツはこの６人！　以上！　解散！　閉廷！」

「もう少しくらい真面目にやったらどうなんです？」

ブリーフィング、と言われてクランルームに来てみればこの有様です。それはブリーフィングとは言わないでしょう。

私と瑞鶴が一緒にいられる貴重な時間を取ってまで開いたのです。内容のあるものにしてもらわないとやっていられません。

そもそもメンバーの選出もなにもあったものではないでしょう。我々『秘密の花園』はクランマスターの榛名さん、そして瑞鶴と私の五航戦、青葉さん、北上さん、そして時津風さんの合計６人が所属するクランです。通常艦隊による演習の定数が６人である以上、全員が出るのは確定です。

「めんどくさいです！」

「わー、はっきり言い切った……」
　ほら、瑞鶴呆れちゃったじゃないですか。
「そもそもこの話を持ってきたのは翔鶴さん、あなたでしょう。ならあなたが仕切ったらいいじゃないですか」
「ええ……」
　それでいいんですか。クランマスターとしての仕事を放棄していいんですか。
　まあ、それを言い出すとそもそもこの人はそういうヒト、というだけの結論に落ち着きます。実際、『イーリス・アイリス』と演習をやりたいと言い出したのは私ですし、おとなしく言われたとおり仕切るとしましょう。
「ではクランマスターから拝命したので、仕切らせて頂きます。まず、相手の選出ですが、青葉さん、『イーリス・アイリス』のクランメンバーの情報は？」
「うぇえ？　私ですかぁ？」
「そうです、あなたですよ」
　そういう細かい情報収集をしているのはあなたでしょう。餅は餅屋、です。
　それに、わざとらしく驚いた演技をしているのは知っていますよ。「よくぞ聞いてくれました」って言わんばかりの顔じゃないですか。
「そうですね。まず『双撃』の古鷹さんと加古さん、あとは『比翼の二航戦』の蒼龍さん

飛龍さん。この４人があのクランには所属していますよ」
ふむ。聞いたことのある名前です。
２―５をペアだけで攻略した『双撃』の加古鷹。二航戦称号戦で二航戦の称号を勝ち得た『比翼』の蒼龍と飛龍。
あの称号戦は私も見ていました。『双撃』の実力は不明ですが、『比翼』の実力は半端じゃありません。
二航戦称号戦の決勝戦で見せた艦載機操作権の完全共有をされたら、私と瑞鶴で正面切って勝つのは難しいでしょう。認めるのは癪ですが。
「あとはそうですねぇ。裏付けのない情報ですが、駆逐艦が１人加入したってウワサですよ。他にはヒトミサーティーンが加入してるって話もあります。まあ、こっちは不確定情報ですけど」
「ヒトミサーティーン……というとあの伊号潜水艦ですか」
「ですです。こんな特徴的な人、彼女以外にはないでしょう」
青葉さんはなんでもないことのように肯定。しかしこれは些かよろしくない状況です。
こちらの艦隊には対潜攻撃のできる人は、北上さんと時津風のみ。ヒトミサーティーンが出てきたなら、２人にどうにかしてもらうしかありません。

しかし、少し見えてきました。
空母2隻。重巡洋艦2隻。駆逐艦1隻に潜水艦1隻。この合計6隻が現状で『イーリス・アイリス』が選出してくる可能性の高い編成ということです。
航空戦は厳しいものがあるのは認めざるを得ません。しかし、あちらには戦艦級がいません。射程ではこちらが勝ります。
これならば勝機ありです。
「榛名さんの射程を活かして遠距離で仕留めましょう。青葉さんと北上さん、そして時津風さんは接近する敵艦を足止めしてください。そこを榛名さんと連携で撃破します」
「精度の高い砲撃が求められる作戦ですね」
榛名さんの言葉には、言外に弾着観測射撃が必須になりますよ、という意味合いが含まれているのでしょう。ええ、重々承知です。観測機をあげたとしても、制空権を取られては落とされてしまいますから。
つまりこの作戦の要となるのは。
「瑞鶴」
「ええ？　わ、私？」
「そうよ。私たちで『比翼』を押さえるの」
私たちがどれだけ『比翼』に食い下がれるか。この一点にかかってきます。

コラボ企画：クラン対抗戦編２

艦これのブラウザ版に演習があったように、ＶＲ艦これにも演習があります。１対１の演習から、こういったクラン対抗演習、果ては連合艦隊を組んで行う合計２４人も参加するという大規模な演習までできます。

しかも、便利なことに海域の設定から天候の設定までできます。つまりちょっとしたシミュレーションルームのような利用もできる、ということですね。もちろん、演習で公平性を維持するためにすべてランダムにすることもできますし、演習海域というランダム要素を排除した設定にすることもできます。

今回は演習海域設定にしよう、と事前に決めているのでそうした設定はいりません。簡素な岩礁があったり、島がちょこっとあったり。それくらいのものです。

約束の時間になりました。演習場に到着すれば、『秘密の花園』もちょうど到着したようです。

「『イーリス・アイリス』の古鷹です。今日はよろしくお願いします」

「『秘密の花園』の榛名です。申し出をうけてもらい、ありがとうございます」

クランマスターの榛名さんと握手を交わしながら、そっと相手のメンバーをうかがい

ます。

榛名さん、そして『純白』の五航戦。それに北上さんと時津風さん。なるほど、加古が予想したとおり、駆逐艦はいました。秋月型でなかったのはラッキーです。

というか、これだと5人。あとひとりは……。

「ども、青葉です！」

なるほど、最後は重巡洋艦でしたか。しかし青葉さんとは。フネ的には私の妹にあたるところですね。加古もいるので、ここで衣笠が揃えば古鷹型勢揃いなのですけど。

「あ、今回の演習なんですけど、配信しても大丈夫ですかぁ？」

「は、配信ですか？」

配信する方、ままいるんですよね。ゲーム実況の動画をあげている方と同じようなものです。どうやらこの青葉さん、配信者のようです。ブラウザ版では記者のような言動が目立つキャラクターでしたが、その延長みたいな感じでキャラ付けをしているのでしょうか。

「私は構わないんですけど……」

他のみなさんがどう考えるか。それ次第です。

おそらく『秘密の花園』サイドではすでに許可が取れているのでしょう。しかし、私たちのクランがＯＫかどうかはわかりません。だからこうして事前に許可を取りに来

たのでしょう。
「私らはＯＫ。っていうか許可出してないけど、まとめ動画とかＯｕｒＴｕｂｅにあがってるし」
飛龍さんの言葉に、うんうんと蒼龍さんがうなずきます。
そういえばあがってましたね。二航戦称号戦のまとめ動画や、比翼の二航戦合わせシーン集、みたいな動画が。
「私はいいよ。むしろちょっと面白そうですらあるじゃないか」
「構わない」
ヴェルちゃんとヒトミさんも問題なさそうです。
加古は興味がなさそうなので、ＯＫということですね。なにか異論があったら、絶対になにか言いますから。
「大丈夫みたいですねー。それじゃあ、演習前に古鷹さんから一言お願いしますぅ！」
「わ、私ですか？」
どうしましょう。コメントなんて、なにを言えばいいのやら。
「え、えっと。『イーリス・アイリス』の古鷹です！　がんびゃります！」
……。
思いっきり噛みました。恥ずかしくて、顔から火が出そうです。しかも誰ひとりとし

てコメントしてくれないのが余計にキツいです。
「あ、青葉さん。リテイクって……」
「生配信ですよ、これ」
　ですよねー……。知ってました。生配信ですものね。取り返しはつかなさそうです。いったい何人かは知りませんが、配信を見ている方に私の情けない姿を思いっきり放送してしまいました。
「大丈夫ですよ。コメントはきっと噛み鷹さんかわいい、とかですから」
「そ、そういう問題じゃなくてですね！」
「おーい、視聴者どもー。古鷹はあたしのだかんなー」
「もう、加古ぉ！」
　生配信のところになにを言ってくれるんでしょう。青葉さんも「これは『双撃』の熱愛報道ですねぇ！」なんて盛り上がっちゃってますし！
　配信ということはアーカイブが残るはずです。ということは、仮にこの配信を見てなかった人も見れちゃうじゃないですか。
「まあ、まあ。あんまりここで話していても視聴者を待たせちゃいますよ。そろそろはじめましょう」
　榛名さんの取り成しを受けて、ひとまず私は落ち着くことにします。そうです、これ

から演習でした。あんまり慌てふためいてもいられません。なにせ私は『イーリス・アイリス』のクランマスターで、今回の演習の旗艦を務めるのですから。

「それでは古鷹さん。よろしくお願いしますね」

「はい！　こちらこそよろしくお願いします！」

榛名さんから送られてくる演習の申請。きちんとその申請が通常艦隊のものになっているかを確かめてからホロウィンドウの「ＯＫ」ボタンをタップ。

すると新しいホロウィンドウが立ちあがります。まもなく演習を開始します、というメッセージとおよそ１分ほどのカウントダウン。

カウントがゼロになった瞬間に演習海域の転移が開始されます。さあ、クラン対抗戦のはじまりです。

精一杯、がんばっていきましょう！

演習海域の移動が完了した瞬間、私はまず真っ先に瑞鶴を探します。もちろん、艦隊を組んでいるので瑞鶴だけとんでもなく遠方に転移させられるということはありません。

ありませんが、それはそれとして。私と瑞鶴は空を守る必要があります。ならば近く

にいた方が意思疎通もしやすいというもの。そう、決して妹がそばにいてほしいという姉心などではありません。ないったらないのです。

「瑞鶴？」

「ちゃんといるよ、翔鶴ねえ。演習、がんばろうね！」

「ええ、もちろん」

ああ、今日も瑞鶴はなんとかわいいのでしょう。がんばろうね、なんて言いながら握りしめた手を胸の前で構えている姿なんてもう。この姿を撮影して額縁に入れたものを部屋に飾っておきたいくらいです。最高のインテリアになること間違いなしですよ。

「えへん、えへん」

ああ、もう。せっかく瑞鶴の素晴らしさを堪能していたところだというのに。榛名さんの咳払いで中断されてしまいました。まったく、なにをしてくれるのでしょう。

「あのですね。もう演習は開始しているんですよ。姉妹のイチャイチャをやっていないで、さっさと準備してください」

「ええ、わかっていますよ」

瑞鶴と戯れこそしましたが、今が演習だと理解していないわけではありません。しかし、エネルギーの補充というのも大事だと思うのです。そうズイカクニウムの補給です。これがないと私は戦えないので。

「事前のブリーフィング通りにいきましょう。時津風さん、対潜警戒を」
「おっけー」
「特に翔鶴さんと瑞鶴さんの周囲を厳重にお願いします。理由は……」
「相手に空の優位性を取らせないためでしょー？　わかってる、わかってるー」
時津風さんが「よろしくねー」と軽い調子で私と瑞鶴の前に。事前にブリーフィングをしているので、今さら私たちの周囲で対潜警戒をする理由は言われずともわかっていたのでしょう。
私か瑞鶴。そのどちらかが落ちれば、『比翼』の二航戦に対して競り勝つことは不可能です。空の優位が取られてしまえば、あとは一方的に攻撃を受けるのみ。だからこそ、空母は落とされてはなりません。
しかしここで問題があるのです。そう、あちらには潜水艦がいるのです。それも、未発見状態ならば一撃で確実に沈めるという腕前を誇るヒトミサーティーン。
いつ放たれるのか。それがまったくわからない以上、駆逐艦である時津風さんは対潜警戒をしてもらうしかありません。
「よろしくお願いしますね、時津風さん」
「おっけ、おっけー。任せちゃってー」
時津風さんがすちゃりとソナーの反響音を聞くためにヘッドセットを装着。ソナー

の音に耳を傾けはじめます。
「さて、これでひとまずは安心でしょう。時津風さんが見てくれていますし」
「榛名さん、あなたも気をつけてくださいよ」
「大丈夫ですよ。少なくともまだ。なにせ敵艦隊も見えていないんですから」
「そうやって慢心してると知りませんよ」
「そんな、ねえ。榛名が潜水艦の魚雷に当たるわけないじゃないですか」
まあ、気が緩む気持ちはわかります。なにせ狙われているのは自分ではないのですから。しかし先ほど自分で「演習はもう始まっている」なんてことを言った手前、人の振り見て我が振り直せとなってほしいものです。
「ごめ！　これもしかしてもう来てるかも！　回避運動！」
時津風さんがそう言った直後。
ドゴォオオオン！　といきなり爆発音がします。砲撃音がないので、砲弾によるものではないのは明らか。航空機も飛んでいないので、魚雷であるとしか考えられません。ヒトミサーティーンの仕事に違いありません。
ただし、それが直撃したのは私でも瑞鶴でもありません。
魚雷が直撃したのは榛名さんの艤装でした。
見事なまでのクリティカルヒットだったのでしょう。浮力力場を発生させられなく

なった榛名さんの艤装は、榛名さんもろとも海の下へと沈んでいきます。
「あの……榛名、さん？」
　さっきの自分の言葉、忘れてませんよね？　潜水艦の魚雷なんかに当たらない、とか豪語してませんでしたっけ？
「あー……。えーっと、ですね……」
　艦隊全員からのじっとりとした視線に、鋼メンタルを誇る榛名さんでさえさすがに気まずかったのでしょう。
　悪あがきに応急修理を試みているようですが、あれだけのクリティカルヒットに効果があるはずもなく、うんともすんとも言わない艤装は鉄の塊以上の働きはできそうにありません。
　ついに諦めたのでしょう。榛名さんはげふん、とひとつ咳払いをして。
「てへぺろ！」
「「「「てへぺろ、じゃねえええええ!!」」」」
　かわいいと思っているんですか！　こつんと頭に手を当てて？　それでぺろりと舌を出して？　それで許されると思ったら大間違いです！　さんざん自分は大丈夫的な発言をバンバン飛ばしておきながら、一撃で轟沈判定とか！
「どうするんですか翔鶴氏！　あの色ボケ戦艦、一発目で落ちましたよ！」

「私に言わないでください！　こんなの想像できるわけないじゃないですか！」
「ご、ごめんね？　私のソナーに引っかかったの、ほんとにギリギリだったから」
「時津風さんは悪くありませんよ。直前でしたけど、警告はありましたし」
　むしろこれは慢心しまくったあの淫乱戦艦にすべての責任があります。敵はヒトミサーティーンなんて二つ名を持つトップクラスの潜水艦。直前だったとはいえ、攻撃を感知した時津風さんはむしろよく警告をできたものです。
　あれほどの潜水艦相手なら、攻撃さえ察知することができないことさえ想定されていました。
「時津風さん、潜水艦は？」
「もうソナーで捉えてるよ！」
「そのまま自由にさせないでください」
「わかったー」
　潜水艦はゲームシステム上、未発見状態での雷撃にダメージボーナスが付くスキルが存在しています。そうでもしないと潜水艦という艦種はゲームシステム的に活躍しにくいため、運営からの一種の救済措置なのですね。そしてこのスキルを取っていない潜水艦は皆無といってもいいくらいです。
　確実にヒトミさんもこのスキルを保有しているはず。となれば、時津風さんに見失わ

せてはまた誰かが落とされてしまいます。
「青葉さん、旗艦を引き継いでもらえますか」
「青葉ですか!?」
「『比翼』と戦いながら指揮までする余裕はありませんので」
そう言えば、青葉さんも納得してうなずいてくれました。青葉さんが指揮をできるかはわかりませんが、この中ではこのゲームについて造詣が深い方です。任せてもなんとかしてみせるでしょう。
「瑞鶴。相手はあの『比翼』だけど、やれるわね？」
「うん。全力でいくよ」
瑞鶴の声に余裕がありません。それは私も同じです。なにせ相手は称号戦で『二航戦』の名前を取っているほどの実力者なのですから。
しかし、ナメられたものです。真っ先に潜水艦で狙ったのが戦艦とは。
潜水艦で私たち空母のどちらかを狙ってくると予想したのは、『比翼』の二航戦が私たちとの制空戦を有利に進め、航空隊で攻撃してくるだろうと考えたから。
ですが実際に狙われたのは戦艦の榛名さん。私も瑞鶴もターゲットではありませんでした。
「私たちごとき正面から戦っても勝てる、と。そういうことでしょう？」

はるか遠く。まだ見えない『比翼』の二航戦を睨みつけながら、私はつぶやきます。

「その侮りは高くつきますよ、『比翼』の二航戦」

少なくとも。

あなたたちは虎の尾ならぬ、鶴の尾を踏んだのです。

ただで済むとは思わないことです。

コラボ企画：クラン対抗演習編３

私と蒼龍と古鷹さんと加古さん。合計４人の索敵機が周囲を索敵しながら進む。演習のシステム上、相手がどこに転移されたのかはわからない。こればっかりは自分で見つけるしかない。

ただし、今回は敵艦隊を見つけるためじゃなくて敵が予想外の行動を取ってくることがないようにするため。すでに私たちは敵艦隊を捉えていた。

「こちらヒトミ。無事に目標は沈黙」

「了解です！　以降は爆雷に警戒しつつ、そのまま潜航を続けてください」

「承知した」

まずは第一段階成功。さすがはヒトミちゃん。戦艦の装甲を一撃で抜くのは難しいはずなのに、見事に落としてくれた。しかも魚雷一発で。うん、さすがだと思う。

戦艦の榛名さんが落ちたおかげで、古鷹さんたちは砲撃戦における射程距離の不利は解消できた。

そしてヒトミちゃんのおかげで敵艦隊の位置はすでに判明済み。

なら、あとは私たちがあの五航戦のふたりを抑えて倒せば趨勢は決する。空から無防

備なところにひたすら攻撃を浴びせられるのだから。
「蒼龍、やるよ」
「んー……わかった」
蒼龍のやる気メーター的にはおそらく6割から7割くらい。まあ、ぼちぼちというところのはず。ちょっと不安はあるけれど、どうにかなる、と思う。いざとなったらこっちで蒼龍の尻を蹴りあげてやればいいだけだし。
「それではいきましょう！」
古鷹さんの一声で私たちは陣形を取る。私と蒼龍を後衛に据えて、中距離で対空戦闘と援護に古鷹さんが。そして最前線で近接戦闘をする加古さんとヴェルちゃん。
「今回の戦闘、私が加古とヴェルちゃんの援護に回らないといけません。だから、あんまり対空戦闘にいけないんですけど……」
「大丈夫、五航戦はどうにかする。任せて」
いくよ蒼龍。そうやって引っ張って後ろへさがる。
「うーん。飛龍、ＦＢの２番。とりあえずこれで様子見しよう」
「わかった」
とりあえず合わせを使うくらいのやる気はあり、と。それならちゃんと戦えるか。
なにせ相手は二つ名持ち。『純白』の五航戦だ。最低でも合わせくらいは使わないと、

確実に負ける。

息を合わせて航空隊を発艦。あがっていく航空機を示し合わせたとおりに編成して、ひとつの航空隊へと組み合わせていく。

「敵航空隊見ゆ。攻撃開始」

蒼龍の号令に合わせて航空隊を前進。相手も早急に航空隊をあげていたらしい。まあ、こっちが先に潜水艦で仕掛けている以上、位置がバレてることはわかるはず。とりあえず警戒であげておくというのは判断として間違っていない。

ただし、あがってきた航空隊はひとつだけ。

わざと？　でも数は明らかにひとりの空母から発艦させたものじゃない。まさかこっちに対抗するため、強引に合わせモドキを打ってきた？　だったらずいぶんと甘く見られたもの。

そんな即席の真似事で本家をどうにかできると思われたのなら、心外だ。

「こっちもそれなりに練習して合わせを完成させているんだってば！」

そうこうしているうちに交戦開始。

前面に押し出した蒼龍の機体が一気に責め立てる。エンジンがうなりをあげ、機銃の弾丸が交錯するなか、有利な場を取ろうとする敵機に対して私が操る艦載機で牽制をかける。

なるほど、悪い腕じゃない。二つ名を持っているだけはある。そこらのプレイヤーなら、蒼龍の突撃でだいたい落ちるし、それをうまく避けられたとしても私の搦め手でだいたい落ちる。でも、『純白』の航空隊はあまり積極的に攻撃してこない代わりに最小限の犠牲で押さえている。

なにより。

「衝突しないなぁ」

『純白』が合わせを使えるなんて話は聞いたことがない。というか、そもそも私らに迫るレベルの数を合わせで使える話自体を聞いたことはない。なのに、衝突などのミスが一切起こらずに戦えている。

「なーる。そーゆーことね。航空隊を合体させて、翔鶴がすべて操ってるのか」

「ああ。じゃあ、瑞鶴の方が補給専任か」

「まあ、それだけじゃないっぽいよ。翔鶴がキャパオーバーしないように、航空隊からはぐれた艦載機は瑞鶴が操って戻してるみたい」

「私らの合わせ一歩手前ってとこかな」

でも、動かし方に不慣れが見える。たぶん、私らと戦うに当たって『純白』なりに突貫工事の工夫をこらしてきたのだろう。

合わせの有利な点は航空隊の機体数を増やせること。だから『純白』も翔鶴がひとり

で合体させた航空隊を操ることで機体の数を増やしてきたのだろう。
「うーん、ダルいなぁ。テキトーに相手しておいて、古鷹さんたちがあっち倒しちゃうまで待つ？」
「あのさぁ、蒼龍。もうちょっとくらいやる気を出そうよ」
「でも実際そうじゃない。ナメてたわけじゃないけど意外にやるよ、あのふたり。こっちの雑な合わせをなんとかやり過ごすくらいには。だったら、接戦にしといて援護を待った方がいいんじゃない？」
一見、すごーく真っ当な判断に見える。ただ、蒼龍とは長い付き合いだ。私はよぉくわかっている。
これ、めんどくさがっているだけだ。
ただ、めんどくさいと言うとさすがに状況的によろしくないからそれっぽい理論武装をして自分を正当化しているだけ。
「古鷹さんたちの方もたぶん大丈夫だしさ。数の有利は取れてるし」
それに関しては概ね同意するけれども。かなり古鷹さんが綿密に戦略を練っていたのは知ってるし、いつも戦闘時に指揮を執ってるのは古鷹さんだ。本人は旗艦を務めるのは苦手だってよく言っているけれど、生来の気遣いな性格のおかげか広く見ている。
まあ、いってもこれはただの演習だ。わざわざ蒼龍のやる気を必死になってかき立て

るほどじゃないか。
「逃げるな『比翼』！　二航戦の名はその程度ですか！　私たちを舐めないでもらいたいものです！　これなら『珠玉』の方がよほど上ですね！」
わざわざ通信にまで乗せて私たちに届くようにするほどとは。あちらの翔鶴さん、えらくご立腹だ。まあ、戦略的に行動しているという言い訳の元に手を抜いているわけだからそう思われても仕方ない。
「煽ってくるなぁ。ねえ、蒼龍。……蒼龍？」
「飛龍、Ｙｏｕ　ｈａｖｅ　ｃｏｎｔｒｏｌ」
……。
まじですか、蒼龍さん。え、あれやるんですか。全力出してくれるのはありがたいんだけど、手筈ではもし五航戦を落とせたならその後に残存艦隊を航空機で叩く予定になってるんですけども。
そして、それ使ったら確実にそのあとしばらく私らはほとんど行動不能になるんですが。
「ひーりゅーうー？」
ああ、それでも。あの焔が点いた目を見ると、ついついやる気にさせられてしまう。後先考えずに全力を尽くす快感に、私も浸りたくなってしまう。

「しょうがないなぁ。はいはい。Ｉ　ｈａｖｅ　ｃｏｎｔｒｏｌっと。じゃあ、行くよ」
「Ｗｅ　ｈａｖｅ　ｃｏｎｔｒｏｌ!!」
使用した瞬間、脳にガンガンと響くような感覚が走り始める。
あーあー、やっちゃった。そんなことを考えている一方で、全力を出し切る昂揚感に身を浸して楽しんでいるのだから私も同罪だ。
「二航戦蒼龍から艦隊へ。今からあの生意気な五航戦とサシでやりあうので手出し無用でよろしくぅ！」
さあ、全力でやり合おうか『純白』の！

まったくやってられない。いつも指揮を執っている節操無しで脳内ピンク一色の我らがクランマスターは、さんざかエラそうな口を叩いておきながら即落ち二コマ。
翔鶴氏は……私に指揮を押し付けてきたのは許しがたいところですが、状況的には致し方なしです。がんばって『比翼』をおさえてくれていることですし、それは評価しましょう。
「ったく……私、指揮とかあんまりやったことないんですってば！」
そもそも戦闘だってそこまで得意としてるわけじゃない。いつもは榛名氏の長距離

砲撃で攻撃しつつ、近づいてくる敵の牽制くらいしかしないのですが。

「うっわぁ！」

加古氏のパンチを辛うじて避ける。主機は全開でとにかく距離を取った。けれど、加古氏は私との距離を即座に詰めてくる。敏捷度（AGI）のステータスで、私は加古氏に負けているのでしょう。

おそらく、加古氏のステータスは敏捷度（AGI）と攻撃力（STR）に振っているのでしょう。近接攻撃からの砲撃というスタイルからも、この推測はほぼ的中のはず。

つまり、私の勝ち目が薄いということです。

「北上氏！」

「あいあいさー」

甲標的からの雷撃。加古氏の進路をそれで塞ぎ、なんとか私は距離を取ります。わずかにできた一瞬の時間。時津風氏の状況を確認します。

うん、なんというか予想通り。ヒトミ氏の警戒に意識を割かれてしまうため、Ｂｅｐ ＨＩＹＯ氏との戦いでかなり劣勢に立たされているようです。

「うん、意外とセクシーなのを穿いてるじゃないか。ヒモか」

「なぁにみてんのさ、もー！」

……劣勢なんでしょうかね、あれ。弄んでいるの間違いな気がするんですが。しか

し、どのみち時津風氏が全力を出せていないため、まともに戦えていないというのは否めないでしょう。
「青葉っち、回避！」
「うわ、あっぶなっ！」
大急ぎで回避運動。するとゼロコンマ数秒後に私がいた場所に砲弾が降り注ぎます。北上氏の忠告がなければ直撃をもらっていたでしょう。
「この砲撃、古鷹氏ですか……！」
精度がかなり高いですね。集中して意識を向けていなければ、避けることは難しそうです。
なのに。
「おっ……らぁ！」
加古氏の回し蹴り。間一髪で回避しても、直後に加古氏の主砲が放たれます。仕方なしと私は副砲を切り離して盾にすることで難を逃れました。
「やるねえ」
「お褒めに預かり恐縮です！」
口笛でも吹いていそうな加古氏の賞賛を受けながら、大急ぎで距離を取ります。牽制のためにまき散らした砲撃も、すいすいと加古氏には避けられてしまいました。

「ほんっと、やらしいことしてくれますね……！」

加古氏が最前線で大暴れ。そちらに意識を割かれてしまうと古鷹氏の砲撃を避けられない。かといって、古鷹氏に意識を持って行くと、加古氏の攻撃に対処ができなくなる。

こういうのは時津風氏が普段は相手をするところなのですが、あいにくと潜水艦のヒトミ氏を常に警戒しないといけないのでまともに行動ができません。

いえ、それは時津風氏だけではないでしょう。私たちも、いつ海面下から魚雷が飛んでくるか。そんなプレッシャーを常に感じたままの戦闘を強いられています。

「優しい顔してエグい戦法取ってきてくれますねぇ、まったく！」

強かといいますか。鬱陶しいことこの上ありません。こちらのやりたいことを一切させないよう、徹底しています。

まずは古鷹氏を落とす。現状、司令塔でありサポーターでもある古鷹氏があちらの要です。

「主砲、照準……」

加古氏からの蹴りを後退して回避しつつ、主砲を回頭。仰角を調整して照準を古鷹さんに合わせます。すでに演習開始から何度か砲撃はしているので、どのくらいの角度でどれくらい飛ぶかは大まかに把握できています。

ターゲットはもちろん古鷹氏。加古氏への牽制として魚雷を放つと、確実に当てるため私はあえて海上で停止。砲塔の仰角を固定して照準をつけると私は艤装へ砲撃の命令を送ります。

私の主砲が火を噴きます。火薬の爆発に速度を与えられた砲弾が砲口より顔を出して。

それ以上は飛んでいくことなく、私の目の前で爆発します。

爆風に煽られて私は大きく後退。砲撃した砲塔はひどくひしゃげて、もう使い物になりそうにもありません。

暴発した？　いえ、このゲームのシステムに砲弾の初期不良による暴発なんてものはありません。ならばなにがあったのでしょう。理解が及ばないまま、私は周囲を見渡して。

古鷹氏の主砲が硝煙を吐き出しているのを見つけます。

「ウッソでしょう!?」

まさか古鷹氏、砲弾が砲口から飛び出してくる瞬間を狙撃したんですか！

ええ確かに砲弾が完全に飛び出してしまうと放物線の軌道を読んで撃つのは不可能です。速度は常に変化し続けますから、それを瞬時に計算して攻撃に反映するのはスパコンでも持ってこない限り無理でしょう。

それに比較して、砲口から飛び出す瞬間ならまだタイミングも読めなくはないですし、砲弾の場所も固定化できます。

しかし、だからといってそこを正確に撃ち抜くことなどできるものでしょうか。

砲撃の精度がかなり高い？　前言撤回です。あれはかなり、なんて生易しいものじゃありません。ミリ単位の距離にコンマ数秒単位で的確に撃ち抜ける精度の砲撃なんて、もはや必中です。

まずいですね。この勝負、時間をかけるほどこちらにとって不利になっていきます。翔鶴さんのことを疑うつもりはありませんが、なにせ相手はあの『比翼』です。二航戦の称号を実力で勝ち取ってくる強者に、どこまで翔鶴氏が食い下がれることか。

本人でさえ、『比翼』に勝てるとは言いませんでした。あの根拠のない自信に満ち満ちている翔鶴氏が「抑える」という言葉を選んだ意味くらい、私にもわかります。

賭けに出るしかありませんね。どうせこのままなら敗北するのみです。

「時津風氏！」

「なにさー？」

「全力で暴れてください！」

「でも潜水艦はどうすんの？」

「青葉が偵察機で見張りますので！」

潜望鏡を偵察機で追いかけ続ければ、どうにかなるでしょう。私の負担は増えますが、現状を打破するためにはどうしようもありません。

現状、私たちは完全に古鷹氏の術中にはまっています。時津風氏なら、この状況を打破するカギになります。北上氏はテクニカルな雷撃で戦闘しますが、逆にいえば格闘戦は得手とはいえません。この中で加古氏と正面から戦えそうなのは、時津風氏しかいないのですから。

「北上氏、時津風氏！　全力攻勢です！　早急に突破して翔鶴氏たちの援護に入りますよ！」

カタパルトから水上偵察機が飛んでいきます。これが吉と出るか凶と出るか。あとはもう出たとこ勝負！

コラボ企画：クラン対抗戦編４

「古鷹、状況が変わった。やつら時津風をフリーにしてきやがった」
「うん、見えてる！」
　時津風さんを狙い撃ちしたいところですが、加古に対して常に取りつかれているせいでフレンドリーファイアを気にして撃てません。加古と格闘戦で張り合ってくるなんて、あの時津風さんは相当な腕前です。ヴェルちゃんが北上さんの相手をしてくれていなければ集中攻撃で加古は落ちていたかもしれません。
「あっぶないっ！」
　青葉さんからの砲撃を蛇行で回避。全砲門をこちらに向けることで精密な狙いをつけられない状況を補っているのでしょう。こちらとしては回避に専念しなければまぐれ当たりをもらいそうです。
　ずっと趨勢はこちらの有利でした。しかし、時津風さんが戦線に加わってきたことでそれが均衡に持ち込まれてしまいました。
「ヒトミさん、時津風さんのマーク外れましたけど雷撃はいけますか？」
「無論、出来ないとは言わないがあの重巡洋艦の水上偵察機が飛び回っている。浮上し

たところで発見されるから、確実に当てる保証はできない」
潜水艦の監視役の交代をした、ということでしょう。どうやらあの時津風さん、かなり攻撃寄りのステータス構成になっているようです。逆に青葉さんは艦隊の補助に寄ったステータスなのでしょう。青葉さんの攻撃参加率は確実に低下しましたが、むしろ攻勢は強くなりました。
「わかりました。現状のまま待機でお願いします」
ヒトミさんの雷撃は不可視の状態で放てば一撃必殺です。あまり迂闊に弾数を使うわけにもいきませんし、なにより浮上したところで爆雷を受けて大破判定なんてもらってしまうと、せっかくの海面下からのプレッシャーがかけられません。
さて、どうしましょうか。二航戦のおふたりが『純白』の五航戦を倒して援護に来てくれるのを期待しましょうか。それまで均衡状態を維持しておけば勝ちはこちらになるはずです。
そんなふうに私は旗艦として頭を回します。しかし、そちらに意識を割きすぎて他を疎かにしてしまったことが私の最大のミス。
すぐそこに魚雷の航跡。
「あっ」
気づいた時にはもう手遅れ。炸裂した魚雷は私の艤装を半分近く吹っ飛ばして、機能

不全へと陥らせます。
ダメージコントロール。とにかく航行不能になることだけは避けなくてはいけません。行動すらできなくなれば、いい的です。
「古鷹！」
「ほらほら、よそ見よくないよー？」
「くそったれが……！」
時津風さんによってお腹を蹴り飛ばされた加古が大きく後退。青葉さんからの砲撃は、主砲を一門、犠牲にすることで辛うじて加古は直撃を避けます。
「加古、私は大丈夫！　まだやれるから！」
損傷的には中破でしょうか。攻撃オプションがいくらかやられてしまったので、火力の低下は痛いです。
それにしても、まったく気づきませんでした。交戦している距離から雷撃を届かせようとすればさすがに私も気づくので、これは北上さんの甲標的でしょう。敵ながらお見事です。
《あー、あー。古鷹さん、聞こえる？》
通信ごしに飛龍さんの声。どうやらあちらの戦況が動いたのでしょう。
「飛龍さん！　そちらはどうですか？」

《そのことなんだけどね。いいニュースと悪いニュース、どっちから聞きたい？》

　このタイプの問いかけっていいニュースは本当に喜ばしいことなんですけど、悪いニュースは本当に事態が悪くなるニュースなんですよね。

　とはいえ、聞かないわけにもいきません。私は旗艦です。報告を受けたら、戦況を見極めて指揮をしないといけません。

「ではいいニュースからいいですか」

《おっけー。いいニュースは、『純白』の五航戦はどっちも大破にしたよってこと》

「さすがです！」

　二つ名をもらっているペアです。実力は並々ならぬものなのは言うまでもありません。しかしそこは称号戦で二航戦の名前を勝ち取っている『比翼』の二航戦です。空母同士の対決で無事に勝利してきてくれました。

《で、悪いニュースは私らも行動不能。中破させられたから、航空攻撃もできないかな》

「……えっ？」

《いやぁ、ごめんね古鷹さん。あの生意気な翔鶴が煽ってくるもんだからイラっとして『Ｗｅ　ｈａｖｅ　ｃｏｎｔｒｏｌ』を使っちゃって。勝ったのはいいんだけど、瑞鶴がちゃっかり発艦させてた攻撃隊にやられちゃった》

　あー、そういえば空母が中破してしまっても事前に発艦していた艦載機ならなんとか

操れるんでしたっけ。ただ補給ができないので、攻撃は一発限りですし、航空燃料が尽きたらそのまま落ちていくようですけど。

たしか『Ｗｅ　ｈａｖｅ　ｃｏｎｔｒｏｌ』って、とんでもなく脳を酷使するとかで使用後はしばらく動くのも大変だとか。全力で『純白』の五航戦を大破させたのはいいものの、瑞鶴さんの攻撃隊に行動不能のところをやられてしまったのでしょう。

《だから使うのやめようって言ったのに……》

《えー、飛龍だってノリノリだったくせに》

なにやら『比翼』の中で言い合っているようですがええっと、つまり。

「『純白』は倒したけれど、蒼龍さんも飛龍さんも行動不能……ってことですか」

《まあ、そういうことになるかな。ほんっとにごめんね》

なるほど。相討ち、ということですか。

これは予定が狂いました。空からの支援をわりと期待していたのですが、これでは得られそうにありません。

まあ、その代わりに相手から空で攻撃されるということもないでしょう。それはいい点ですね。

この演習、勝負はすべて私たちにかかってきました。

しかし、これはあまりよろしくはありません。遠距離から援護砲撃をする私の砲門が

雷撃で一部脱落したせいで、加古もヴェルちゃんも戦いにくくなっています。この均衡の天秤、遠くないうちにあちらへ傾くでしょう。

仕方ありません。しかし、『純白』の五航戦も脱落したならばうまくいく公算はあります。

「ヒトミさん、奥の手を！」

「承知した」

「加古、ヴェルちゃん！　決めにいくよ！」

「了解！」

さあ、一気呵成に攻め立てて、勝負を決めに行きましょう！

「ヒトミから旗艦古鷹へ。奥の手、準備完了だ。だれを狙う？」

「そうですね……」

残っている敵は青葉さん、北上さん、時津風さん。この三人、だれからやりましょうか。

よし！　決めました！

「北上さんでお願いできますか」

「承知した」

青葉さんはヒトミさんの監視で思うように行動できていません。なら、雷撃が厄介な

北上さんを狙うのがいいでしょう。時津風さんも考えましたが、あの反応速度では不意打ちでも避けられてしまう可能性が否定できません。

連続で何度も使える手ではありません。一発で確実に決めていかなければいけません。

気づかれてしまっては形無し。狙いを雑に副砲と機銃を連続で撃って私は意識を攪乱させます。

そして。

爆弾が投下され、北上さんを襲います。

「っくぅ……」

フロート付きの水上爆撃機が空を飛び回り、離脱していきます。たった今、爆弾を投下したばかりのせいか、投下前よりも素早い飛行です。

もちろん、爆撃の一発ごときで倒せるとは思っていません。ですが、足が鈍ってしまえばそれで十分。

なにせ私、スナイパーですから！　なんのために照準性能（DEX）のステータスにポイントを多めに振っているのか。その真髄をご覧あれ、です！

「ごめん、青葉っちぃ……」

一撃をもって決める。それこそ、砲撃の正確性を追及していった到達点でしょう。足

が鈍った北上さんを私の主砲が撃ち抜き、轟沈判定がくだった瞬間は思わず顔がほころんでしまいます。

まあ、ヒトミさんの晴嵐が爆撃したダメージ含めてではあるので厳密には一撃じゃないんですけどね。

「ここで晴嵐……？　でもどこから……」

そこまで言ってから、青葉さんはなにかに気づいたようにはっとした表情。

「まさか演習開始と同時に！」

「ご明察です！」

演習が開始してヒトミさんが潜航する前に晴嵐を飛ばしてもらい、早々に着水させたら島影にずっと待機させていました。空母が使う艦載機と違って、フロートを持っている水上爆撃機は海面から飛び立つことができます。

五航戦のおふたりが残っていたら、絶対に使えない手でした。なにせ、晴嵐で艦上戦闘機と戦うのは不可能ですから。飛ばしたところで落とされてしまっておしまいです。

けれど、二航戦のおふたりが相討ちにしたおかげで空母戦力は無力化されました。艦載機が飛んでくることはありません。

それなら、水上爆撃機も活躍できます。対空砲さえ回避できれば、爆撃できますから。

気づかれないように工夫は必要でした。副砲と機銃の乱射をしたのは、意識を空に

もっていかないようにするためと、砲撃音で晴嵐が飛んでいる音を隠すためでした。
あまりに活躍の場が限られるから奥の手。本当の最終局面になってから切れる札として序盤から仕込んでおいた保険がこれです。
「ヴェルちゃん、青葉さんを！」
「うん、任されたよ」
これで北上さんを押さえていたヴェルちゃんがフリーです。任された、という言葉通りに青葉さんにヴェルちゃんは向かっていき、砲撃を加えていきます。
その間、私は時津風さんに集中。加古は時津風さんと互角に渡り合っているようですし、そこまで心配はいらないでしょうけど支援に入るのならこっちです。
問題ありません。青葉さんはじきに落ちます。ヴェルちゃんの攻撃に晒されながら、ヒトミさんが放つ海面下からの魚雷まで気を向けるのは不可能ですから。
ほら、水上偵察機の意識を疎かにしてますよ。飛行パターンがさっきから一定です。
「ヒトミさん、チェックメイトです」
「心得た」
その返事があってすぐ、青葉さんが艤装ごと吹き飛びました。間違いなく轟沈判定です。
「あっちゃあ……。これは無理だなぁ。うん、こうさーん」

時津風さんが武装を捨てて両手をあげます。私が遠距離から狙い、加古とヴェルちゃんが近距離で詰め寄っています。さらに海中からヒトミさんの魚雷が睨みをきかせていて、空では晴嵐が獲物を狙うタカのように旋回している状況。四面楚歌とはまさしくこういうシチュエーションでしょう。

時津風さんは手をさっと振ります。あれはホロウィンドウを展開している動作です。おそらく、演習画面から降参を選択しているのでしょう。

ビビー、とブザーが演習場に響き渡ります。自動的に私の前にホロウィンドウが開きました。

演習終了。『イーリス・アイリス』の勝利です。そんな事務的なメッセージは、まぎれもなく私たちの勝ちを保証してくれるもの。

こうして『秘密の花園』と『イーリス・アイリス』の演習は幕を閉じました。

ラスト・スタンド

「とりあえず全員が集まっているようですね」
　ある日。珍しく、というわけでもありませんが私たちはクランメンバーを招集しました。それも名目はイベント攻略やマンスリー任務の消化などではなく、緊急会議。普段、こんな理由でメンバーを集めたことはなかったので、へんだと思われたのでしょう。少しクランルームの空気がピリついています。
　ぐるりと見渡せば、飛龍さんと蒼龍さんの二航戦、そしてヴェルちゃんとヒトミちゃんが居住まいを正します。加古はクッションから起き上がると私のとなりに来ました。
「おや、加古がそっちに行くのは珍しいじゃないか」
「まあね。ただ今日はちょっと特別なのさ」
　はい、特別なんです。いつもならブリーフィングは私だけで仕切ります。加古はあくまで一介のクランメンバーとして参加するだけです。
　でも今日、加古が立ったのは私のとなり。不思議に思われるのも当然です。
「ええっと、今日はしておかないといけない話があるんです」

そう切り出した瞬間、さらにクランルームの空気が締まりました。こんなふうに私が話を切り出すのは初めてです。みなさん、なにかしらの違和感を覚えたのでしょう。

「もう少し先の話にはなりますが、私がしばらくゲームにログインできなくなります」

「で、それに伴ってあたしのログイン率も落ちると思う。一応、クランマスターはあたしが一時的に引き継ぐけど、『イーリス・アイリス』の活動は大きく落ちる」

「……二人ともゲームに飽きた、ってわけじゃないよね？」

飛龍さんが訝しげに聞いてきます。ええ、もちろんです。私はこのゲーム、大好きですから。クランメンバーにも恵まれていますし、まだまだやりこむつもり満々です。

ログインができないやんごとなく事情、というやつがあるんです。

「ま、事情は説明するよ。ただ、これを説明しようと思ったらちょいとリアルの事情が絡むんだ。あんまり聞きたくないって場合はログアウトしてくれ」

加古が後頭部をかきながら切り出してくれました。こういう手の話題を私から出すのは苦手なので、それをわかった上での行動でしょう。

実際、ゲームで一緒にプレイしている人のリアルを持ち込んでほしくない、という人は一定数います。クランのような形態を取っているゲームでは、どうしたってプレイヤーのリアル事情が絡んでくるので仕方ないことではありますが。

でも、あえてそこの事情は聞かず、ただ「リアルの都合で」だけでＯＫとしてくれる

人もいます。そこは人それぞれ、ということでしょうか。
しばらく待ちました。けれど、だれもログアウトはしていきません。ロールプレイ重視っぽいヒトミさんとか、嫌がるかなぁと思っていたんですがそうではないみたいです。
「んじゃ、単刀直入に言うけど。あとだいたい二か月後くらいかな。古鷹が入院する」
「入院!?」
二航戦のお二人がきれいにハモりました。
「病気なのか？」
「ああいえ、そうではないんです、ヒトミさん」
入院、といわれて病気のイメージが出てきてしまうのはしょうがないと思います。でも、私は別に病気というわけじゃありません。むしろリアルの私は健康体です。
いや、訂正です。健康体ではない、かもしれませんね。ちょこちょこ不調はあったりします。ただ、そんな大病を患ってはいません。不調も病気が原因のものじゃないですし。
ただ、こう。なんと言いますか。自分で言うのはちょっと恥ずかしいですね。私の事情ですから、私が話すしかないんですけど。
「えっと。実は私、妊娠しているんです」

……。

クランルームが静かになってしまいました。

「えっと、数の子を生む魚？」

「蒼龍、それはニシン」

「ベータカロチンを豊富に含む地下茎を食べる野菜」

「ヴェル、それはニンジン」

「……わ、私？」

無言でヒトミさんを見つめてうなずく二航戦とヴェルちゃん。ツッコミは飛龍さんなのでしょうか。ボケをヒトミさんに振るのはちょっと酷な気もしますが。

「……どうせ問題ないと高を括る」

「「それは慢心」」

いえーい、と謎のテンションで4人はハイタッチ。正確には困惑しているヒトミさんと謎テンションな残り3人、と言うべきかもしれませんが。

「ってそうじゃないでしょうがぁぁぁ！」

あ、飛龍さんが正気に戻りました。ちゃぶ台があったらひっくり返してそうです。幸いにも、今のクランルームは和室テイストではなくて一般家庭のリビング風。洋風建築なのでちゃぶ台はありません。

「え、ちょっと待って。キャパオーバーした。妊娠？　それはその、お腹の中にお子さんがいらっしゃる、という意味での？」
「そういう意味ですね、はい」
　私はうなずいて認めます。不思議な小芝居が挟まりましたが、ようやく元の筋に戻ってきたようです。普通、妊娠と聞いてニシンだのニンジンだの慢心だのは先に出てこないと思うんです。
「ごめんね。すこーし私の情報処理に付き合ってほしいんだけど。古鷹さん、ご結婚なさってるってことだよね」
「ええ。」

「とにかく。そういうわけで古鷹のイン率が落ちる。勝手で悪いが、理解してくれると助かる」
　私は深々と頭をさげます。こればかりは完全に私の個人的な都合です。それにクランメンバーを付き合わせるのですから、私が頭を下げずしてなんとしましょう。
「まあ、そういう事情なら仕方ないよー。ね、飛龍？」
「そうだね。その間はしばらく野良で活動すればいいし、そんな気に病まないでね」
「本当にすみません。ありがとうございます」

正直、ちょっと胸を撫でおろしました。みなさんが文句を言うところを想像していたわけではないのですが、それでも私の都合で迷惑をかけることに変わりはありません。なにかしら言われても仕方ないかな、という覚悟はしていました。

あっさりとＯＫを出してくれた二航戦のおふたりに、小さくうなずいたヒトミさん。

そして無言でなにかを考え込んでいるヴェルちゃん。

「ヴェル、どったの？」

「あ、いや。うん。別になんでもないよ」

蒼龍さんの問いかけに、珍しくヴェルちゃんが言葉を濁します。

「ヴェル公がためらうなんて……明日は魚雷が降るよ」

「失礼な。私だってプレイヤーとしての良識くらいあるよ。これ言っていいのかな、と思って踏み止まっただけさ」

「「どの口が？」」

息びったりに蒼龍さんと飛龍さんがツッコミます。まあ、ヴェルちゃんって普段からアクセル全開な感じがしますし、あんまり否定もしにくいところですね。

「いやね。古鷹さんが活動休止する理由はいいじゃないか。でも加古まで一緒に活動頻度が落ちるのはなぜかと思ってね」

「結局言っちゃうんだ……」

「もうヒントは出てるし、加古も古鷹さんもあまり隠そうとしてないからね。さて、考えてもみてほしい。妊娠で入院するのに、加古までログイン頻度が落ちるのは不思議じゃないかな」

「言われてみればまぁ……」

「加古は古鷹さんの親族じゃないのかな。兄弟とか従姉妹とかくらい近い関係性の。いや、たぶん違うかな」

ヴェルちゃん、鋭いですね。わりといいラインを突いています。どうやら二航戦のおふたりとヒトミさんも薄々ながら悟ったようですね。まさか、という顔を浮かべます。

「古鷹さんのお腹の子のパパさん、とか?」

「あー、まあ、うん。ねぇ……」

どうするよ。加古がアイコンタクトで私に聞いてきます。

もう話しちゃったんです。ここまで来たのなら、今さらでしょう。ちいさくうなずけば、私の意図は加古に伝わります。加古の目が気だるそうに「りょーかい」と言います。

「どうも、古鷹の旦那です」

加古ががりがりと後頭部をかきながら言いました。あれ、恥ずかしがって照れ隠しをするときのクセなんですよね。正真正銘の夫婦ですし、婚約したばっかりってわけでもないのだから照れなくてもいいのに。そもそもプロポーズはあなたからだったし。

せっかくですし、ちょっとイタズラしちゃいましょうか。
「この人の妻でーすっ！」
えいっと加古の左腕を抱いて、柄にもなくピースなんてしちゃって。ちょっと私、はっちゃけモードです。年甲斐を考えろ？　うふふ、そんなこと言う人には２０．３㎝砲でズドンですよ。そもそも私、まだまだ若いですし。これいうと、なんか年寄りくさいですけど。
「お、おい……」
「もう言っちゃったんだし、いいかなーって」
そもそも妊娠報告した時点でリアルもなにもありませんし。このカミングアウトがあるまで、私の性別だって男性なのか女性なのかわからなかったはずです。
元々の性別が女だったので、実はロールプレイが意外と簡単だったんですよね。ブラウザ版を少しだけ触っていたこともあって、『古鷹』というキャラクターはある程度つかめていましたし。
さて、さすがにそろそろ真面目な話に戻しましょうか。抱いていた加古の右腕を離して、場の空気を戻すためにちょっとだけ咳払い。
「入院するにあたって、加古にも負担をかけることになるので加古のイン率が落ちます。今日び、病院にもＶＲ環境やネットは通ってますし、ログインできるんですけど出産前

はゲームしている余裕はないでしょうし」

　なんでしたっけ、ＱＯＬでしたっけ。あれ、なんかこれ違う気がします。まあ、とにかく入院患者の生活もずっとベッドの上で過ごすだけだと退屈だろうからいろいろできるようにはしよう、みたいな理由でなんかいっぱい導入されているんですよね。たしかＶＲ環境の整備もその一環だ、とかなんとか。

　えらい人の研究で妊婦にＶＲをさせても胎児に悪影響を及ぼすことはないということがわかってますし、寝たきりの人にとっては外と関われる貴重な機会にもなります。意外に感じますけど、医療の面でも役立つことは多いそうです。

「そんなわけですから、私事ですけどクランの活動が鈍ってしまいます。他クランに入って活動してもらってもいいですし、脱退申請だって受け付けます。もちろん、私が復活してからまた入りたい、と言ってくれるなら再加入だってＯＫですから……」

「古鷹さん、野暮はそこらへんにしとこうよ。私たちは待つよ。ね、飛龍？」

「うん。こう見えても前のクランでは軽くいざこざ起こして辞めてるからね。もう行く先なんて自慢じゃないけどあんまないから」

　それは本当に自慢じゃないと思います。というか自慢していいことじゃない気がします。

「私たちの心配をするより、自分の体の心配をするべきだと思う」

そしてヒトミさんからは至極まっとうな指摘が。でもそうなんですよね。出産なんて経験ないので、正直だいぶ不安だったりします。から元気気味なハイテンションで現状は乗り切っていますけど。

「私はほかにも所属しているクランがある。それに野良で遊ぶことだって十分に可能だよ。だからそこまで心配する必要はないんじゃないかな。それにこのクランは自由が気風じゃないか。好き勝手に集まって、好き勝手に遊んでいるんだからまた古鷹さんたちが戻ってくれば好き勝手に集まるさ」

ヴェルちゃんからの言葉にうなずくなどして肯定のリアクションをみなさんが返してくれるので、私の胸はなんだかいっぱいです。突発的に作って、いろんな経緯を経て結成された小規模なクランですが、このメンバーが集まってくれて本当によかったと心から言えます。

「それではみなさん、またここで」

そうして2ヶ月後。

私の入院が決定したと同時に『イーリス・アイリス』の活動は完全に休止しました。

――3年後――

ＶＲ艦これは定期的にイベントを開催する。そうなると通常のゲームでいうところの酒場と同じ役割を果たす食堂には、イベントを攻略するために艦隊を組もうとするプレイヤーがたくさん詰めかけるのだ。

そんな中で知り合いを見つけたのだろう。ふたりのプレイヤーが軽く片手をあげてあいさつをして、近くのテーブルに座る。

「イベントが始まったけど、今回はどう？」

「今回こそ最終海域まで到達したいな」

「いいねえ。私もちょっとがんばろうかなぁ」

そういえば今回は空も砲撃もバランスよく配置された敵編成らしいよ。マジか、大変そうだなぁ。

お互いに情報交換をしながら、攻略の道筋を立てていく。まだパーティー申請していないものの、艦隊を組むつもりの会話だった。

そんなとき。人ごみが割れて、どよめくような声。

「え、なになに？」

何事か。おどろいたのか、片方が思わず席を立ち上がる。そして背伸びをしながら、必死になって人ごみを割った原因を探ろうとする。
「なにが見えた？」
「６人……。たぶんパーティーだと思う。これから出撃なのかなって感じがする」
「メンツは？」
座ったままの仲間に艦娘の名前を伝えていく。すると何かに気づいたらしい相方は神妙な顔つきで口を開く。
「もしかしてさ。その艦娘のＩＤってこんなんだったりする？」
「正解。お知り合い？」
「そっか、まだ君ははじめてから2年くらいだったね。まあ、知らないのは無理ないよ。なにせ3年前に活動休止してからというものの、ずっと動きがなかったんだ」
そっか、活動再開するんだ。そんなふうに、彼女はひとりごちる。

あの人のうわさを聞いたことがある。
二航戦タイトルマッチには常に上位へ食い込み、交互に『灰燼』と二航戦の称号をかけて戦う屈指の空母コンビ。

あの人のうわさを聞いたことがある。
ＰＶＰにおいてその身軽さを活かして立ち回り、相手を煙に巻くような行動で高笑いをする駆逐艦。
あの人のうわさを聞いたことがある。
ワンショットワンキル。海面下へ秘かに潜み、一撃をもって沈める不可視のスナイパー。
あの人のうわさを聞いたことがある。
互いにスタイルこそ違えど、攻めに振ったスタイル。まったく違うレンジからお互いをカバーし続ける息のあった重巡洋艦コンビ。
たった６人の小規模クランでありながら、そのクランメンバーはいずれも指折りの強者揃い。大規模な攻略クランにも一目置かれている少数精鋭のクランだ。
そのクランの名は。
「さあ、いきましょう。イベント海域、攻略開始ですっ！」
「「「「了解!!」」」」

『イーリス・アイリス』

キャラクター紹介

古鷹・本名は逢月翠。旧姓は小高。逢月憐（加古）とは幼馴染。艦これとの出会いは、憐が艦これのブラウザ版をやっていたことから興味を覚えて自分もやってみたことがはじまり。なんとなく加古のキャラクターが憐に似ていることからカッコカリ艦を加古に選んでいた。ちなみにプレイキャラクターで古鷹を選んだのは憐の嫁艦が古鷹だったため。つまり最初っから夫婦コンビだった。基本的にはお淑やかだが、憐に対してのみたまにＳっ気が顔を出すことがある。怒ると怖い。高校生のときのこと、憐が寝坊してデートの待ち合わせに2時間遅刻してきたときは、フルスイングのビンタをお見舞いし、その後一週間は口をきかなかった。平謝りした憐に、ピエール・マル〇ーニのチョコレートセレクション（１６個入り）で手を打った。

結婚前はＯＬ。今は専業主婦。ちなみに妊娠したタイミングは酔っぱらってゲームにログインした事件の直後。ゲーム内だけじゃ収まりがつかなかったそう。性欲強そう（作者の偏見）

加古：本名は逢月憐。古鷹のキャラクターが翠に似ていることからカッコカリ艦にしていたが、気恥ずかしさから翠本人には婚約時まで明かさなかった。明かしたときは翠

にいじられまくって（夜に古鷹のロールプレイでやられたなど）少し後悔した。プレイキャラクターに加古を選んだのは、翠と同じ理由で似てる、と言われたから。夫婦プレイもまた一興かな、と乗った。

翠に対しては社会人になってからそこそこに仕事も安定し、貯金もできはじめた3年後にプロポーズした。幼馴染だったせいか、すでに親同士は公認ですさまじくあっさり婚約までいった。むしろ遅いと叱られた。高校生時代からずっと周囲から実質夫婦と言われ続けただけはある。本人はモテないと思い込んでいたが、そりゃあ嫁さんポジの翠と始終一緒にいれば挑戦する女子がいるわけない。だって完全に予約済み物件だもの。

最近の悩みはまだ見ぬ娘の名前をどうするかと、娘にいつか「お父さんと一緒に洗濯しないで！」と言われるんじゃないかということ。

飛龍・本名は梅田空太。蒼龍（渋沢聡治郎）と同級生。比翼のいつも振り回される方。といいつつも、乗せられやすい性格のために実は同罪なことも多い。航空戦では正面からのドッグファイトが苦手な代わりに、からめ手のようなテクニカルな戦闘が得意。わりと広く戦闘を見ているので、蒼龍が明らかに周りを見れずに暴走したときはストッパーをかける役割を担う。

大学の成績は可もなく不可もなく。まんべんなく単位を取っている。所属している

ゼミで蒼龍とのホモ疑惑をかけらているのが悩み。腐女子の先輩からよだれを流して見つめられていることに頭を抱えている。しかし、さすがにその先輩がこっそりと飛龍と蒼龍をモデルにしたナマモノの同人誌を作っていることは知らない。でも知らない方が幸せなこときっともある。先輩的には飛龍が受けらしい。彼女の代表作は「大学ハンサムーバカと単位と今宵の勉強会（ラブソンディ）」。ちなみに教授も腐っていたらしく、「卒論もいいけど、キマシタワーもね？」と謎の期待をされている。

蒼龍：本名は渋沢聡治郎。飛龍（梅田空太）と同級生。中学からの付き合い。比翼の気分屋な方。得意としているのは正面から艦載機をぶつけ合う、切った張ったのドッグファイト。ただ、直情型ゆえに引っかけを食らうと立て直しができない。慎重型で尻込みしがちな飛龍を引っ張る役割を担う。判断の早さや思い切りの良さはいいのだが、周囲を見ずに突き進んでしまい、痛い目を見ることも多い。また、やる気のあるなしで戦闘の質がかなり変わる。

リアルでもこんな性格なので、成績はやる気のある時とないときでムラがひどい。わりと留年を危ぶまれるレベルまでいったことがあるが、なんだかんだ飛龍に助けられた。「お前人生楽しそうだよな。悩みとかなさそうだし」と周囲から言われるのが目下の悩み。しかし、実際にその他に悩みという悩みはないので周囲が正しい。実家が太いため、実はさりげなく着ている服がいいブランドだったりする。

以前、ＳＮＳの比翼の蒼龍アカウントにおいて悪ふざけでＡｍ○ｚｏｎの欲しいものリストを公開していたら、なぜか石膏像を５つも送りつけられる事件が発生。部屋の半分が石膏像に占拠され、まるで部屋が古代ローマの神殿のようになった。以降、比翼の蒼龍アカウントでは欲しいものリストの一切を封印している。

Ｂｅｒｎｙｙ：本名は真壁・ヴィコフスキー・裕二。ロシア人と日本人のクォーター。見た目はかなりロシア人っぽいのだが、中身は純然たる日本人。祖母がロシアに住んでいるため、長期休暇はロシアを訪れることが多く、ロシア語も話せる。妹がひとりいるが、こちらも見た目はロシア人美女。兄のことをお兄様と呼ぶちょっと痛い子。

愉悦部。人をおちょくるためならたとえ火の中水の中。ちゃんとやれば頼れる強さなのに人をからかうためなら何でもするため残念なことになりがち。本人としては最低限の線引きはしている、らしい。

最近、就職したばかりの新社会人。会社の上司が取引先の受け付けと愛人関係になっていることを突き止めており、ひと悶着ありそうだとひそかにワクワクしている。その上司のことは嫌いなので、煮るなり焼くなりされてしまえばいいと思っている。ヘッドハントされたら、会社へ法的に問題にならないような仕返しをしてやめてやろうと常々考えている。

伊１３：本名は佐藤仁美。情報デザイン学部の学生。ゲーム内の服とか装飾品とかは

自分で作った。スク水スーツ仕様やスコープ付き長距離狙撃用魚雷発射管、葉巻などやクランの家具やらなんやらのデザインもショップ売りではないものは彼女作。将来の夢はグラフィックデザイナー。

ヒトミを選んだ理由は名前と同じ響きだったから。あのハードボイルドなキャラ付けはゴルゴ13にハマっているため。父親が全巻コレクションしているのを幼少期から読んでいたのが影響した。父親は娘が一心不乱にゴルゴ13を読んでいる姿を見て、変な方向に娘を誘ってしまったのではと後悔したという。母親はおっとりしているため「あらあら、お父さんに似たのね～」で終わった。

性格はものすごく内気。ロールプレイしている時は自分じゃないような気がして、積極的に話せるのだそう。大学に好意を寄せてくれる男性がおり、実はまんざらでもない。が、どうやって接すればいいのかわからない。古鷹さんに相談しようかな、と思いつつもロールプレイ的に合わないし……と煩悶する日々を過ごしている。いっそヒトミサーティーンのキャラで接してみようかな、と考えているがそれは絶対にやめたほうがいいと思う（By作者）